群馬県　前橋市

# 小稲荷遺跡

こ　とう　か

発掘調査報告書

昭和62年

前橋市教育委員会

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

# 序　文

前橋市は、名山赤城山を北に坂東太郎で名高い利根川や萩原朔太郎をはじめ多くの詩にうたわれる広瀬川が市街地を貫流し四季折々の風情にあふれ詩情豊かな県都である。

赤城山南麓、前橋台地上において縄文時代から近世・近代にかけて人々の生活の痕跡を示す遺跡・遺物が数多く存在する。

特に、古墳においてはかって市域に800余基の存在が伝えられている。その中で東国の古墳を代表する前橋天神山古墳を初め八幡山古墳・城南二三子古墳・天川・総社二子山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳等々の国指定史跡がある。また、山王廃寺・上野国分寺・上野国分尼寺・上野国府が本市域西部の総社・元総社に集中して存在する。

古代において前橋の地は、政治・宗教・経済・文化の中心地として栄え東国の奈良ともいわれる。

中世においては、戦国武将の上杉氏・武田氏・北条氏の三氏がしのぎをけづった地である。近世においては、譜代大名の酒井氏・松平氏が居城した関東3大名城の一つ厩城橋があり歴史性豊かな街である。

小稲荷遺跡周辺には、大前方後円墳である前・中・後二子古墳をはじめ多くの古墳がある。また、上西原遺跡・梅木遺跡・荒砥・荒子遺跡における居館跡等々があり、古代上野国を究明する上できわめて重要な地である。

本遺跡より古墳5基　土坑5基　住居跡3軒等が発見された。特に、古墳においては、終末期の横穴式両袖型石室を有する円墳である。古墳の変せん、終末期古墳を究明する上で大変貴重な遺跡である。

本報告書を刊行するにあたり物心両面より援助・協力をいただいた前橋工業団地造成組合に厚くお礼を申し上げます。

また、発掘調査に際し山武考古学研究所、所長をはじめ調査担当者、作業員の方々に感謝申し上げます。

本報告書が斯学の発展のために少しでも寄与できれば幸いに存じます。

昭和62年2月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　　関口　和雄

# 例　言

1．本書は前橋市西大室町に所在する工業団地用地造成（ＬＰＧ基地）予定地における小稲荷遺跡発掘調査報告書である。

2．調査は前橋市工業団地造成組合（管理者清水一郎）の依頼により、前橋市教育委員会指導のもとに山武考古学研究所が担当した。

3．現地調査は山武考古学研究所調査研究員新井順二・平田貴正が行なった。

4．本書の遺物・図面整理は新井・平田が分担し、芦田和義・大塚玲子の協力を得た。

5．本書の編集は新井が行ない、第４章第２・４節の執筆を平田が、他を新井が担当した。

6．本書第６章出土人骨・歯の鑑定を国立科学博物館溝口優司先生に依頼し、玉稿を賜った。記して感謝の意を表わす次第です。

7．出土鉄器の鑑定には東京国立博物館考古課長亀井正道氏、同考古課の諸氏の御教示を賜った。記して成謝の意を表わす次第です。

8．発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の機関のご助言、ご協力を賜った。記して感謝の意を表わす次第です。（敬称略）

前橋市工業団地造成組合　開成測量株式会社

# 凡　例

1．遺構番号は土坑を除き、発掘調査時の番号をそのまま使用している。土坑は調査時に十数基を確認したが、本書では確実に遺構として捉えられる５基を掲載した。

2．第１図は国土地理院発行５万分の１「前橋」を使用した。

3．挿図中に使用したスクリーントーンの表示は下記の通りである。

～ かまど袖　～ 粘土　～ 焼土範囲

～ 石室側奥壁

4．遺物観察表中の法量は、上から口径・器高・底径を表わし、( )を付したものは復元値、あるいは残存値を示す。

# 目　　次

序

例　言

凡　例

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　遺跡の概観 …… 3
　第１節　位置と環境 …… 3
　第２節　周辺の遺跡 …… 3

第３章　調査の概観 …… 5
　第１節　調査の方法と経過 …… 5
　第２節　標準土層 …… 7

第４章　検出された遺構と遺物 …… 9
　第１節　遺構外の出土遺物 …… 9
　第２節　土　坑 …… 11
　第３節　古　墳 …… 13
　第４節　住居址 …… 35

第５章　出土人骨・歯の鑑定結果 …… 43

第６章　まとめ …… 48

写真図版

# 挿図目次


第1図　小稲荷遺跡と周辺の遺跡 …… 2
第2図　試掘トレンチ設定図 …… 4
第3図　標準堆積土層図 …… 7
第4図　発掘調査全図 …… 8
第5図　遺構外出土遺物 …… 10
第6図　1～5号土坑 …… 12
第7図　2号土坑出土石器 …… 13
第8図　1号墳全体図 …… 14
第9図　1号墳石室展開図 …… 15
第10図　1号墳石室掘形図 …… 16
第11図　2号墳全体図 …… 18
第12図　2号墳石室展開図 …… 19
第13図　2号墳石室掘形図 …… 20
第14図　2号墳出土遺物 …… 21
第15図　3号墳全体図（折込み） …… 22
第16図　3号墳石室展開図 …… 23
第17図　3号墳石室掘形図 …… 24
第18図　3号墳前庭部遺物分布図 …… 25
第19図　3号墳石室遺物分布図 …… 26
第20図　3号墳出土遺物（1） …… 27
第21図　3号墳出土遺物（2） …… 28
第22図　3号墳出土遺物（3） …… 29
第23図　4号墳全体図 …… 30
第24図　5号墳出土遺物 …… 31
第25図　5号墳全体図 …… 32
第26図　5号墳石室展開図 …… 33
第27図　5号墳石室掘形図 …… 34
第28図　1号住居址と出土遺物 …… 36
第29図　2号住居址 …… 38
第30図　2号住居址出土遺物 …… 39
第31図　3号住居址 …… 40
第32図　3号住居址カマドと出土遺物（1） …… 41
第33図　3号住居址出土遺物（2） …… 42

# 表 目 次


表1表　2号墳出土遺物 …… 17
第2表　3号墳出土遺物 …… 22
第3表　5号墳出土遺物 …… 33
第4表　1号住居址出土遺物 …… 37
第5表　2号住居址出土遺物 …… 39
第6表　3号住居址出土遺物（1） …… 42
第7表　3号住居址出土遺物（2） …… 44
第8表　小稲荷遺跡3号墳石室出土遊離歯 …… 48


# 図版目次


図版1　小稲荷遺跡全景
図版2　1．試掘調査全景（南から）
　　2．調査風景（北西から）
図版3　1．1号土坑
　　2．2号土坑
　　3．3号土坑
　　4．4号土坑
　　5．5号土坑
　　6．包含層遺物出土状況
図版4　1．1号墳全景（南から）
　　2．羨門部閉塞状況
　　3．玄室奥壁正面
　　4．玄室左壁石積状況
　　5．羨道部開口状況（北から）
図版5　1．2号墳全景（南から）
　　2．羨門部閉塞状況
　　3．玄門（北西から）
　　4．玄室全景（西から）
　　5．羨道部開口状況（北から）
図版6　1．3号墳全景（南から）
　　2．前庭部遺物出土状況
　　3．羨門部閉塞状況
　　4．前庭部遺物出土状況(西から)
　　5．前庭部直刀出土状況(西から)
図版7　1．石室全景（北から）
　　2．石室遺物出土状況(南西から)
　　3．金環出土状況(北から)
　　4．玄室右壁石積状況
　　5．奥壁掘形断面(西から)
　　6．掘形全景（南から）
図版8　1．4号墳全景（東から）
　　2．4号墳全景
　　3．5号墳確認状況（南から）
　　4．5号墳全景
　　5．玄室左壁石積状況
　　6．玄室右壁石積状況
図版9　1．1号・2号・3号住居址全景（西から）
　　2．1号住居址全景（北から）
　　3．1号住居址遺物出土状況

4．　2号住居址全景（西から）
5．　2号住居址カマド
図版10　1．　2号住居遺物出土状況
2．　2号住居址掘形
3．　3号住居全景（西から）
4．　3号住居址カマド（北西から）
5．　3号住居址遺物出土状況
6．　3号住居址掘形
図版11　遺構外・2号土坑出土遺物
図版12　1～3号住居址出土遺物
図版13　2・3号墳出土遺物（1）
図版14　3号墳出土遺物（2）
図版15　3号墳出土遺物（3）
図版16　3号墳石室内出土
下顎骨(上、標本番号3)と右鎖骨(下、標本番号23)の破片
図版17　3号墳石室内出土
同一個体に属すると思われる乳歯
図版18　3号墳石室内出土
同一個体に属すると思われる永久歯

# 第Ⅰ章　調査に至る経緯

前橋市新総合計画（1,978～87）の中に工業団地の造成の現況によると、明日の〝すばらしい前橋〟を形成していくためには、より豊かな都市経営の実現が鍵となります。

この計画の中で工業団地の造成は、有力企業の誘致をはじめ、工場規模の拡張整備・住工分離による産業公害からの回避、中小企業の集団化や協業化による企業体質の強化などきわめて大きな経済効果を生み出します。……と言っている。今後の方向、施策として……工業団地の造成にあたっては、工業適地を中心に用地の確保を図り、公害等の外部不経済を生じない優良企業の誘致や市内企業の協業化、集団化を促進……とある。

このことから、公害のない、優良企業を誘致し都市企業の活性化をはかるために、群馬県経済連のLPG供給基地を建設するために本地域が選定された。

西大室町の本地域は、人家から離れ桑園の中にあり、農業経営に直接影響ないよう配慮して選地されたものである。

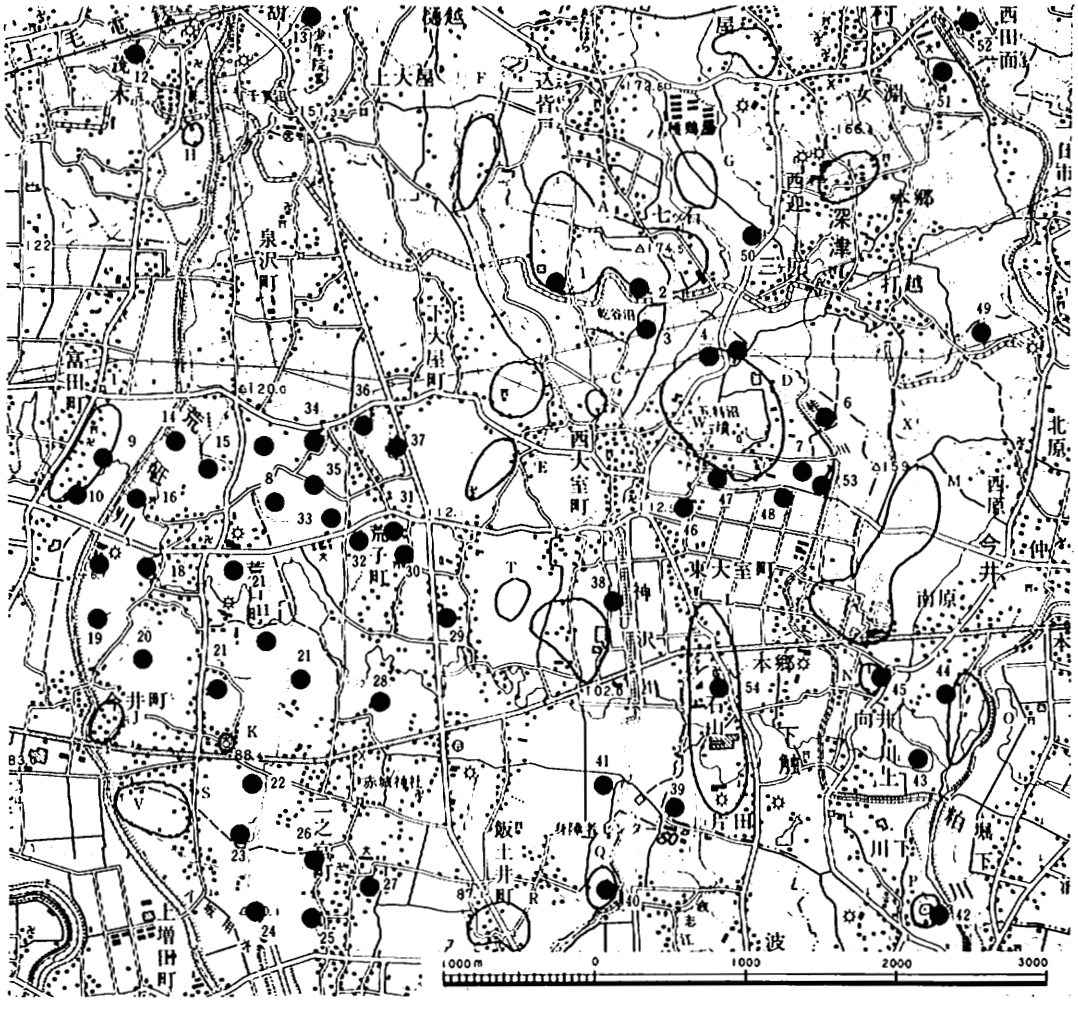
昭和61年７月19日に前橋工業団地造成組合（管理者　清水一郎）より、前橋市西大室町 277—1 ・11,583㎡の地の調査依頼が前橋市教育委員会に提出される。

これにもとずき、前橋市教育委員会と前橋工業団地造成組合と協議・調整をはかる。

その結果、調査費、地元地権者等について、前橋工業団地造成組合が責任をもって対応する。前橋市教育委員会としては、造成計画に支障をきたさないよう調査を実施する。調査の結果により造成計画の変更を申し入れることもあるので協力を願いたい等々について協議し了解を得た。

調査主体に前橋市埋蔵文化財発掘調査団がなり、調査業務を山武考古学研究所が実施することになった。

現地調査を昭和61年８月１日～11月15日とする。調査対象地域全体に20％の試掘調査を実施し、発掘調査の範囲を確定することに約１ヶ月を要し、その後発掘調査をすることが調査工程を計画的に実施できるようにした。




1．小稲荷遺跡　2．七ッ石遺跡　3．北山遺跡　4．上縄引遺跡　5．下縄引遺跡　6．久保沓戸遺跡　7．梅の木遺跡　8．柳久保遺跡
9．東原遺跡　10．宮下遺跡　11．鶴谷遺跡　12．天神風呂遺跡　13．八ヶ峰須恵窯跡　14．荒砥源訪西遺跡　15．荒砥源訪遺跡　16．荒砥宮田遺跡
17．荒砥前田遺跡　18．荒口前原遺跡　19．荒砥北原遺跡　20．荒砥北三本堂遺跡　21．荒砥大日塚遺跡　22．荒砥洗橋遺跡　23．宮川遺跡　24．宮原遺跡
25．島原遺跡　26．荒砥天之宮遺跡　27．青柳遺跡　28．荒砥上2坊遺跡　29．荒砥荒子遺跡　30．荒砥保育所遺跡　31．荒砥中屋敷遺跡　32．荒砥下押切遺跡
33．頭無遺跡　34．荒子小学校々庭遺跡　35．大久保遺跡　36．川龍沓戸遺跡　37．堤東遺跡　38．荒砥東原遺跡　39．牛伏遺跡　40．二之堰遺跡
41．二本松遺跡　42．洞山遺跡　43．川上遺跡　44．今井南原遺跡　45．向井上師遺跡　46．大室小学校々庭遺跡　47．荒砥上源訪遺跡　48．荒砥五反田遺跡
49．稲荷山遺跡　50．西原遺跡　51．渋沢遺跡　52．前田遺跡　53．荒砥上川久保遺跡　54．石山遺跡
A．七ッ石古墳群　B．伊勢山古墳群　C．中島古墳群　D．下源訪古墳群　E．阿久山古墳群　F．上横俵古墳群　G．西原古墳群　H．山ノ上古墳　北本古墳
I．東原古墳群　J．北三本堂古墳群　K．大日古墳群　L．石山片田古墳群　M．鈴山・鶴山古墳群　N．向井古墳群　O．南原古墳群　P．洞山古墳群
Q．二之堰古墳群　R．宿畑古墳群　S．今井神社古墳群　T．立野古墳群　U．九山古墳群　V．今井神社古墳　W．新・中・後二子古墳　X．赤堀条白山古墳

第1図　小稲荷遺跡と周辺の遺跡

# 第II章　遺跡の概観

## 第1節　位置と環境　（第1図）

本遺跡は、赤城山南麓の西大室町に位置する。この地域は第四紀洪積統に属し、関東ローム層が厚く堆積し、それを中小の流れが南北方向に分断している。

周辺には東神沢川、桂川が流れており、開析谷が発達し複雑な地形となっている。本遺跡は乾谷沼北西側のかなり傾斜の強い、標高 138m～ 150mの南に向いた斜面の舌状台地の縁辺部に位置している。

## 第2節　周辺の遺跡　（第1図）

近年、土地改良事業や大規模な開発事業が急激に行なわれ、それに伴う発掘調査によって検出された周辺の遺跡を、本遺跡との関連で、先土器時代から奈良・平安時代中心に概観してみたい。

先土器時代は、三屋遺跡・北三本堂遺跡・牛伏遺跡・石山遺跡・柳久保遺跡で尖頭器を中心とした石器が出土している。今後の調査によって遺跡の数が増えると考えられる。

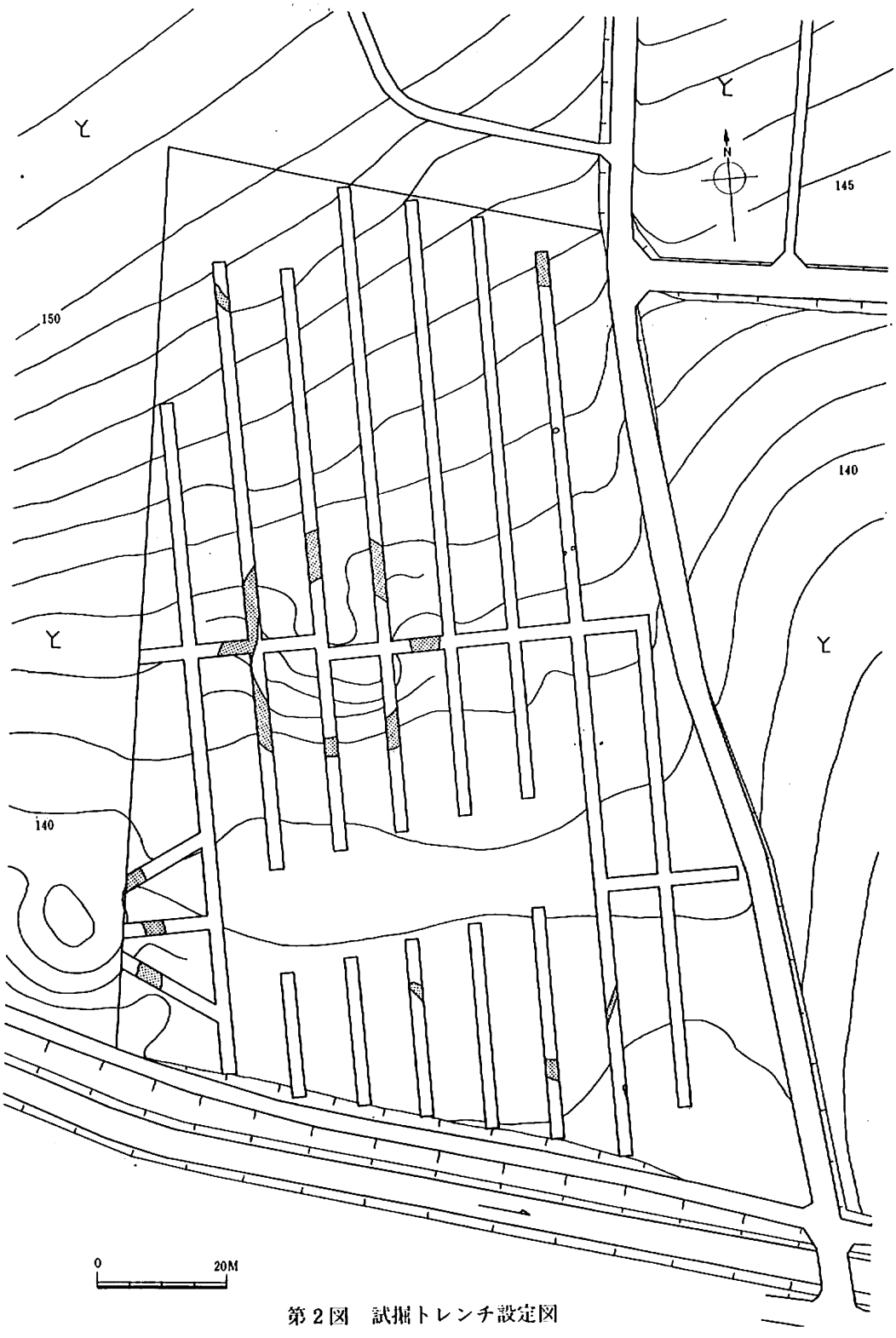
縄文時代は、草創期で北山遺跡・荒砥北原遺跡・北三本堂遺跡に見られる。早期は上縄引遺跡・荒砥北原遺跡・柳久保遺跡に、前期は上縄引遺跡・鶴谷遺跡・荒砥諏訪遺跡・荒砥富田遺跡・荒砥上ノ坊遺跡・洞山遺跡・今井南原遺跡に、中期は上縄引遺跡・荒砥諏訪遺跡・二本松遺跡・二之堰遺跡・洞山遺跡に、後期は上縄引遺跡・烏原遺跡・荒砥上川久保遺跡に見られる。晩期の遺跡はまだ発見されていない。

弥生時代は、中期で烏原遺跡・頭無遺跡・荒口前原遺跡に、後期は北山遺跡・下縄引遺跡・宮下遺跡・西原遺跡に、弥生時代終末期から古墳時代初頭で七ッ石遺跡・上縄引遺跡・北山遺跡に見られる。

本遺跡地周辺には、国指定の前・中・後二子古墳の3基の前方後円墳を初めとして、上毛古墳綜覧に大室分として 178基記載されており、古墳密集地である。この地の古墳は多くは6世紀中頃から7世紀中頃にかけてつくられたものと思われる。この時期の集落跡としは、大室小学校々庭遺跡・大室小学校農場遺跡・大室石原遺跡があげられる。

から7世紀中頃にかけてつくられたものと思われる。この時期の集落跡として、大室小学校々庭遺跡・大室小学校農場遺跡・大室石原遺跡があげられる。

奈良・平安時代になると、本遺跡近隣にも多数の遺跡が存在し、荒砥五反田遺跡・上川久保遺跡・西大室遺跡群（第2次～第4次調査）が見られる。




第２図　試掘トレンチ設定図

# 第３章　調査の概要

## 第１節　調査の方法と経過　（第２図）

調査は、昭和61年８月１日から同年11月15日にかけて実施した。調査対象面積は、11,583m²である。８月１日から試掘調査に入り、８月26日まで実施した。まず地形測量図を作成後、旧荒砥村89号墳の墳丘中心を基点とし、磁北を基準とする幅２ｍのトレンチを10ｍ間隔に決定し、西から東へ１―12と命名した。

試掘調査の結果、古墳、住居址、土坑、ピットが確認され、協議の結果本調査の対象面積を8,900 m²とした。９月８日より古墳、土坑、ピットの部分的調査を開始し、10月18日までに終了。10月20日に空撮を実施、21日より住居址部分の調査を開始し、これと併行して古墳掘形調査とプレの調査を実施、11月15日に発掘調査を終了した。

調査区の設安は、調査グリットは４ｍを最小単位とし、緯線（南北方向）をアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ…）、経線（東西方向）を算用数字（１・２・３…）であらわした。

遺構の調査は、古墳では現況測量図作成後、土層観察用のベルトを設定し、盛土を掘削。石室の平面・遺物分布・展開・掘形図を1/10の縮尺で実測を行ない、総べてを検出後周溝を含めた全体図を作成した。住居址は十字に土層観察用のベルトを設定し、調査は四分法で行ない、カマドも煙道に合わせて十字に切断した。土坑は半載して土層観察を行なった。

以下、日誌により概要を述べる。

**日誌抄**

８月１日～２日　前橋市教育委員会、市商工部工業課との現地での打ち合せ。調査区の試掘トレンチ設定及びティピング、プレハブ設置作業を行なう。

４日～６日　作業を開始する。トレンチのテストピット調査と併行して現状の地形測量図作成及び基準点移動。

７日～９日　残りの10％トレンチ設定及び掘削。併行してトレンチ内の精査及び遺構確認作業を行なう。

18日～26日　トレンチ内の精査及び遺構確認作業終了する。確認の結果古墳４基、住居址３軒、土坑、ピット多数を検出する。全体図作成後、試掘トレンチの全景写真撮影。

27日～30日　試掘調査結果の検討及び本調査の試案作り。

９月１日～６日　旧荒砥村89号墳の墳丘中心を基点とする南北と東西のセクション図作成後、トレンチ内遺物取り上げ。

８日　きようから本調査を開始する。表土掘削作業開始。

11日～13日　表土掘削作業並びに遺構確認を継続し、古墳４基の範囲を明確にする。

18日～20日　古墳及び土坑部分の表土掘削作業を終了する。遺構確認により新たに古墳１

基、土坑、ピットを検出する。確認全景写真撮影。北から1～5号墳と命名する。

22日～27日　1～5号墳の表面精査後、確認全景写真撮影。1、3号墳墳丘コンター図作成。2～4号墳盛土ベルト精査後セクション図作成。土坑・ピット群の遺構確認作業を行なう。

29日～30日　3号墳墳丘遺物分布図作成及び確認全景写真撮影。4号墳周溝調査開始する。

10月1日～4日　1、2号墳石室及び前庭部調査開始。3号墳周溝及び前庭部掘り下げ、前庭部遺物分布図・セクション図作成。4号墳平面図及び西壁セクション図作成。

6日　18日　1、2、3、5号墳前庭部セクション図作成及び写真撮影後平面図作成。石室内割付実測開始。3号墳石室内出土遺物実測と併行して覆土のふるいかけ作業を行なう。土坑の調査開始。遺構外出土の尖頭器の実測図作成及び写真撮影。

20日　全体及び各古墳の空撮を実施する。

21日～23日　1、2号墳石室図面作成継続。3号墳石室掘形調査開始する。4～7号土坑の写真撮影。5、6号土坑セクション図作成する。

24日～25日　住居址部分の表土掘削作業を開始する。1、2号墳石室図面作成後写真撮影。3号墳の墳丘断割セクション図作成。4、7、8号土坑セクション図作成、5、6号土坑写真撮影。

27日～29日　表土掘削作業終了後遺構確認を行ない、住居址3軒を検出する。北から1～3号住と命名する。併行して3号墳石室形平面図作成及び写真撮影。4～8号土坑平面図作成及び写真撮影。

30日～31日　住居址調査を開始する。1～3号住居址の図面作成後、全景写真撮影。1～3号墳石室調査継続する。9、10号土坑図面作成後、写真撮影。プレ試掘形調査に入る。

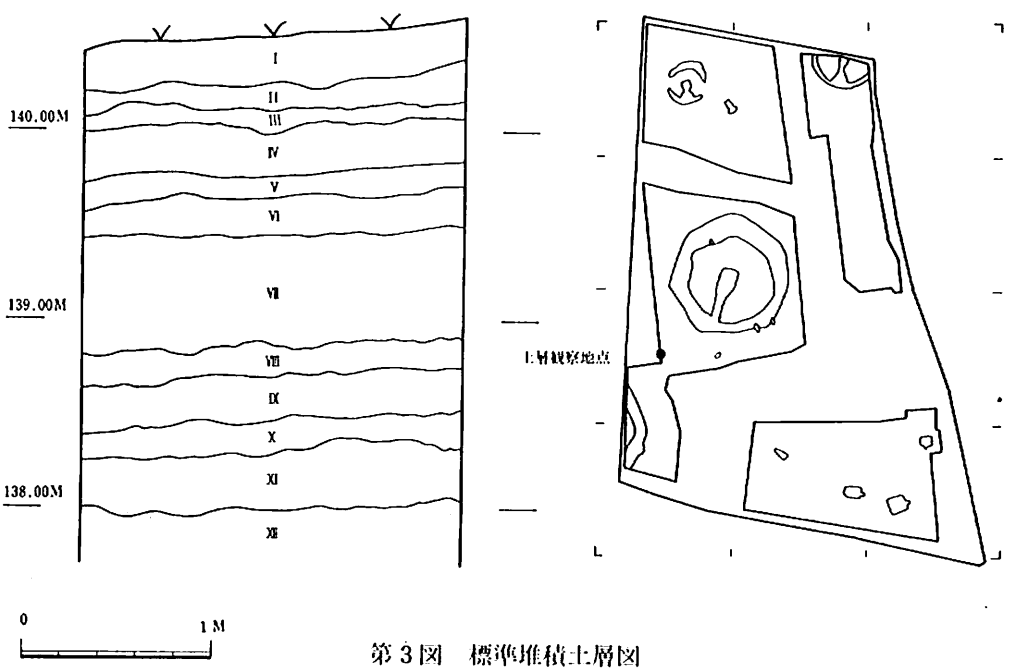
11月1日～10日　1～3号住カマド調査終了後、完掘写真撮影。2号墳石室展開図終了後、掘形調査に入る。5号墳石室掘形調査終了。プレ試掘調査継続。

11日～15日　住居址掘形調査及び古墳掘形調査終了。全体図の作成終了する。これをもって現地調査を終了した。

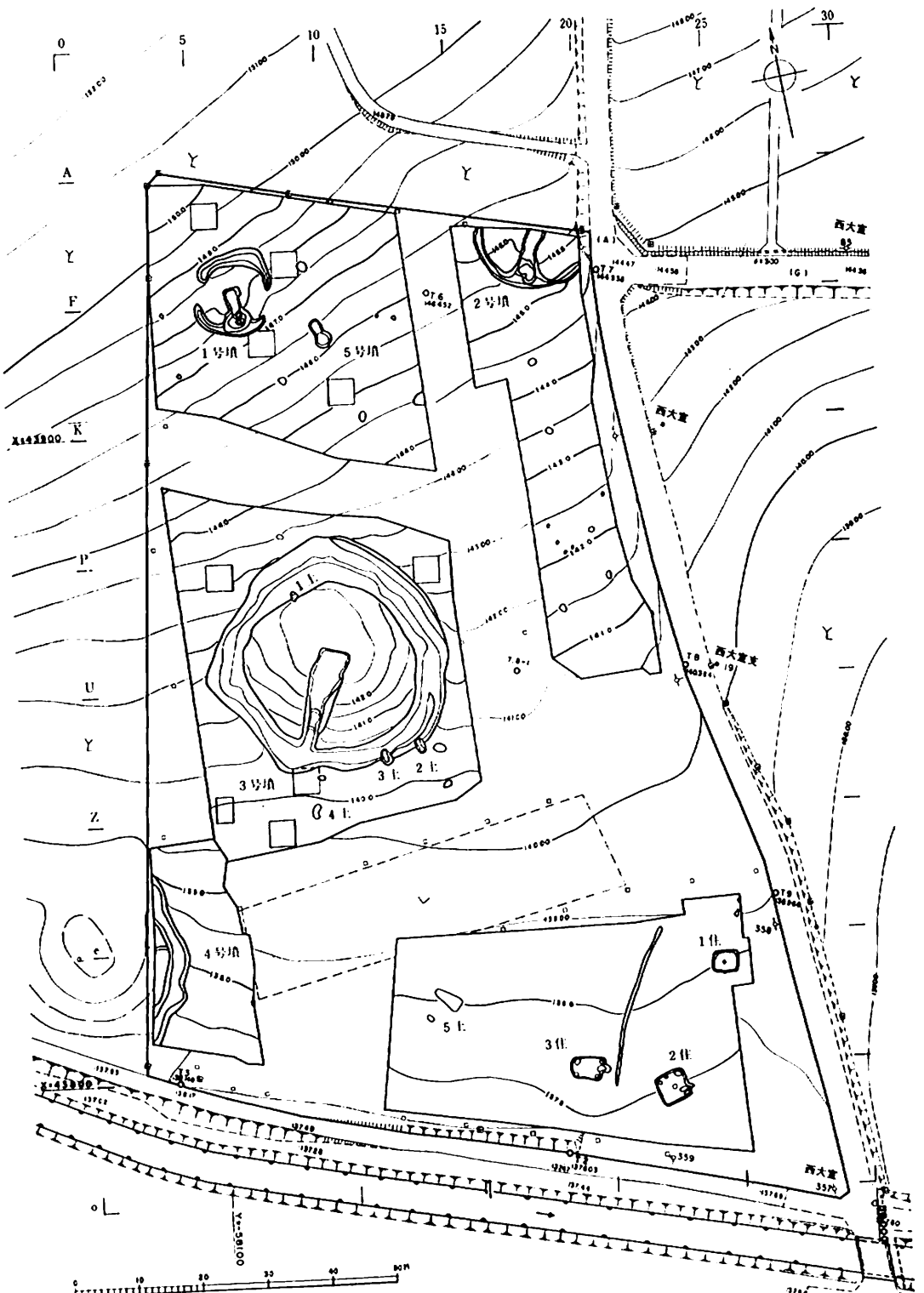
## 第２節　標準堆積土層　（第３図）

調査区域の地形は、南東方向に傾斜する丘陵地である。調査区域内の中央部にテストピットを設定し、標準土層を観察した。

第Ⅰ層　暗褐色土。粘性、締りともに悪い耕作土。浅間Ａ・Ｂ軽石を含む。
第Ⅱ層　黒色土。粘性をわずかに有し、締っている。浅間Ｃ軽石を含む。
第Ⅲ層　黒色土。粘性をわずかに有し、締っている。ローム粒少量含む。
第Ⅳ層　褐色土。粘性を有し、軟かいが締っている。ローム粒、ロームブロックを含む。
第Ⅴ層　黄褐色土。ソフトローム。ロームブロックを含む。
第Ⅵ層　黄褐色土。直径３～５㎜径大の白色軽石（ＳＰ）をブロック状に含む。
第Ⅶ層　黄褐色土。ハードローム。上層でＳＰ粒を少量含む。
第Ⅷ層　黄褐色土。直径１～２㎜径大の赤茶色軽石（ＢＰ）をブロック状に含む。
第Ⅸ層　黄褐色土。ハードローム。粘性が強く締っている。
第Ⅹ層　明黄褐色土。粘性が強いが、あまり締っていない。
第Ⅺ層　暗茶褐色土。粘性、締りとも極めて強い。いわゆる暗色帯である。
第Ⅻ層　明黄褐色土。粘性を有し、締っている。軽石を含む。




第３図　標準堆積土層図




第4図　発掘調査全図

# 第４章　検出された遺構と遺物

## 第１節　遺構外の出土遺物　（第５図）

本遺跡から出土した遺物は旧石器時代の石器１点、縄文時代前期から後期の土器片・石器類が少量、また弥生時代後期の土器片１である。

（１）旧石器時代

尖頭器（第５図―１、図版３―６、11）

Ｘ―８グリット第Ｖ層より出土した。縦長剥片を素材とし、周縁に調整剥離を加えて木葉形を作出する。石質は頁岩、長さ7.2 cm、幅2.6 cm、厚さ0.8 cmの片面加工の尖頭器である。

（２）縄文時代

出土土器（第５図―２～10、図版11）

２は縦位の撚糸文を施文する胴部片である。３は地文にＬＲの斜縄文を施し、横位に半截竹管による平行沈線を３条施文する。４は地文にＬＲの斜縄文を施し、半截竹管による平行沈線を３条曲線的に施文する。色調は共に橙褐色で焼成は良い。３・４は諸磯ｂ式に比定される。

５～７は中期後半に属するものである。５はＲＬ、６・７はＬＲの斜縄文を施す胴部片である。色調は淡褐色を呈し、加曽利ＥⅢ・ＥⅣ式に比定される。

８～10は後期前半に属するものである。８は底部片であり、網代痕を残す。９・10は口縁部片で裏面に１条の沈線を廻らされ、９は口縁部にＴ字状、10は２条の幅の狭い隆帯が施され刺突文を施文している。共に堀之内Ⅱ式に比定される。

出土石器（第５図―12～17、図版11）

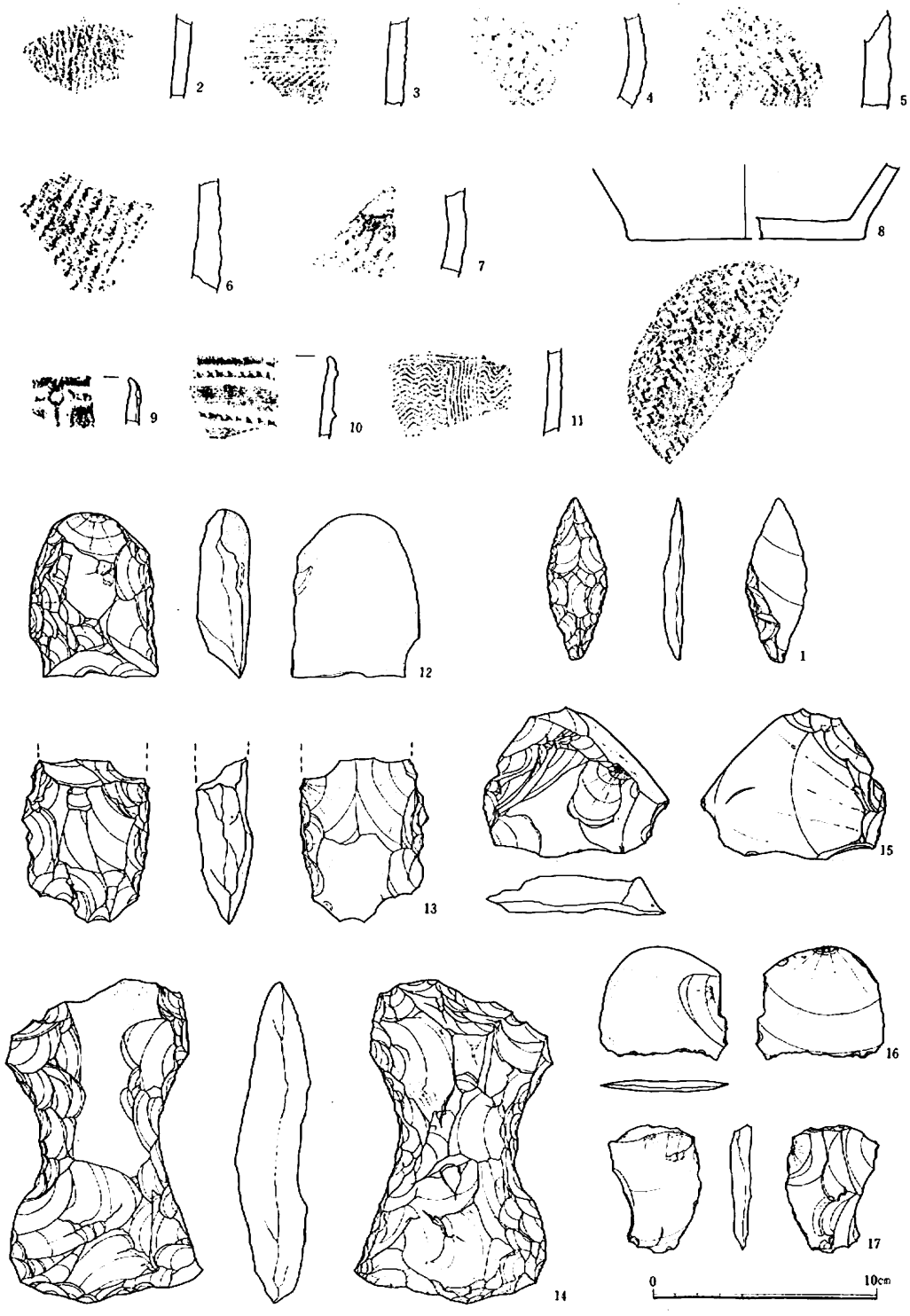
すべて包含層から検出されている。石器の内訳は礫器、打製石斧、スクレイパーである。12は片面剥離片を素材とし、周縁に調整加工を施し打撃点を残す。また裏面は自然面を残す。石質は頁岩、長さ7.6 cm、幅5.6 cm、厚さ2.3 cmの礫器である。13・14は打製石斧である。13は粗い剥離後周縁に細部加工を施す。片面に自然面を残し、刃部は丸く作出されている。基部欠損品であるが現長7.3 cm、幅5.6 cm、厚さ2.2 cmで短冊形を呈する。14は粗い剥離後細部加工を施し、背面に自然面を残す。刃部は幅広で側辺に抉りをもたせ、長さ14.3cm、幅8.3 cm、厚さ2.8 cmで分銅形を呈する。

15～17はスクレイパーである。15は大形剥片を表材とし、粗い剥離加工により刃部を作出している。片面に打撃点を残し、断面三角形を呈する。長さ6.6 cm、幅8.3 cm、厚さ1.6 cmである。16は打撃点を残し、自然面側からの片面加工により刃部を作出する。石質は、黒色頁岩、長さ4.7 cm、幅5.6 cm、厚さ0.4 cmである。17は縦長剥片を素材とし、周辺を細部加工により刃部を作出している。石質は頁岩、長さ5.7 cm、幅3.8 cm、厚さ0.9 cmである。

（３）弥生時代

出土土器（第５図―11、図版11）

胴部片で櫛歯９本を横位に波状、縦位にＴ字状の直線文を施す。後期の樽式に比定される。




第５図　遺構外出土遺物

## 第2節　土　坑

本遺跡では、調査時に10数基の土坑を検出したが、調査を終了した時点で確実に遺構として捉えられた5基を掲載することとし、整理時に番号を変更した。調査時の番号4・6・5・7・9を1～5に変更した。

**1号土坑**　（第6図、図版3－1）

本址はQ－8グリッドに位置し、3号墳々丘と同周溝の一部を壊す形で検出された。また上面を近世の耕作により撹乱されている。0.64×0.79mの平面楕円形を呈し、深さ1.36mを測る遺物は検出されず、時期不明である。

**2号土坑**　（第6・7図、図版3－2、11）

本址はW－13グリッドに位置し、3号墳周溝に壊される形で検出された。1.44×2.45mを測る平面楕円形を呈し、深さ1.32mを測る。また下部の形状はひょうたん形を呈し、床面にはローム と粘質土の混合土が貼ってある。この床面下にて南北に3本の小ピットが検出された。覆土中より（スクレイパー）が出土しており、覆土・形状・遺物より縄文時代の陥し穴と考えられる。

**3号土坑**　（第6図、図版3－3）

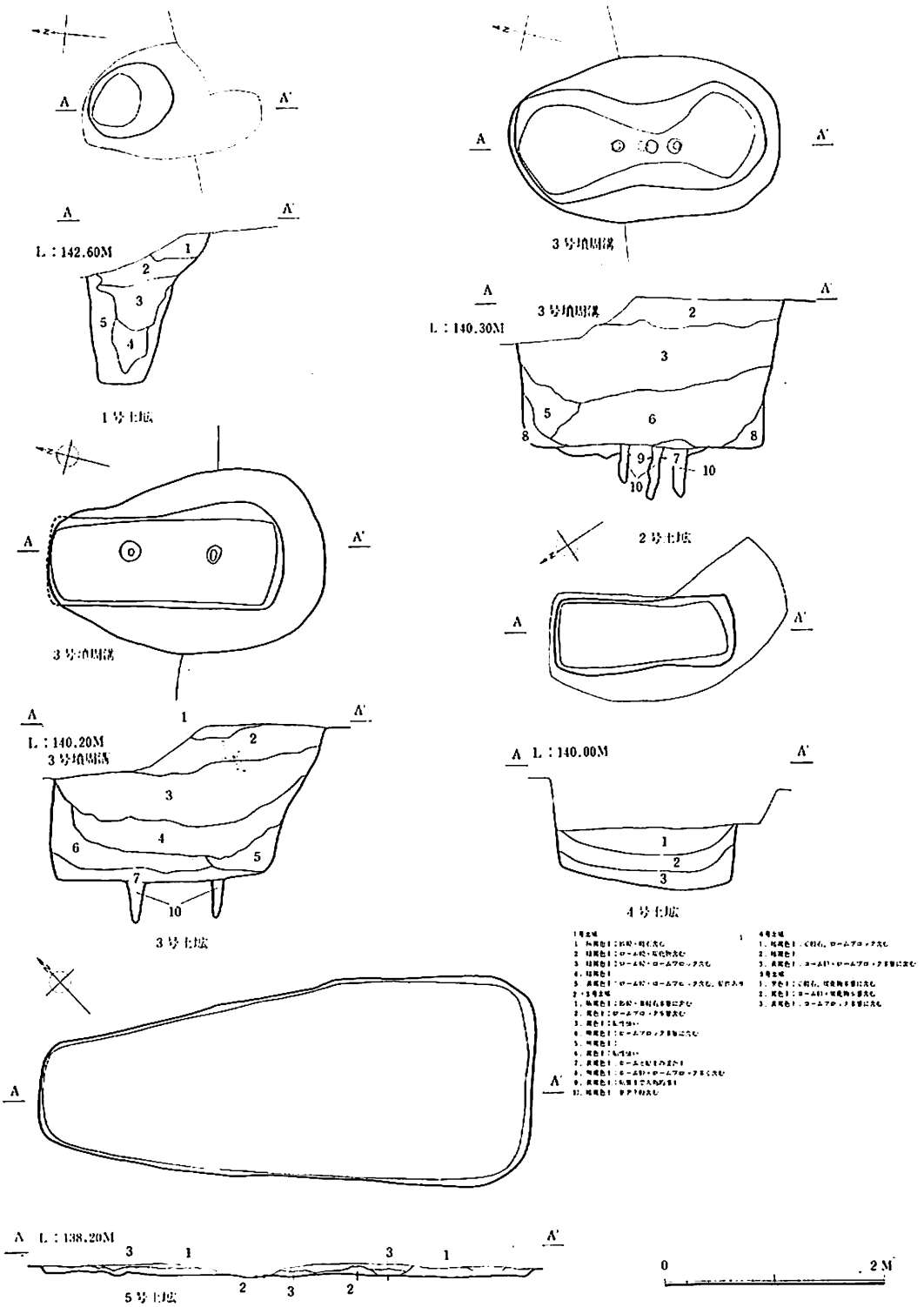
本址はW－11・12グリッド、2号土坑の西4m程に位置し、3号墳周溝に壊される形で検出された。1.46×2.51mを測る平面楕円形を呈し、深さ1.40mを測る。下端は平面ほぼ長方形を呈し、0.74×2.05mを測る。北壁には弱いオーバーハングが認められた。また2号土　同様に床面で南北に2本の小ピットが検出された。遺物は検出されなかった。覆土・形状より縄文時代の陥し穴と考えられる。

**4号土坑**　（第6図、図版3－4）

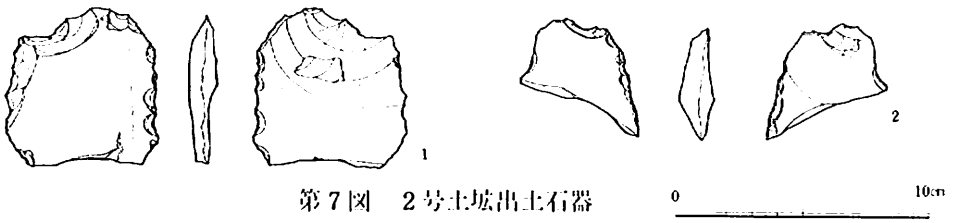
本址はY－9グリッドにて検出され、3号土坑の南西13m程に位置する。上面を撹乱されている。0.60×1.64mの平面不整長方形を呈し、深さ0.92mを測る。遺物は検出されなかった。時期・性格等不明である。

**5号土坑**　（第6図、図版3－5）

本址はg－13グリッドにて検出された。1.74×4.46mの平面楕円形を呈し、深さ0.13cmを測る。覆土上層にC軽石混入黒色土に炭化物を多量に含んで検出された。遺物は検出されなかった。時期・性格等不明である。


A
A'
L：142.60M
1
2
3
4
5
1号土坑
3号墳周溝
L：140.30M
6
7
8
9
10
2号土坑
L：140.20M
4号土坑
L：140.00M
5号土坑
L：138.20M
0
2M

第6図　1～5号土坑




第７図　２号土坑出土石器

２号土　出土石器（第７図、図版11）

１・２はスクレイパーである。１は片面に自然面を残し、周辺を細部加工により刃部の作り出しを行っている。石質は頁岩、長さ5.9 cm、幅5.8 cm、厚さ1.1 cmである。２は自然面を多く残し、周辺に細部加工し刃部を作り出している。自然面側に打撃点を残す。石質は黒色頁岩、長さ4.4 cm幅4.3 cm、厚さ1.4 cmである。

## 第３節　古墳

調査前は古墳２基（上毛古墳綜覧　荒砥村84号、89号墳）が確認されていたが、調査の結果この他に３基確認された。調査区北側から１号～５号墳と命名し、荒砥村84号墳を４号墳、同89号墳を３号墳と仮称した。

**１号墳**（第８～10図、図版４－１～５）

本古墳は、調査区北西部に位置し、周辺は南東に傾斜した斜面となっている。東側には５号墳が近接している。

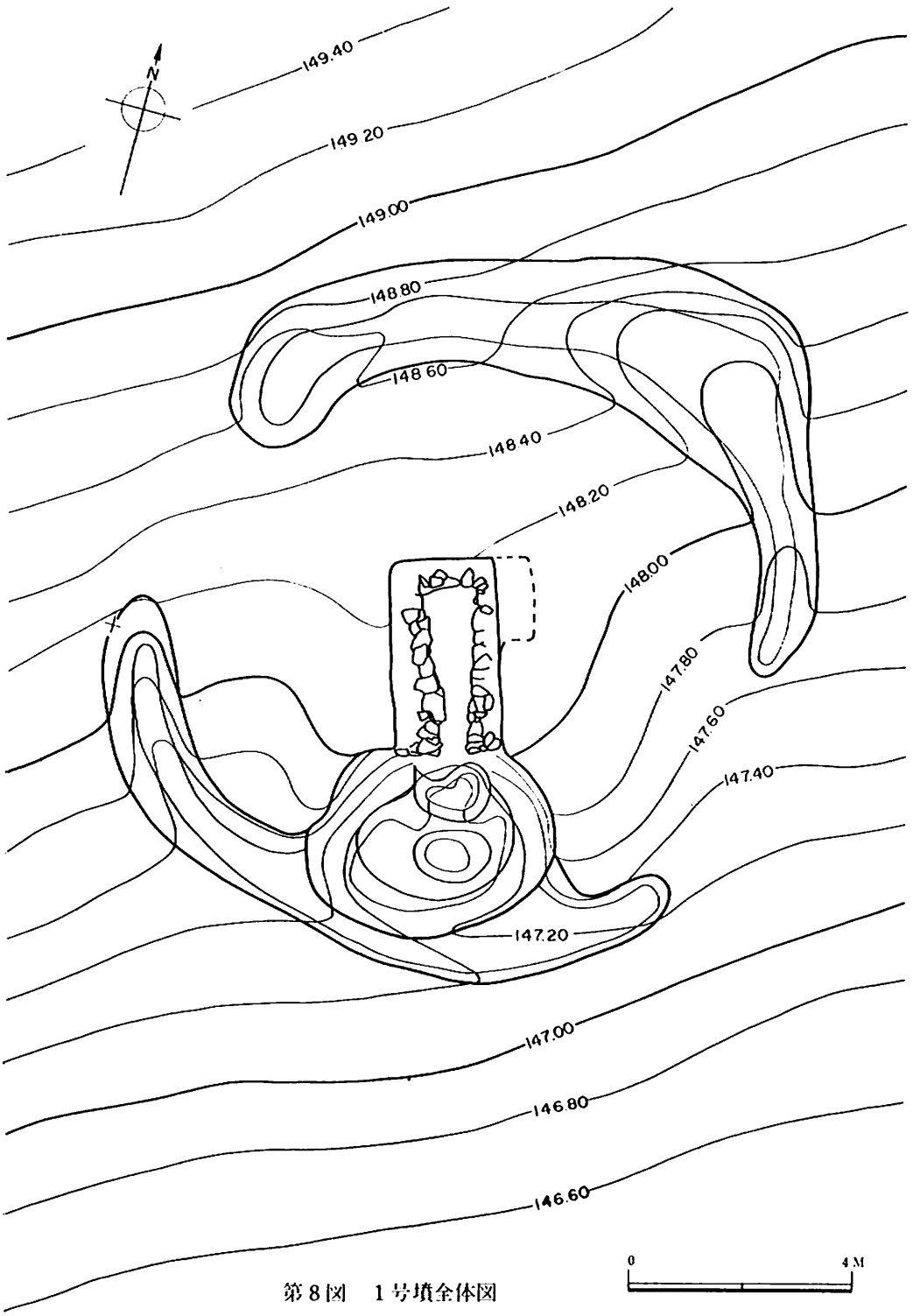
墳丘はすでに削平され、盛土は残存していないが、地山の高まりを少し留めている。周溝の形状より径約13.0ｍの円墳である。周溝は全周せずに古墳東側と西側で切られブリッジをもつ形状も不均一であり、深さも浅い所で10cm、深い所で40cmと一定していない。石室前には前庭が付設され、それに伴う深さ0.80ｍの不整円形の落ち込みも検出されている。周溝、前庭内の埋土上層からは浅間Ｂ軽石の純層が検出されている。

内部主体は、地山まで掘り込んだ掘形内にその根石を置いている。石室は安山岩の乱石積みの両袖形横穴式石室と考えられるが、明瞭ではない。石室は上面で破壊されており、何個か抜かれ、前庭部覆土よりこの石材が出土している。

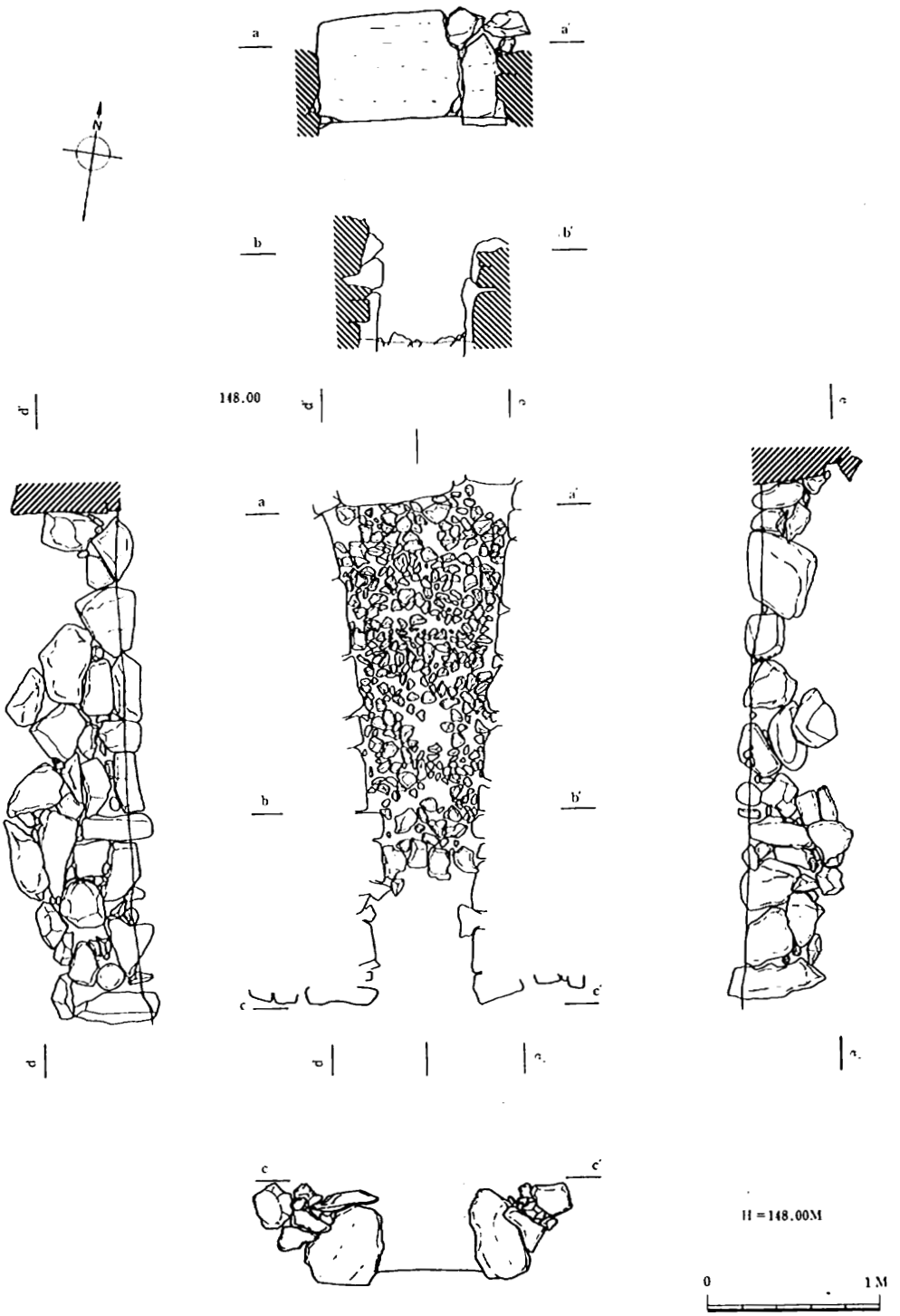
主軸方向はＳ11°Ｅ、主軸長は2.95ｍを測り、玄室は長さ2.00ｍ、奥壁幅1.12ｍ、入口幅65cmを測る。奥壁は一石構成を意図したのであろうが、側壁との間が開いている為、大小の礫によって隙間を充填している。床面には小円礫が敷かれていた。玄室と羨道との境には玄門敷石は

羨道は長さ0.95ｍ、幅50cmを測る。羨道入口には小石を詰めた閉塞が残っていた。床面の敷石は抜かれていた。石室入口部には前庭部と考えられる。石積みが残っていた。

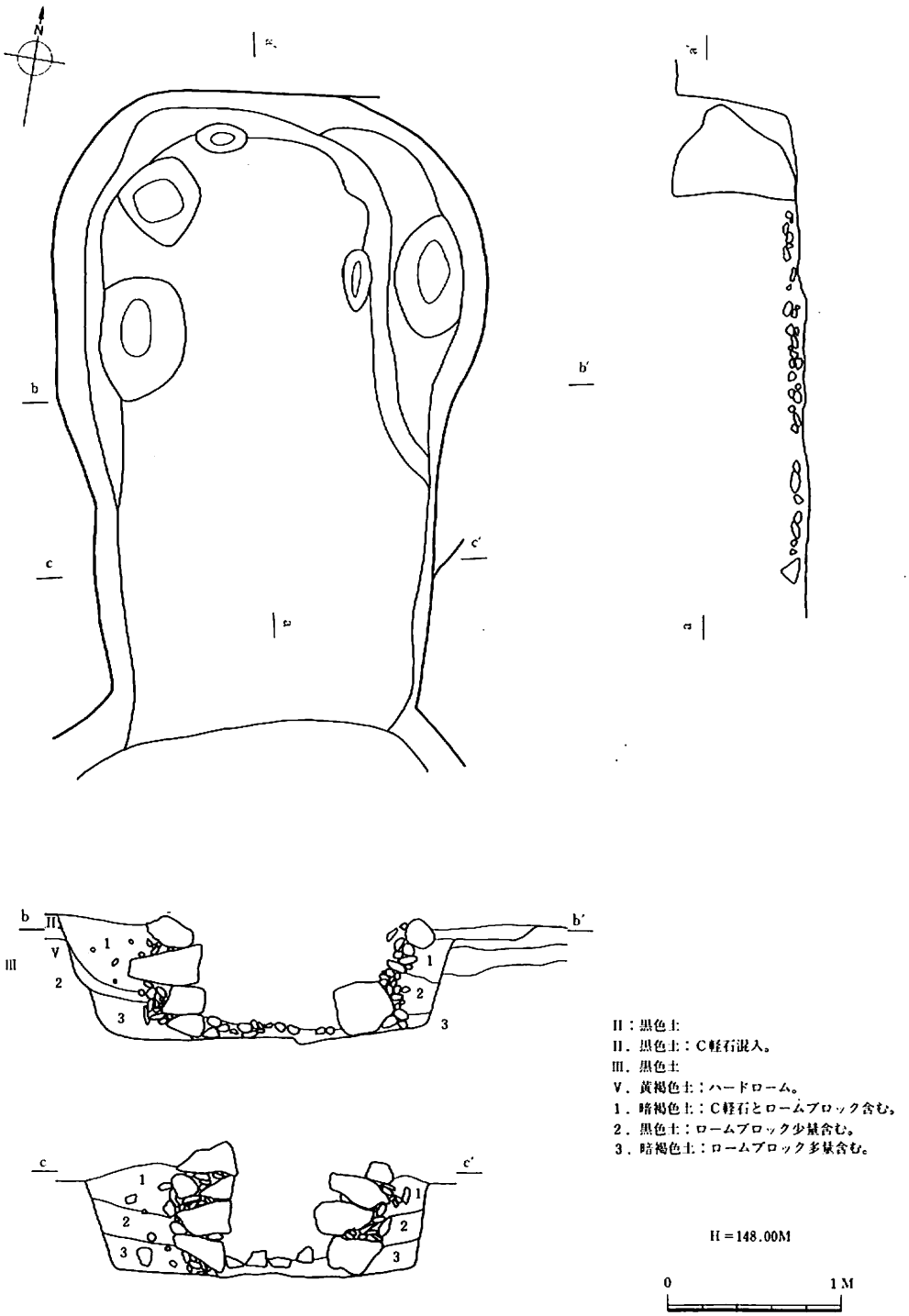
遺物は出土していない。


N
149.40
149.20
149.00
148.80
148.60
148.40
148.20
148.00
147.80
147.60
147.40
147.20
147.00
146.80
146.60
0
4 M

第8図　1号墳全体図




第９図　１号墳石室展開図




第10図　1号墳石室掘形図

**2号墳**（第11～14図、図版5－1～5、13）

本古墳は、調査区北部に位置し、北側と東側が調査区域外の有、未調査である。西側に1号墳・5号墳が近接している。

墳丘はすでに削平され、盛土は残存していない。北側と東側が未調査の為不明であるが、周溝の形状より径約9.60mの円墳であると考えられる。周溝は全周すると思われ、最大幅1.40m深さ50cmを測る。石室前には前庭が付設され、それに伴う深さ1.20mの不整円形の落ち込みも検出されている。周溝、前庭内の埋土土層からは浅間B軽石の純層が検出されている。

内部主体は、掘形を持つ安山岩割石の乱石積みによる両袖形横穴式石室である。石積みの状態は良好であるが、両側壁の何石かが抜かれている。

主軸方何はS25°W、主軸長は3.90mを測り、玄室は長さ2.38m、中央幅1.50m、奥壁幅1.25m、入口幅1.05mを測る。奥壁は下に1石、その上に1石の計2石で構成されており、大きく玄室側に内傾している。床面には小円礫が二重に敷かれていた。玄室と羨道との境には玄門が設置されており、框石は偏平な石を横置きにしている。

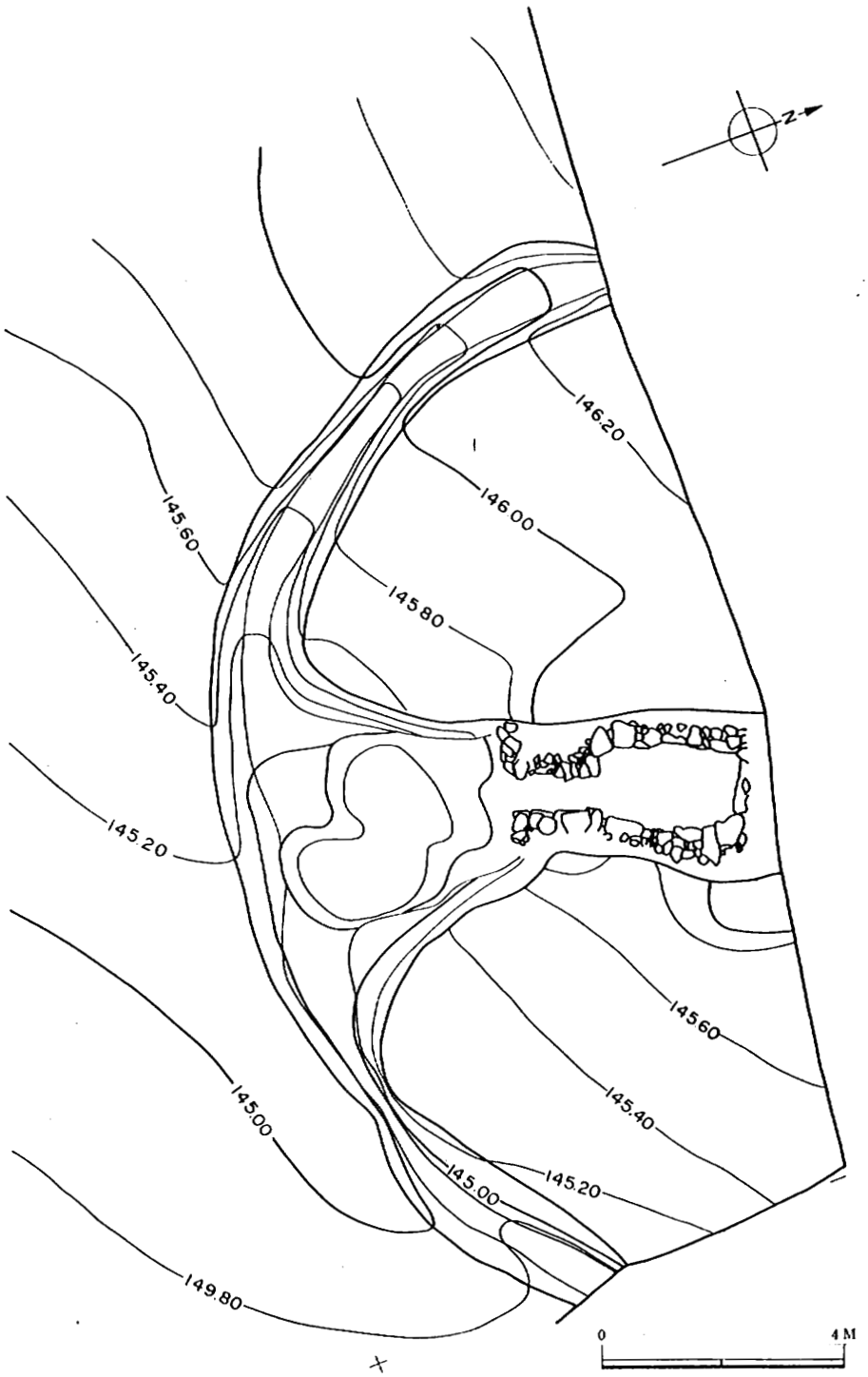
羨道は長さ1.50m、幅60cmを測る。羨道入口には小石を詰めた閉塞が残っていた。床面の敷石も全面小円礫が敷かれており、玄室の床面より一段高く設置されている。石室入口部には前庭部の一部と考えられる石積みが残っていた。

本石室の特徴は玄室中央部に張らみを持っていることが指摘できることから、所謂終末期古墳の特徴を示す「胴張り」を持つ石室の範中に入るものであろう。

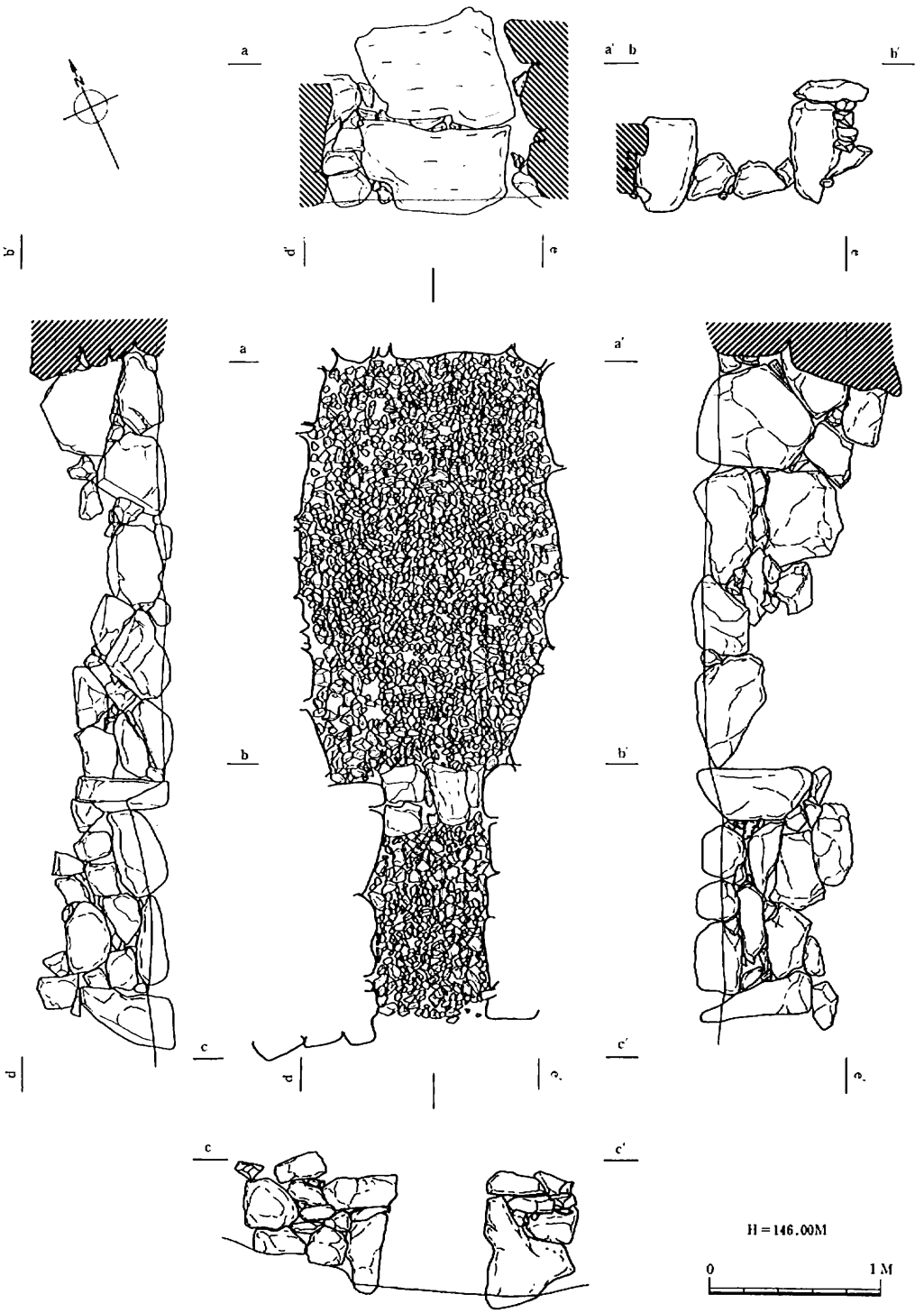
出土遺物は、前庭部より少量出土し、図示し得たものは3点である。

第1表　2号墳出土遺物　（単位：cm）

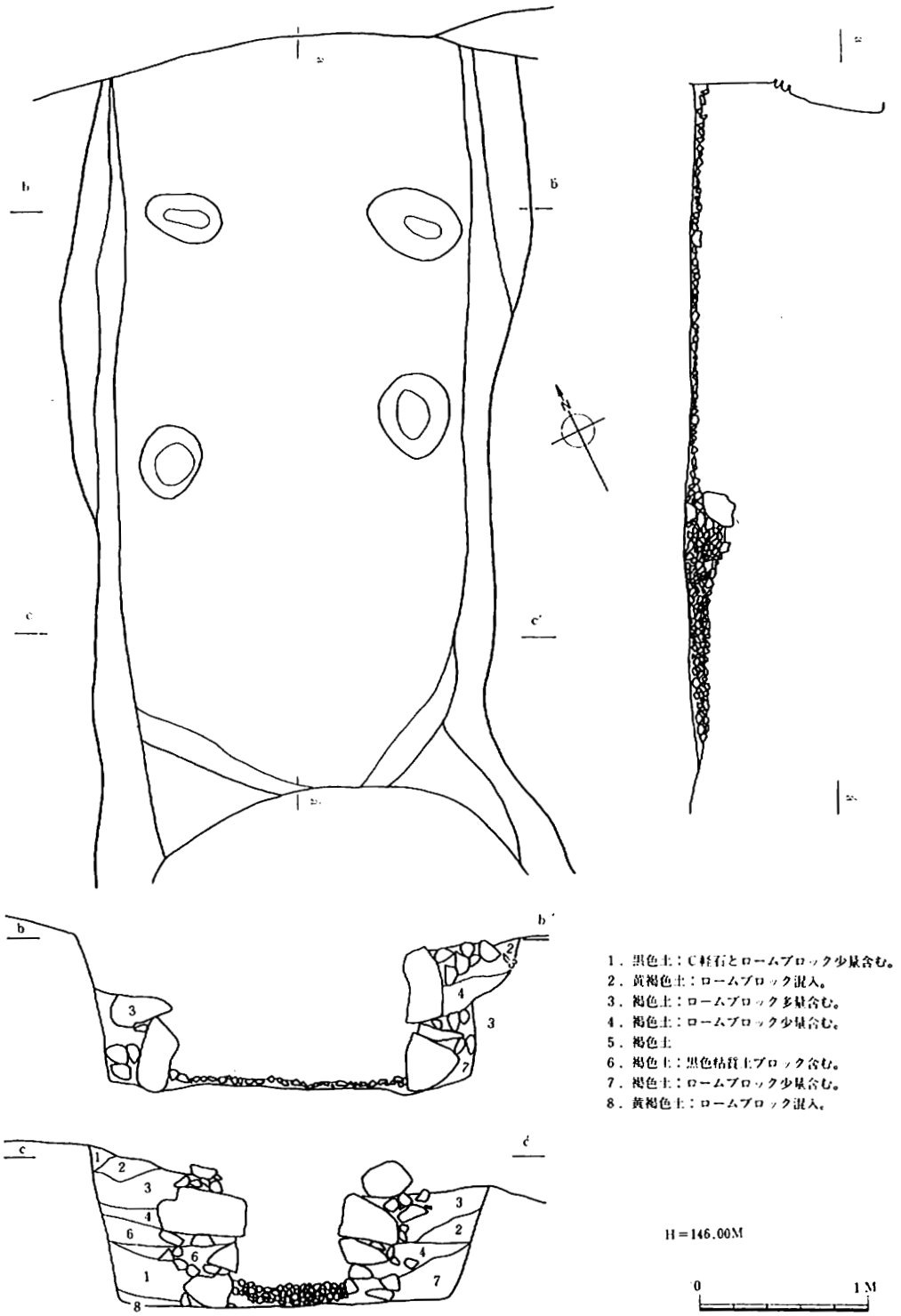
| 番号 | 器種 | 法量 | 器形の特徴 | 成・整形の特徴 | ①粘土②焼成③色調④残存⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器坏 | (12.1)<br>2.7<br>— | やや偏平な丸底の底部より体部外傾気に短く直立する。 | 口縁部内横ナデ，体部外面篦削り後、ナデ，内面ナデ。 | ①細砂含む，②不良、③橙褐色，④1/4。⑤前庭部覆土上層。 |
| 2 | 土師器坏 | (10.8)<br>3.8<br>— | 球状を呈する体部から口縁部短く直立する。 | 口縁部内部面横ナデ。体部外面篦削り。内面ナデ。 | ①砂粒含む，②不良。③淡橙褐色。④2/3，⑤前庭部覆土上層。 |
| 3 | 須恵器提瓶 | —<br>(11.9)<br>— | 把手はもたない。底径が小さく、ややフラスコ形に近い形態となる。 | 粘土紐巻き上げ成形，成形時の底部～天井部までロクロ成形によるハケ目文を施す。 | ①緻密，②堅緻③灰褐色。④口縁部全損。2/3。⑤前庭部覆土層。 |


N
146.20
146.00
145.80
145.60
145.40
145.20
145.00
149.80
145.60
145.40
145.20
145.00
0
4 M

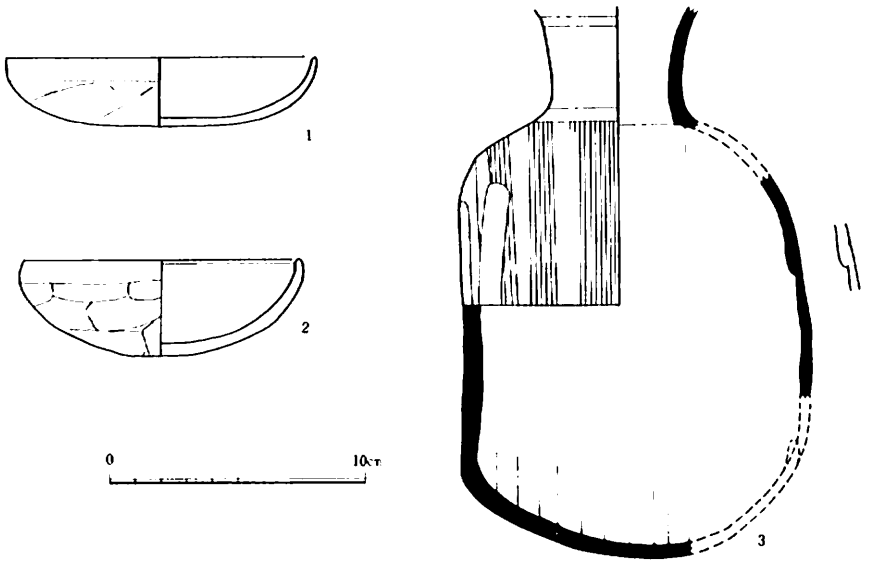
第11図　2号墳全体図




第12図　2号墳石室展開図




第13図　2号墳石室掘形図




第14図　2号墳出土遺物

**3号墳（『上毛古墳綜覧』荒砥村89号墳）**　（第15～22図、図版6、7、13～18）

本古墳は、調査区中央部に位置し、北側に1号墳と5号墳、北東側に2号墳、南西側に4号墳が近接している。『上毛古墳綜覧』によると、荒砥村89号墳に相当し、大字西大室字小稲荷277番地に所在、地目は山林であるが現在は畑地である。規模は直径66尺、高さ10尺の円墳で昭和9年に発掘され金環4点出土と記されている。現況でも円形を呈する小規模な墳丘の高まりが認められる。

墳丘はすでに上面では削平されていたが、封土は残存していた。封土は地山である標準土層第Ⅱ層、浅間C軽石混入黒色土を基盤とし、その上にロームブロック混入褐色土とC軽石混入黒色土を互層にして固く締めながら積んだ版築である。周溝の形状より直径約37mの円墳と認められる。周溝は全周するが不整円形を呈し、幅も一定せず広い所で7.20m、狭い所で2.50mを測り、深さは深い所で1.30m、浅い所で60cmを測る。石室前には階段状の前庭が付設されているのが検出された。周溝、前庭内の埋土上層からは浅間B軽石の純層が検出されている。

内部主体は、地山まで掘り込んだ掘形内にその根石を置いている。石室は後世の撹乱により大半の石が抜かれているが、安山岩割石の乱石積みの両袖形横穴式石室と考えられる。

主軸方向はS34°W、主軸長は6.28mを測り、玄室は長さ約4.10m、幅約2.10mを測る。奥壁、側壁は抜かれている為に構成は不明である。床面は小円礫が敷かれており、玄室中央部には間仕切りが検出された。玄室と羨道との境にある玄門、框石は抜かれていた。

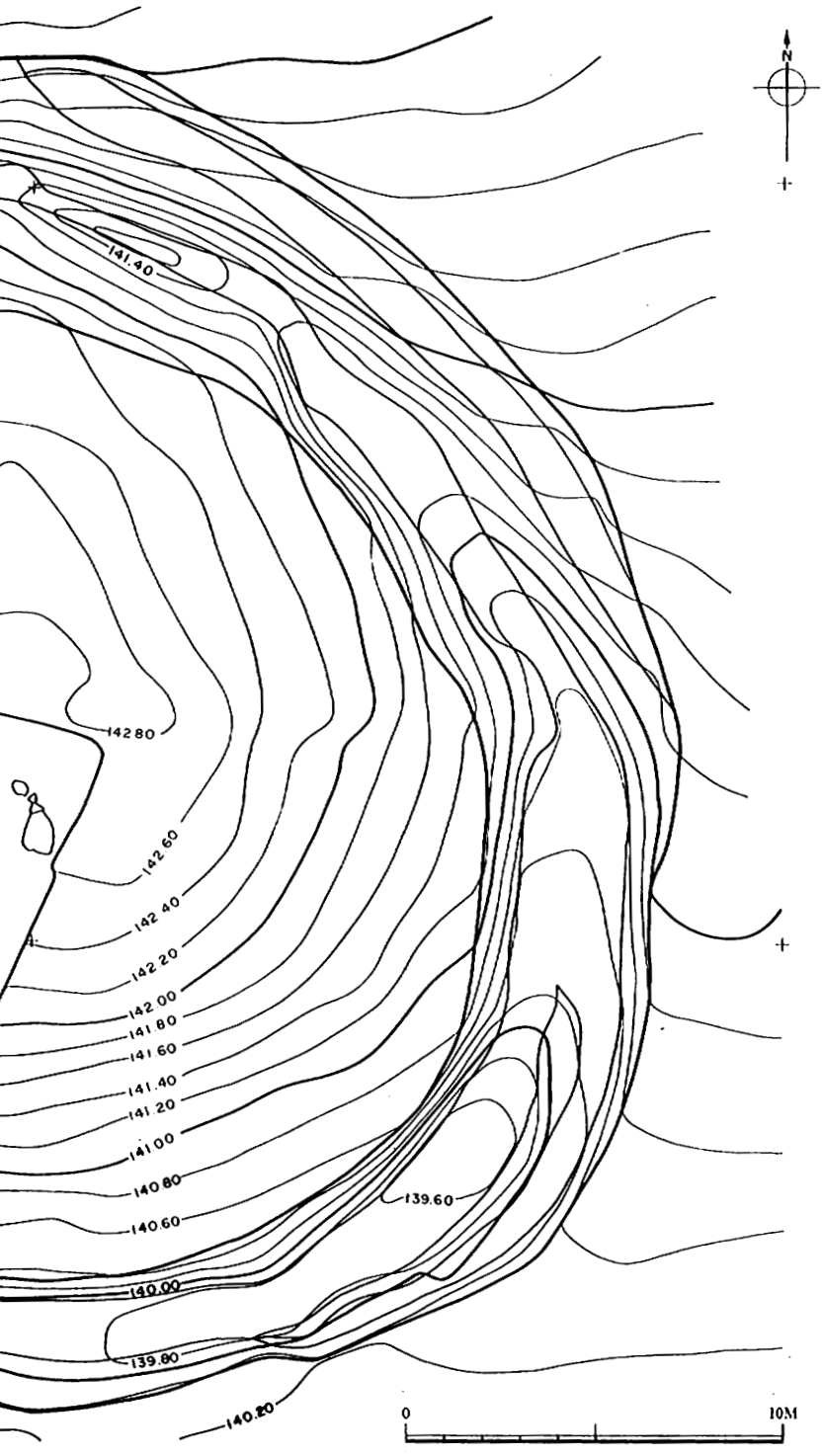
羨道は長さ約2.20m、幅0.90mを測る。羨道入口には径80cm程の割石や小石を詰めた閉塞が残っていた。床面の敷石は検出されず、石室入口部には前庭部の一部と考えられる石積みが残っていた。

出土遺物は、墳丘及び前庭部を中心に須恵器が多量に出土し、また、石室内より鉄器類・人骨・歯が出土した。出土土器の図示し得たものは８点、鉄器20点である。

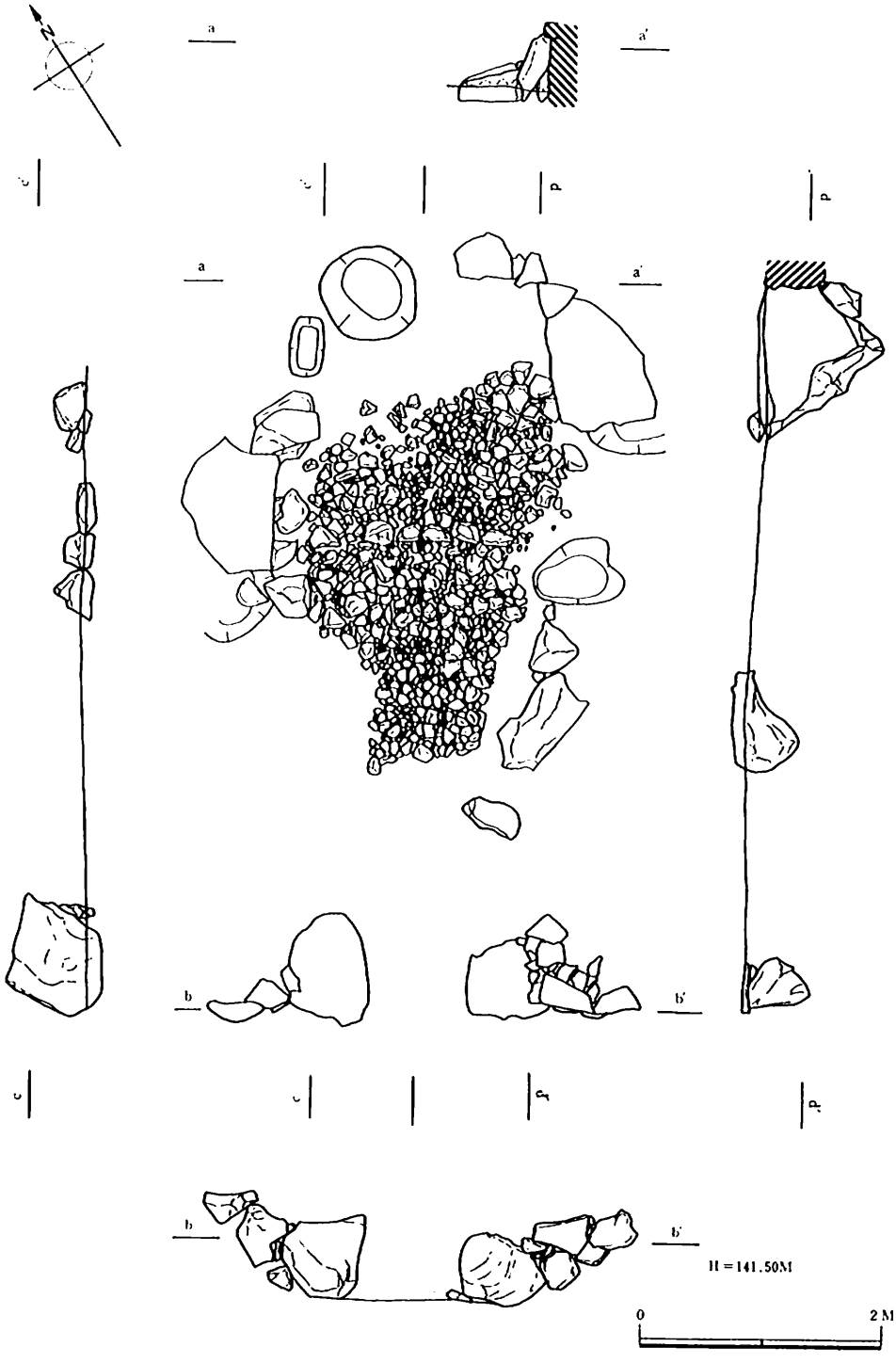
第２表　３号墳出土遺物

| 番号 | 器種 | 法量 | 器形の特徴 | 成・整形の特徴 | ①胎土②焼成③色調④残存⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器 坏 | 10.2<br>( 3.1)<br>— | 球状を呈する体部から弱い稜を経て口縁部短く内傾する。 | 口縁部内外面横ナデ。体部外面箆削り。内面ナデ。 | ①砂粒含む。②通有。③淡褐色。④1/3。 |
| 2 | 須恵器 坏 | (10.8)<br>( 3.8)<br>— | 球状を呈する体部より稜を経て口縁部外反気味に直立する。 | ロクロ成形。底部外面箆削り。 | ①雲母多く含む。②堅緻。③黄灰褐色。④1/3。 |
| 3 | 須恵器 蓋 | (11.8)<br>( 2.2)<br>— | 天井部やや扁平で、端部から短く短かかえりがつく。 | ロクロ成形。 | ①緻密。②堅緻。③灰褐色。④1/5。外面に自然釉付着。搬入品。 |
| 4 | 須恵器 高坏 | —<br>( 6.9)<br>9.6 | 坏部は球状を呈する。脚部で大きく開がる脚部は短く、３個の透かしをもつ。 | ロクロ成形で外面に櫛目。透かしは篦調整。 | ①石英粒含む。②良好。③暗灰褐色。④坏口縁部全損。脚部1/3残。 |
| 5 | 須恵器 壺 | 9.1<br>10.7<br>— | 丸底の底部から体部の肩に明瞭な稜をもち、口縁部は外上方へ開く。注口部突出。 | ロクロ成形。底部はナデ。 | ①緻密。②良好。③灰白色。④3/4。⑤自然釉付着。搬入品。 |
| 6 | 須恵器 壺 | 11.1<br>14.2<br>2.5 | 小さい平底から球状を呈する。体部をもち口縁部は内反気味に大きく開く。注口部突出。 | ロクロ成形。 | ①石英・雲母多量に含む。②良好。③暗灰褐色。④1/5。 |
| 7 | 須恵器 長頸瓶 | —<br>(14.1)<br>— | 全体にイビツ球状を呈する。体部より口縁部外反気味に直立。肩部に二段の文様帯もつ。 | 粘土紐巻き上げ成形？ロクロ成形によるヨコナデ。底部に高台の接合痕残す。 | ①小砂礫(長石)含む。②堅緻。③暗灰褐色。④2/3残。口縁部・高台全損。 |
| 8 | 須恵器 大甕 | 23.0<br>(46.4)<br>— | 球状を呈する胴部から口縁部くの字状に外反し、端部を折り返す。 | 粘土紐巻き上げ成形。口縁部に直線状の波状文。胴部内面同心円、外面平行叩き目後、ヨコナデ。 | ①小砂礫含む。②良好。③灰褐色。④1/2。 |
| 9 | 鉄製直刀 | 刀長64.3cm、茎長8.3cm、棟厚5.3mm、平棟平造り、切先から26cm程でU字形に曲げる。茎も曲げてある。 | | | |
| 10 | 鉄製環状金具 | 長さ8.7cm厚さ5.1cmを測る。長方形のくびれた環で頂部に掛金がつく。鞍金具か？ | | | |
| 11 | 鉄製環状金具 | 長さ9.1cm、厚さ4.9mmを測る。長方形のくびれた環で頂部に掛金がつく。鞍金具か？ | | | |
| 12 | 鉄製鞍 | 長さ7.1cm、環部幅5.1cm、厚さ５～６mm、断面不整円形。掛金がない。 | | | |
| 13 | 鉄製楕円形金具 | 長径5.3cm、短径3.7cm、厚さ5.8mm、刀外装の責金具に負る。馬具の可能性あり。 | | | |
| 14 | 鉄製鍔 | 長径6.0cm、短径4.9cm、厚さ5.2mm、倒卵形で透かしなし。小刀の鍔と考えられる。 | | | |
| 15 | 鉄製楔 | 長さ6.1cm、頂部径3.7cmを測る。頂部に叩き痕がある。 | | | |
| 16 | 金鉄製耳飾 | 直径８mmの鉄棒を環状に曲げる。 | | | |
| 17 | 金銅製耳飾 | 長径2.9cm、短径2.65cm、断面やや稜の立つ楕円形の銅棒を環状に曲げる。全周裂り。 | | | |
| 18 | 金銅製耳飾 | 長径2.92cm短　径2.58cm。全周裂り。17と２個１具と考えられる。 | | | |
| 19 | 金銅製懸通孔金具 | 現存長9.4cm、直径10.9mm。拵太刀の柄頭金具。 | | | |
| 20 | 鉄製釘 | 現存長7.7cm、太さ４×５mmを測り、断面不整方形。上下欠ける。 | | | |
| 21 | 鉄製釘 | 現存長8.7cm、太さ６×５mmを測り、断面方形。下端部曲りあり。 | | | |
| 22 | 鉄製釘 | 現存長3.8cm、太さ3.6×3.9mmを測り、断面方形。上下欠ける。 | | | |
| 23 | 鉄鏃 | 刃部現存長4.2cm、茎現存長9.1cmを測る片刃鏃である。 | | | |
| 24 | 鉄鏃 | 現存長4.0cmを測る片刃鏃である。 | | | |
| 25 | 鉄鏃 | 現存長4.1cm、刃幅8.3mm、棟幅2.2mm、片刃鏃と思われるが、刃子部先端の可能性残す。 | | | |
| 26 | 鉄鏃 | 現存長6.2cmを測る片刃鏃である。 | | | |
| 27 | 鉄鏃 | 現存長7.5cmを測る。茎で、茎の巻痕を残す。 | | | |
| 28 | 鉄鏃 | 現存長8.7cmを測る。鏃身部の断面が長方形を呈するため、釘の可能性を残す。 | | | |

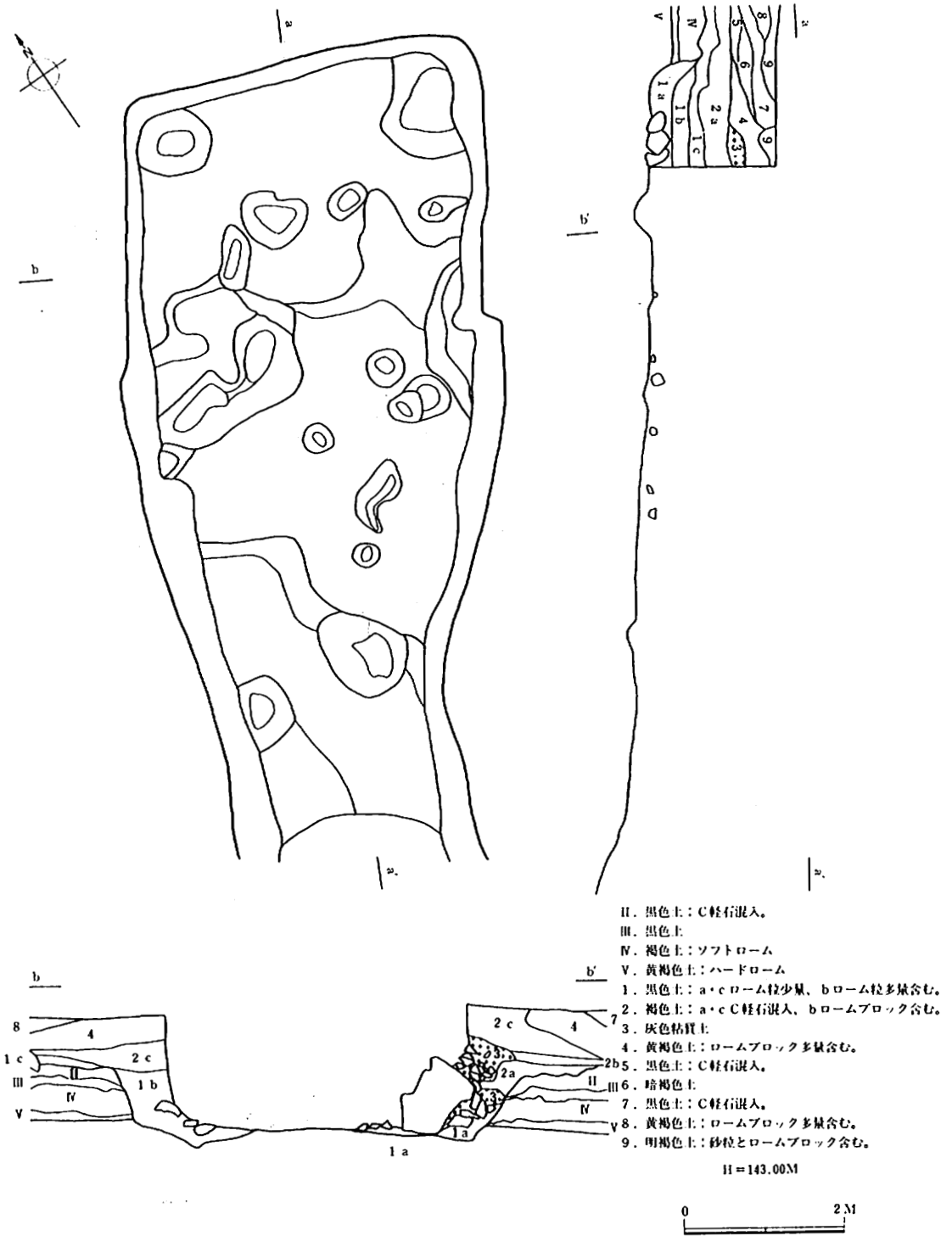
第15図


N
141.40
142.80
142.60
142.40
142.20
142.00
141.80
141.60
141.40
141.20
141.00
140.80
140.60
140.00
139.80
140.20
139.60
0
10M

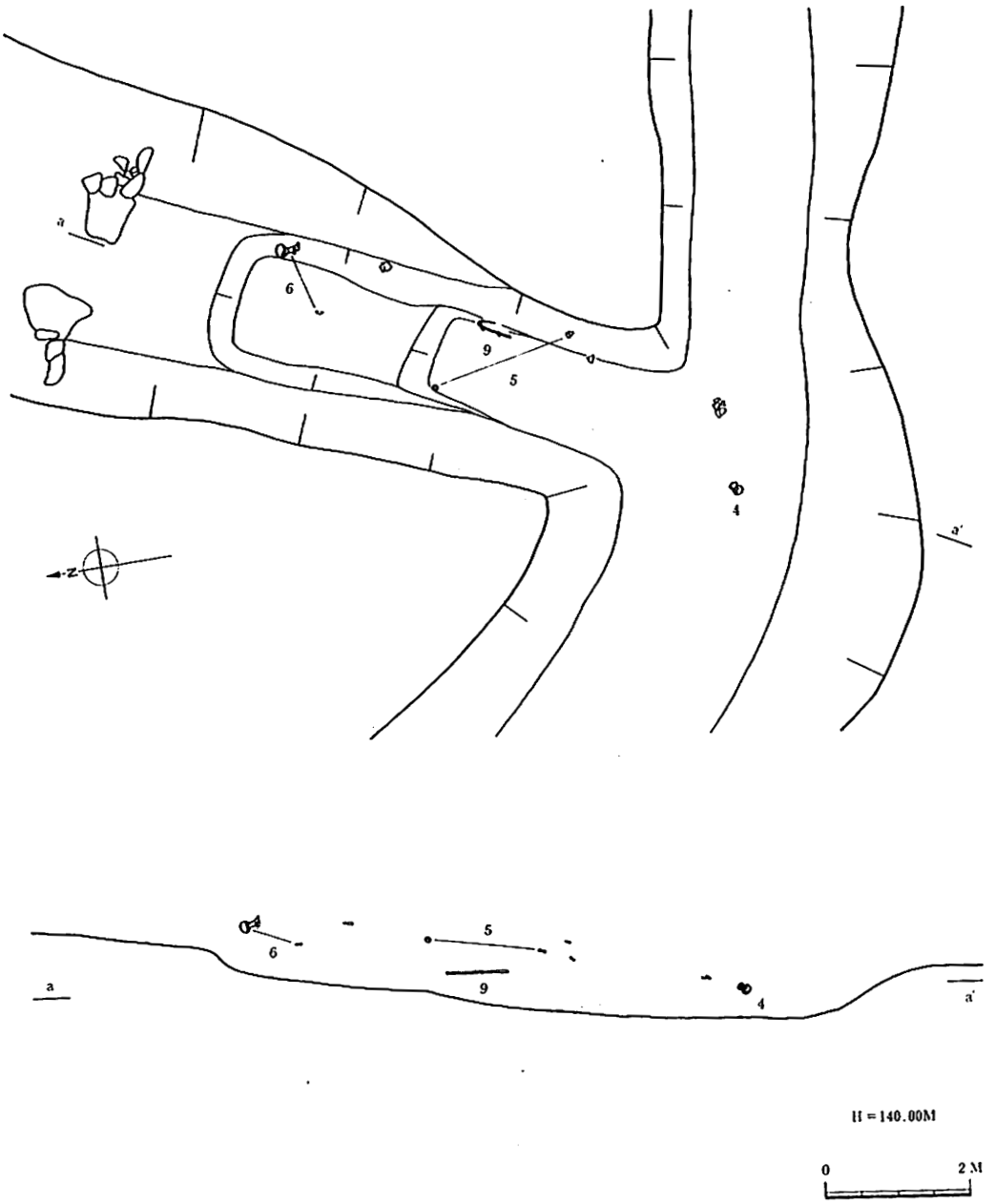
3 号墳全体図



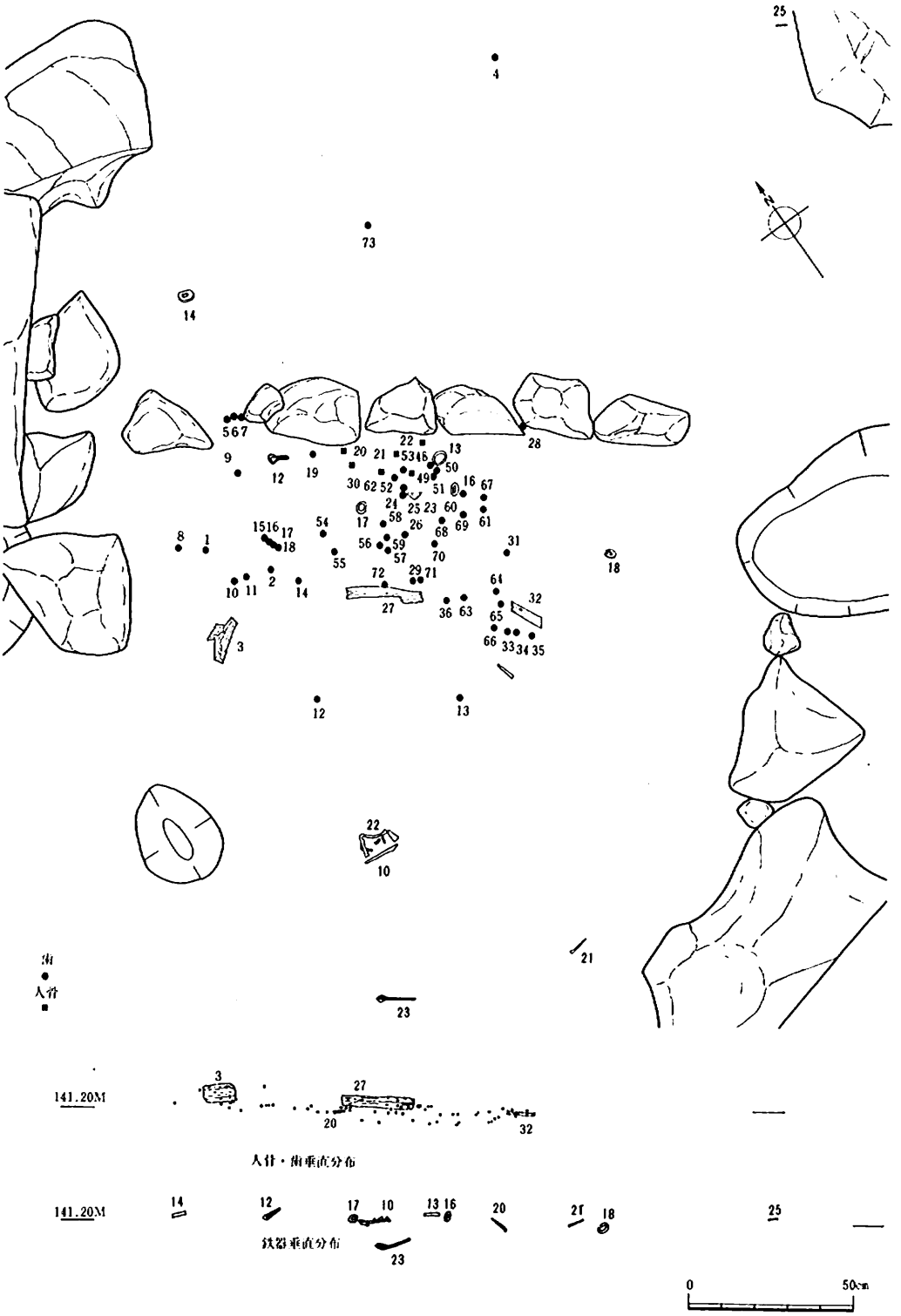

第16図　3号墳石室展開図



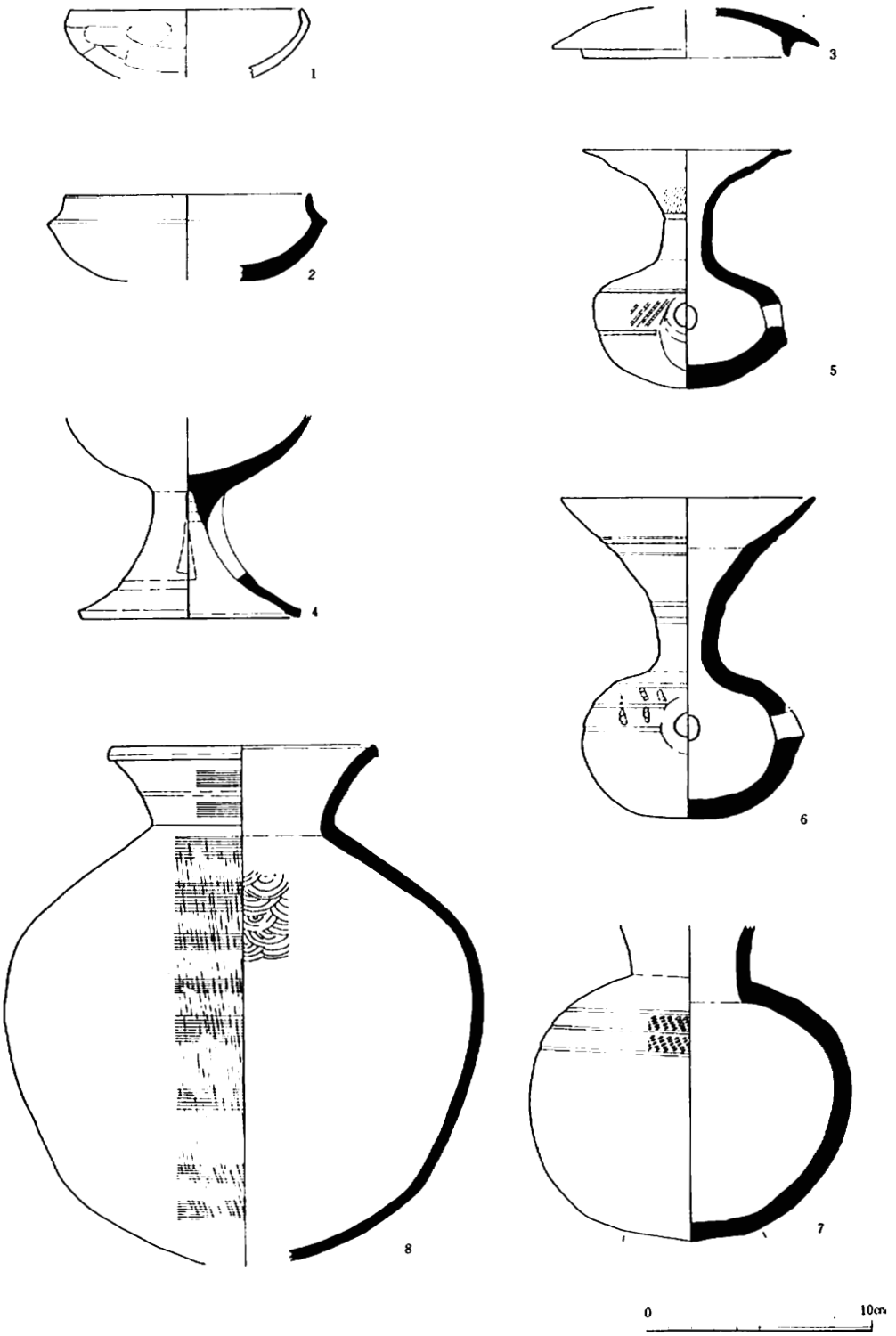

第17図　3号墳石室掘形図



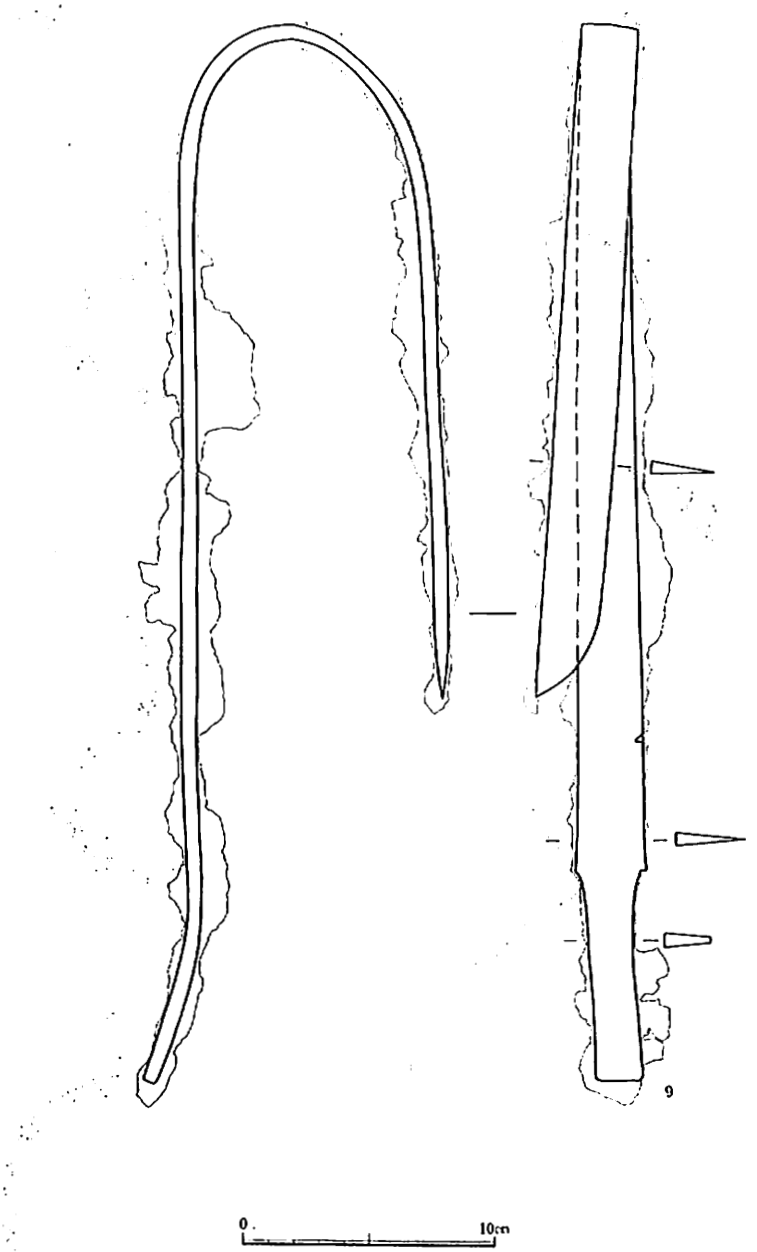

第18図　3号墳前庭部遺物分布図



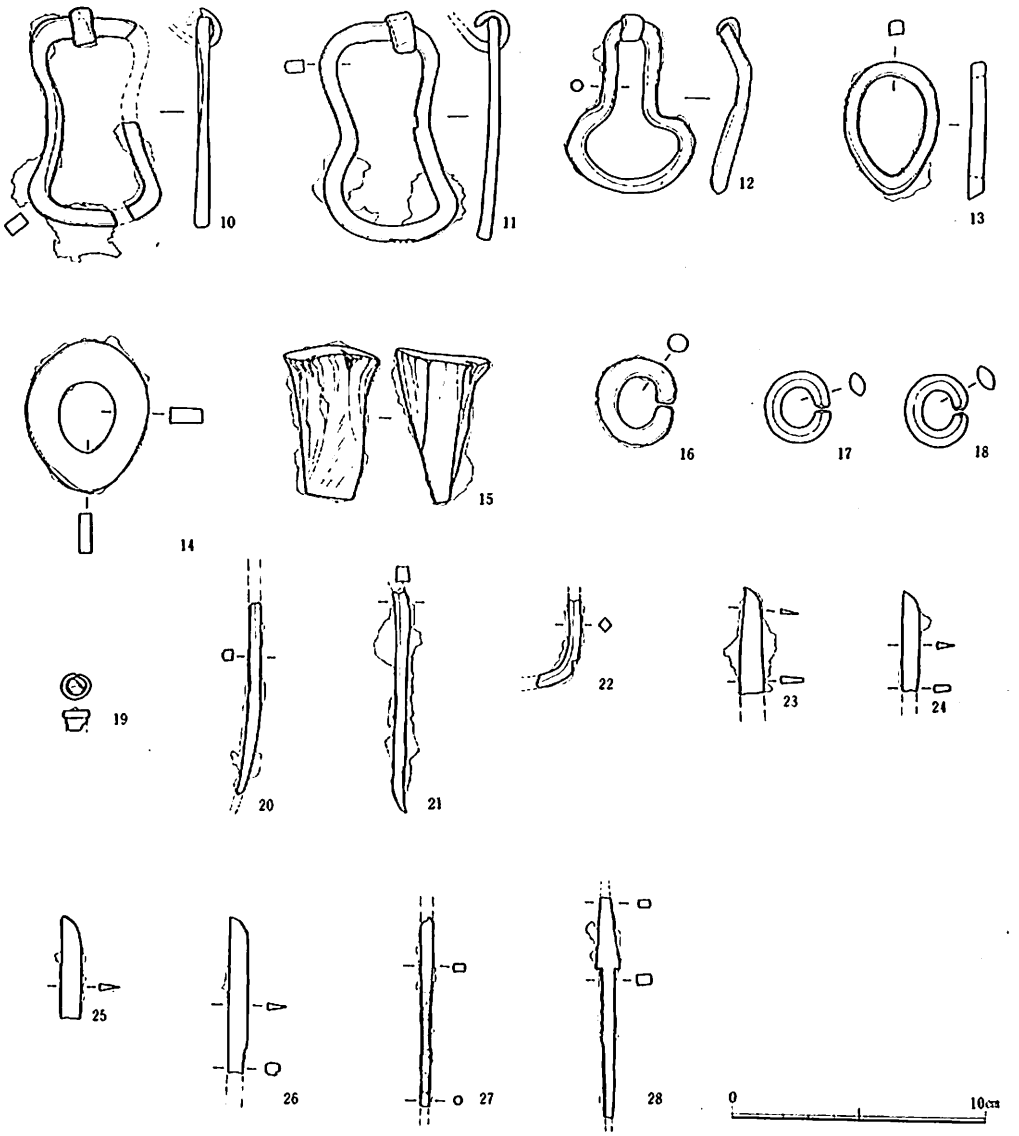

第19図　3号墳石室遺物分布図




第20図　3号墳出土遺物（1）




第21図　3号墳出土遺物（2）



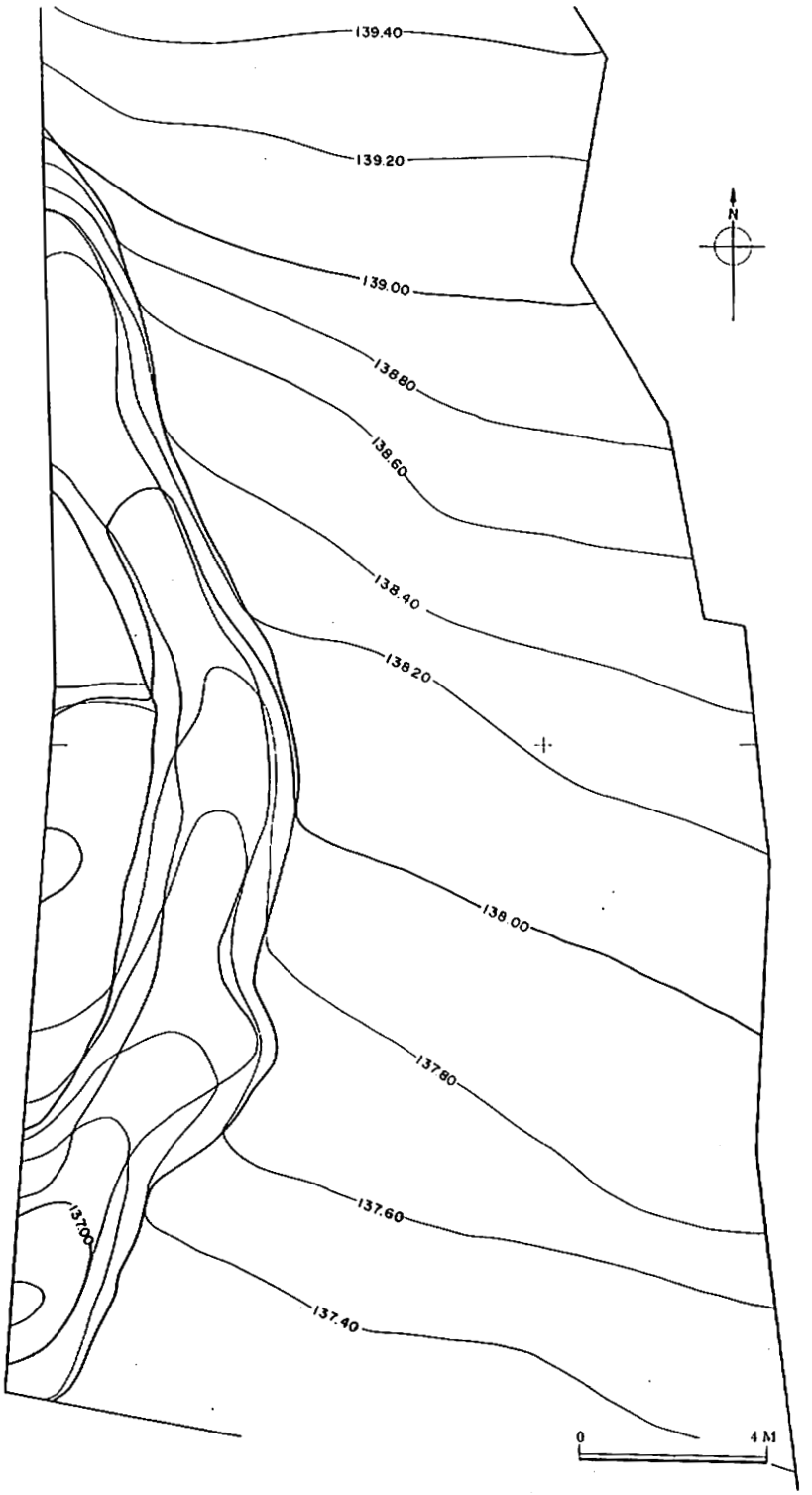

第22図　3号墳出土遺物（3）

**4号墳**（『上毛古墳覧』荒砥村84号墳）（第23図、図版8－1・2）

本古墳は、調査区南西部に位置し、北東側に3号墳が近接している。『上毛古墳綜覧』によると、荒砥村84号墳に相当し、大字西大室字小稲荷280 番地に近在、地目は山林であるが現在は畑地である。規模は直径132尺、高さ10Rの円墳で昭和9年に発掘され金環2点、刀1点出土と記されている。大半が調査区域外であり、円形を呈する小規模な墳丘の高まりが認められた。

今回の調査では周溝のみが検出されたにすぎず、全体を把握するには至っていない。周溝は最大幅3.00m、深さ0.40～0.60mを測り、埋土上層からは浅間B軽石の純層が検出されている。

出土遺物は、周溝内より小片の土器を少量出土したが、図示し得なかった。


139.40
139.20
139.00
138.80
138.60
138.40
138.20
138.00
137.80
137.60
137.40
137.00
N
0
4 M

第23図　4号墳全体図

**5号墳**　（第24～27図、図版８－３～６）

本古墳は、調査区北部に位置し、北西側に１号墳、北東側に２号墳、南側に３号墳が近接している。

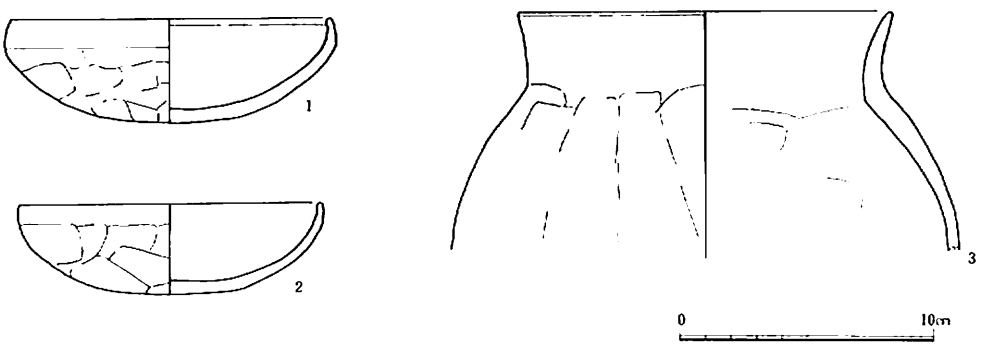
墳丘はすでに削平され、盛土は残存していない。周溝は確認されず、石室前に前庭が付設され、それに伴う深さ0.60ｍ、径2.60ｍを測る不整円形の落ち込みが検出された。前庭内の埋土上層からは浅間Ｂ軽石の純層が検出されている。

内部主体は、堀形を持つ安山岩割石の乱石積みによる小形の両袖形横穴式石室と考えられる。２号墳と同様、玄室中央部に膨らみを持つ胴張りの石室の範中に入るものであろう。

主軸方向はＳ26°Ｅ、主軸長は約1.70ｍを測り、玄室は長さ1.10ｍ、幅50cmを測る。奥壁は抜かれている為に構造は不明である。床面には小円礫が敷かれていた。玄室と羨道との境には玄門が設置されている。

羨道は長さ60cm、幅42cmを測る。羨道入口には小石を詰めた閉塞が残っていた。床面は入口部で敷石が抜かれている。また、石室入口部には前庭部の一部と考えられる石積みが残っていた。

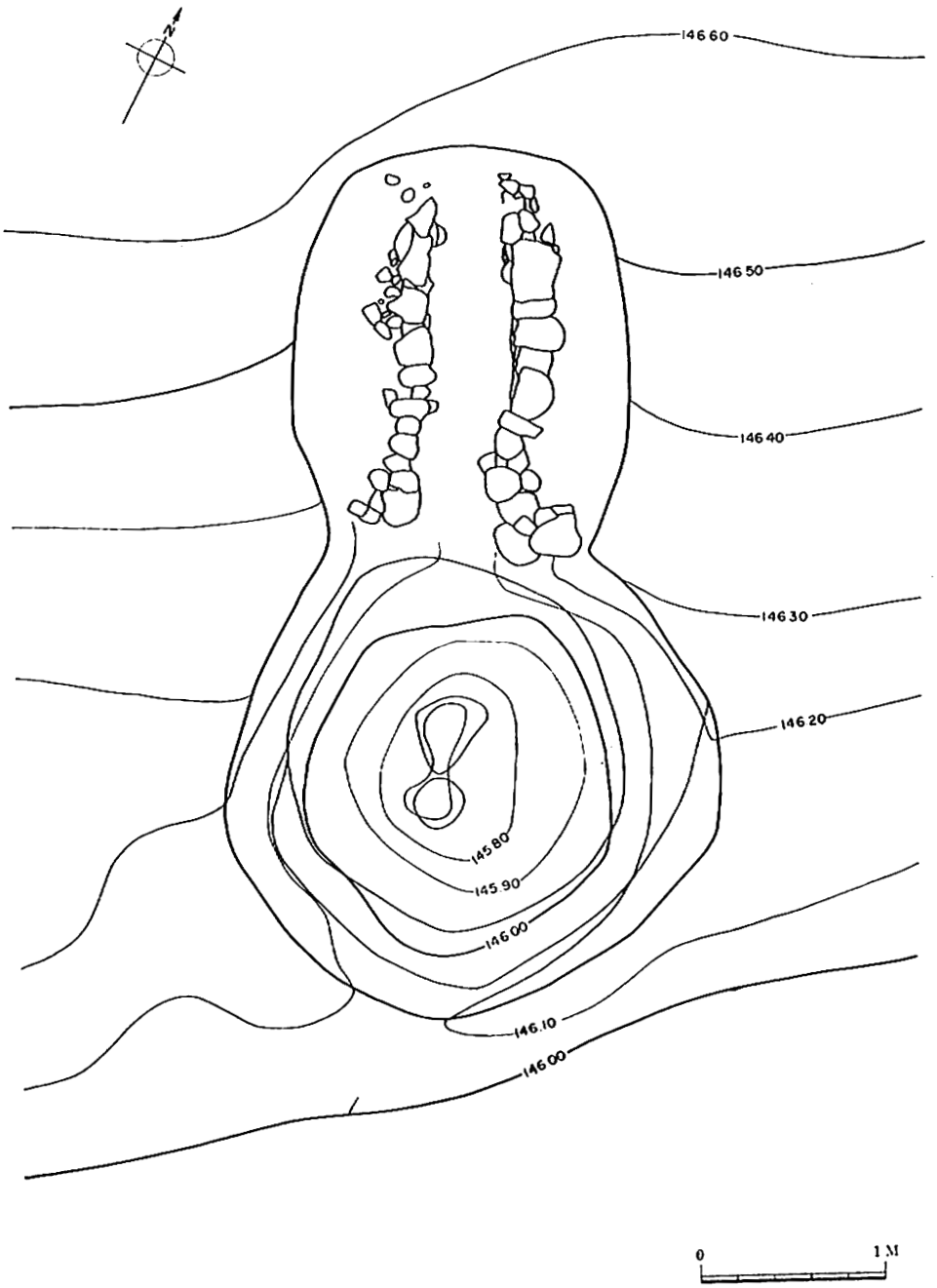
出土遺物は、前庭部覆土中より少量出土し、図示し得たものは３点である。



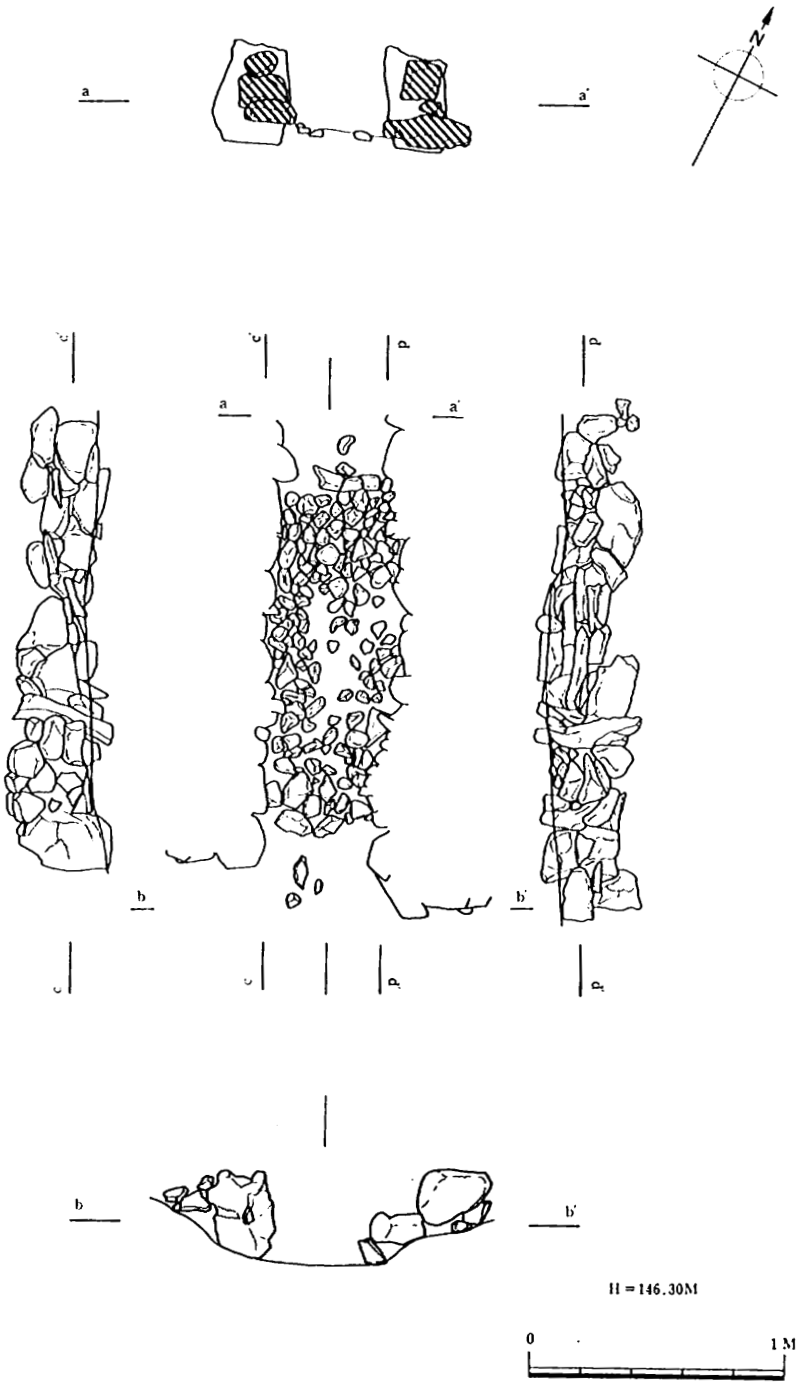

第24図　５号墳出土遺物

第３表　５号墳出土遺物

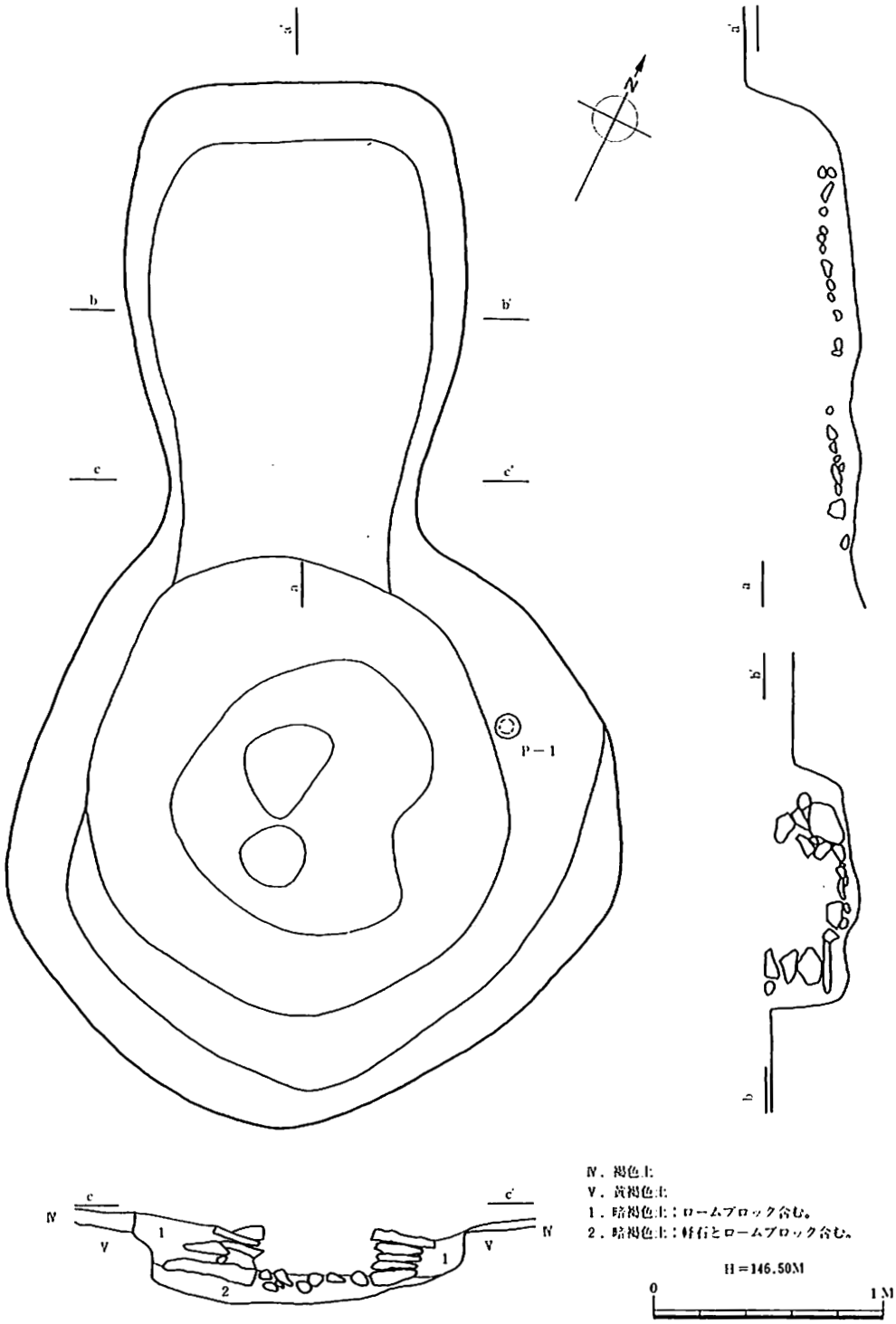
| 番号 | 器　種 | 法　量 | 器形の特徴 | 成・整形の特徴 | ①胎土②焼成③色調④残存⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器坏 | 12.6<br>4.1<br>— | 球状を呈する体部から弱い段を経て口縁部直立気味に内傾し、端部を内に丸め込む。 | 口縁部内外面横ナデ。体部外面箆削り後、粗いナデ，内面ナデ， | ①粗砂含む。②良好③橙褐色。④完形。⑤煤付着。 |
| 2 | 土師器坏 | (11.8)<br>3.6<br>— | 球状を呈する体部から口縁部短く直立する。 | 口縁部内外面横ナデ。体部外面箆削り。内面ナデ， | ①細砂含む。②通有。③橙褐色。④1/3。 |
| 3 | 土師器甕 | (14.6)<br>( 9.4)<br>— | 肩部に張りをもつ胴部から口縁部直立気味に外反する。 | 口縁部内外面横ナデ。胴部外面箆削り。内面ナデ， | ①小砂礫多く含む。②不良③暗黄褐色。④口縁部～肩部1/4。 |


146.60
146.50
146.40
146.30
146.20
145.80
145.90
146.00
146.10
146.00
0
1 M

第25図　5号墳全体図




第26図　5号墳石室展開図




第27図　5号墳石室掘形図

# 第４節　住居址

当遺跡で検出された住居址は３軒である。確認順に東から西へ１～３号と命名した。１号住居址のみ南カマドで、他の２軒は東カマドである。またこの２・３号住居址のカマドには自然礫が構築材として利用されていた。

**１号住居址**　（第28図、図版９－１～３、12）

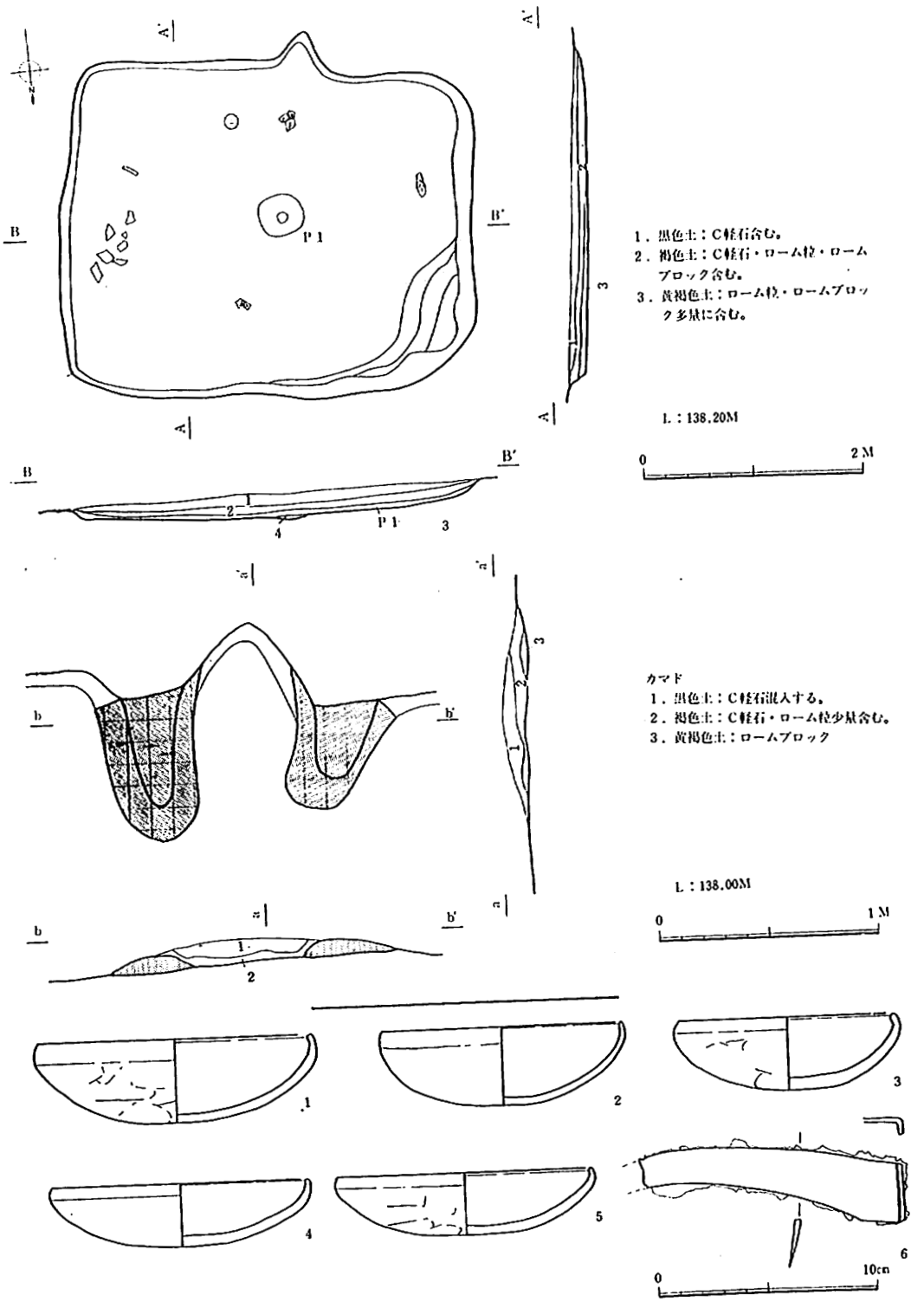
本址はｆ－24グリッドにて検出され、平面不整長方形を呈する。主軸はＮ４°Ｅを指向し、南壁中央やや西寄りにカマドをもつ。各壁長は東西南北それぞれ2.76・2.47・3.35・3.42ｍを測る。壁の立ち上がりはゆるやかで、確認面からの深さは20cm強である。覆土は上層黒褐色土、下層褐色土を基調とする。床面は全般に軟質で北西隅に段をもつ。周溝は検出されなかった。ピットは住居中央やや西寄りで１基検出された。このＰ１は平面楕円形を呈し、38×40cmを測る。床面からの深さは19cmである。

カマドは壁外に36cm程張り出して構築されている。両袖部は比較的良好に遺存していた。袖部は地山に近似した黄褐色粘土と小砂礫の混合土で、僅かに内彎気味に造り出される。燃焼部はほぼ平担で煙出部でゆるやかに立ち上がる。燃焼部内から煙道部にかけて被熱痕は顕著でなく、短期間の使用と考えられた。

出土遺物は比較的少なく、６点を図示し得たのみでいる。

第４表　１号住居址出土遺物　（単位：cm）

| 番号 | 器種 | 法量 | 器形の特徴 | 底・壁形の特徴 | ①胎土②焼成③色調④残存⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器坏 | 12.4<br>3.8<br>- | 球状を呈する体部より口縁部短く直立気味に内傾する。 | 口縁部内外面横ナデ，体部外面丁削り後、粗いナデ，内面ナデ。 | ①細砂含む，②通有，③黄褐色④ほぼ完形。 |
| 2 | 土師器坏 | 10.9<br>3.6<br>- | 球状を呈する，体部より口縁短く直立気味に内傾する。 | 口縁部内外面横ナデ，体部外面丁削り後、ナデ，内面ナデ。 | ①砂粒多量に含む，②不良，③橙褐色，④完形，⑤外面に二次焼成痕。 |
| 3 | 土師器坏 | 9.8<br>3.3<br>- | 球状を呈する体部より口縁部短く内傾し、端部内に丸め込む。 | 内外面丁寧磨き。 | ①雲母含む，②良好，③褐色，④1/2。 |
| 4 | 土師器坏 | (11.6)<br>2.9<br>- | 球状を呈する体部より口縁部短く内傾気味に直立する。 | 口縁部内外面横ナデ，体部外面丁削り後、ナデ，内面ナデ。 | ①雲母含む，②通有，③黄褐色，④1/2，⑤底部内面に「X」の丁記号 |
| 5 | 土師器坏 | (11.7)<br>2.9 | やや扁平な丸底の底部より体部ゆるやかに立ち上がり、口縁部短く直立する。 | 口縁部内外面横ナデ，体部外面丁削り後、粗いナデ，内面ナデ。 | ①砂粒含む，②良好，③黒褐色，④1/2。 |
| 6 | 須恵器 | | 現存長12.3cmを測り、先端部を欠損する。 | | |




第28図　1号住居址と出土遺物

**2号住居址**　（第29・30図、図版9－1・4・5、10－1・2、12）

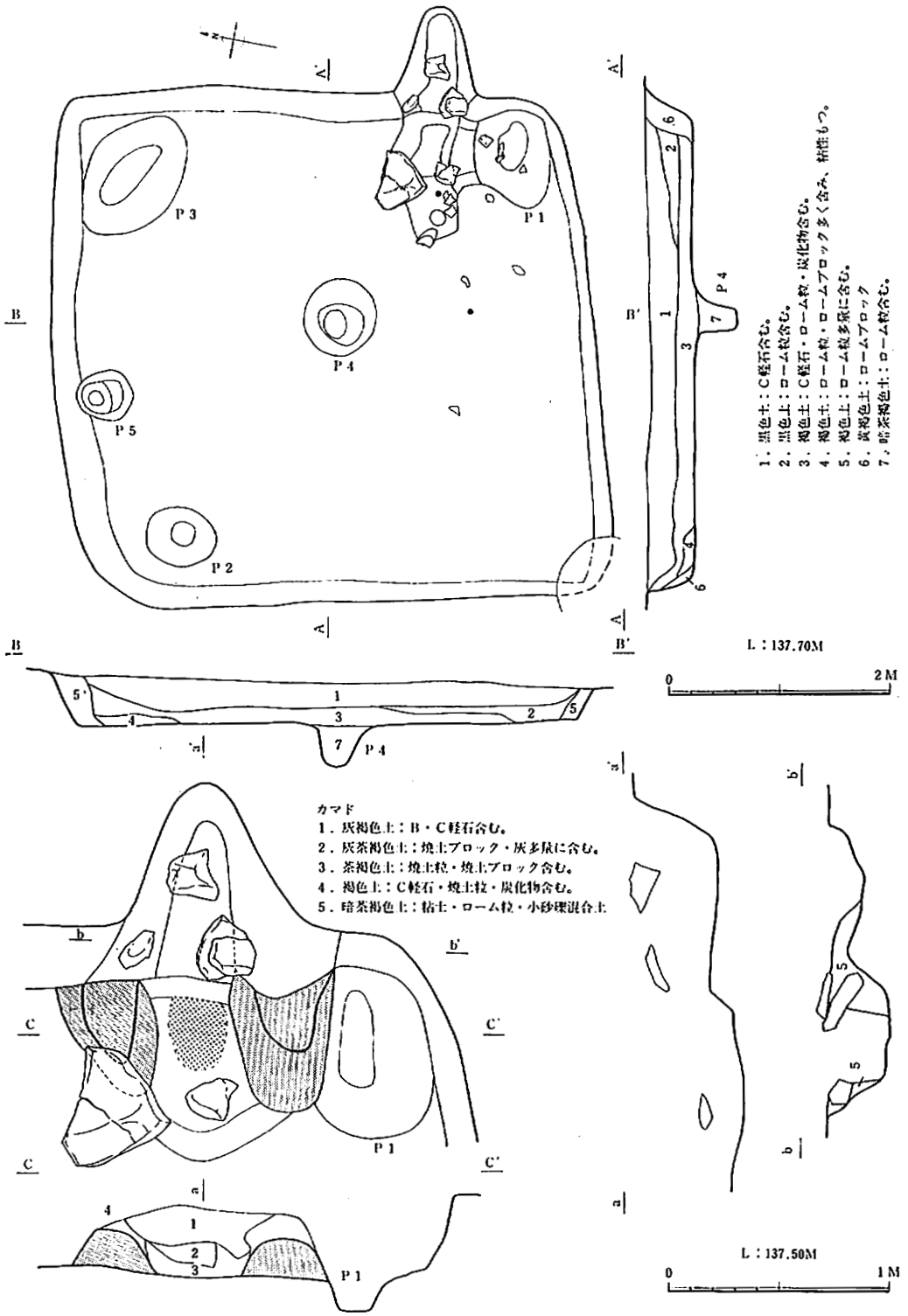
本址j・k－21～23グリッドにて検出され、1号住居址の南西16m程に位置する。平面不整長方形を呈する。主軸はN77°Eを指向し、東壁中央南寄りにカマドをもつ。各壁長は東西南北それぞれ4.30・4.45・4.25・4.40mを測る。壁の立ち上がりほぼ垂直で、確認面からの深さは40cm程である。覆土は上層黒色土、下層褐色土を基調とする。床面はよく踏み固められていて、全般に堅固であった。ピットは5基検出された。P1は住居址南東隅で検出され、平面楕円形を呈する。規模は0.70×0.88m、深さ15cmを測る。P2は北西隅で検出され、平面楕円形を呈する。規模は0.53×0.62m、深さ9cmを測る。P3は北東隅で検出され、平面楕円形を呈する。規模は0.85×1.24m、深さ15cmを測る。これらP1～P3はその形状等に問題を残すが、位置から主柱穴かと考えられた。P4は住居ほぼ中央にて検出され、平面ほぼ円形を呈する。規模は直径70cm程で深さ38cm程を測る。P5は北壁際やや西寄りにて検出され、平面楕円形を呈する。規模は45×52cm、深さ25cmを測る。

カマドは壁外に67cm程張り出して構築されていた。両袖部の遺存状況は比較的良好であった。袖部は白色粘土粒、小砂礫と黒褐色土の混合土で、ほぼ直線的に造り出される。また左袖上にて偏平な自然礫が検出された。これは天井部の懸架材の位置の偏在と捉えられた。さらにカマド両壁から天井部にかけて構築材と思われる砕礫が検出された。本址周囲にも礫が数点検出されており、これらは共にカマド構築材として使用されていた可能性が強い。燃焼部は両袖に囲まれる形で検出され、火床面は26×32cmの平面楕円形を呈し、平坦面をなす。燃焼部から煙道部にかけては段をもって立ち上がり、煙道部から煙出部にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。掘形は不整形を呈し、床面を僅かに堀り込む。

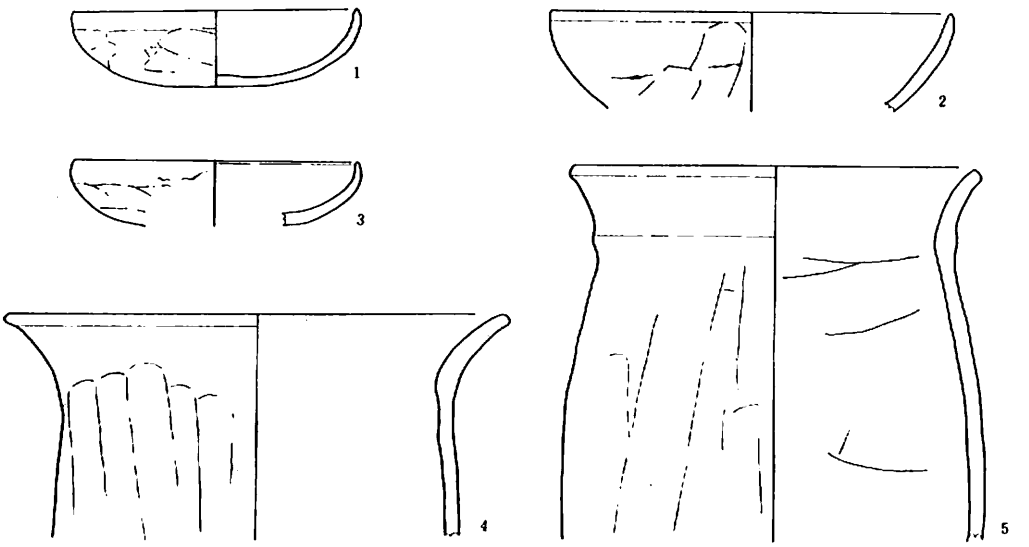
出土遺物はカマドを中心に比較的多くの破片を採取したが、図示し得たものは5点である。

第5表　2号住居址出土遺物

| 番号 | 器種 | 法量 | 器形の特徴 | 成・整形の特徴 | ①胎土②焼成③色調④残存⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器 坏 | (11.2)<br>3.0<br>－ | やや偏平な丸底の底部から体部内湾気味に外傾し、口縁部短く直立する。 | 口縁部内外面横ナデ。体部外面挽削り後、粗いナデ。内面ナデ。 | ①雲母含む。②やや不良。③橙褐色。④底部内面に「X」の挽記号。 |
| 2 | 土師器 坏 | (15.8)<br>(3.8) | 丸みをもって立ち上がる体部より口縁部短く直立気味となる。 | 口縁部内外面横ナデ。体部外面挽削り後、ナデ。内面ナデ。 | ①砂粒含む。②良好。③橙褐色。④1/4。⑤外面に油煙付着。 |
| 3 | 土師器 坏 | (11.0)<br>(2.5)<br>－ | 丸みを呈する体部より口縁部短く直立する。 | 口縁部内外面横ナデ，体部外面挽削り後、粗いナデ。内面ナデ。 | ①砂粒含む，②良好，③褐色，④1/6。 |
| 4 | 土師器 甕 | (19.5)<br>(8.8) | 長胴甕と思われ、口縁部肥厚気味で、胴部からゆるやかに外反する。 | 口縁部内外面横ナデ，胴部外面横位の挽削り，内面ナデ。 | ①石英粒多量に含む，②不良，③黄褐色，④口縁部～肩部1/3。 |
| 5 | 土師器 甕 | (15.8)<br>(14.8)<br>－ | 長胴を呈すると思われ、内湾気味の胴部から口縁部弱く外反する。 | 口縁部内外面横ナデ，胴部外面横位の挽削り後、粗いナデ。内面ナデ。 | ①雲母多く含む。②不良。③黄褐色。④口縁部～胴上半部1/6。 |


P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
A
A'
B
B'
1．黒色土：C軽石含む。
2．黒色土：ローム粒含む。
3．褐色土：C軽石・ローム粒・炭化物含む。
4．褐色土：ローム粒・ロームブロック多く含み、粘性もつ。
5．褐色土：ローム粒多量に含む。
6．黒褐色土：ロームブロック
7．暗茶褐色土：ローム粒含む。
L：137.70M
0
2M
カマド
1．灰褐色土：B・C軽石含む。
2．灰茶褐色土：焼土ブロック・炭多量に含む。
3．茶褐色土：焼土粒・焼土ブロック含む。
4．褐色土：C軽石・焼土粒・炭化物含む。
5．暗茶褐色土：粘土・ローム粒・小砂礫混合土
a
a'
b
b'
C
C'
L：137.50M
0
1M

第29図　2号住居址




第30図　2号住居址出土遺物

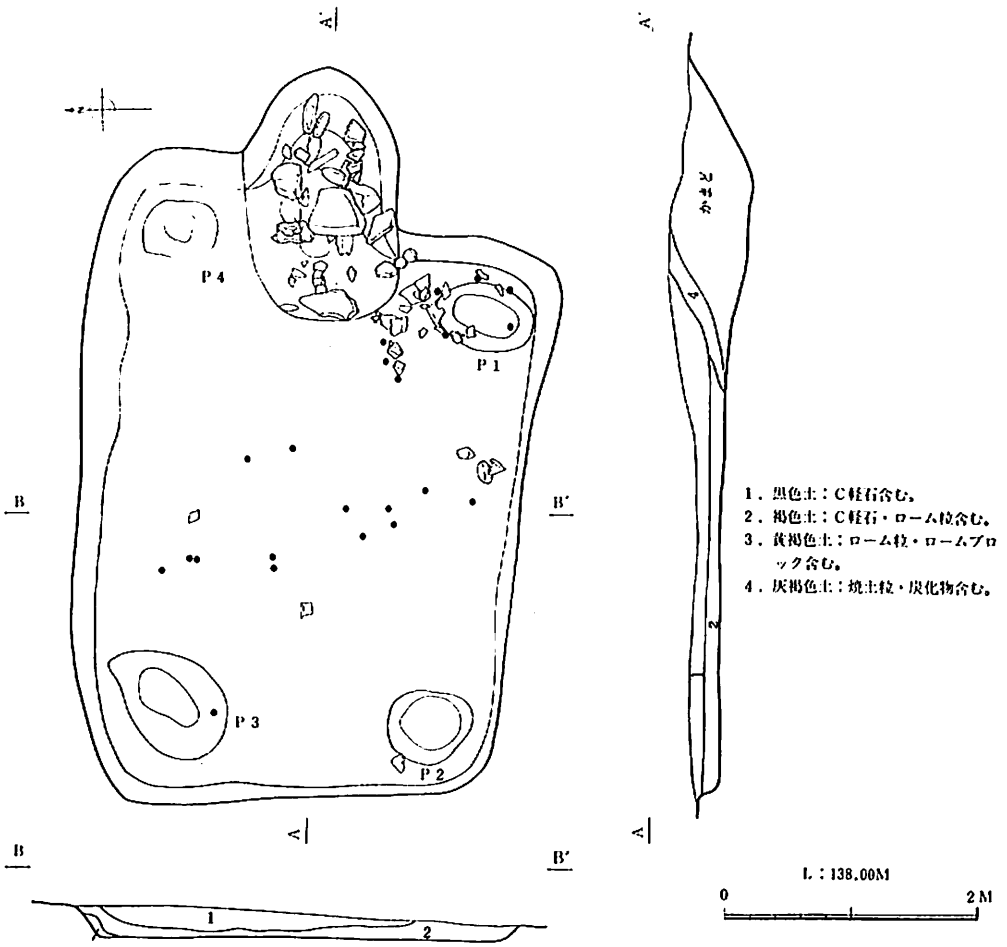
0　10cm

**3号住居址**　（第31～33図、図版9－1、10－3～6、12）

本址はj－18・19グリッドで検出され、2号住居址の西8m程に位置する。平面不整長方形を呈する。主軸はN92°Eを指向し、東壁ほぼ中央にカマドをもつ。各壁長は東西南北それぞれ、3.40・2.85・4.05・5.00mを測る。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、確認面からの深さは35cm程を測る。覆土は上層黒色土、下層褐色土を基調とする。床面は全般に踏み固めが弱い。ピットは4基検出され、その位置より主柱穴かと考えられた。P1は南東隅で検出され、平面楕円形を呈する。規模は0.51×0.82m、深さ7mを測る。P2は南西隅で検出され、平面不整楕円形を呈する。規模は0.60×0.68m、深さ13cmを測る。P3は北西隅で検出され、平面不整楕円形を呈する。規模は0.72×1.08m、深さ13cmを測る。P4は北東隅で検出され、平面楕円形を呈する。規模は0.46×0.58m、深さ15cmを測る。

カマドは壁外に67cm程張り出して構築されていた。袖は左袖部のみの残存、と言うより寧ろカマドの掘形より堆すと片袖のみの構築と考えられる。右袖はそのまま地山が利用されていた可能性が強い。また本址カマドのみ、内壁に白黄褐色粘土が厚さ5cm程に張りつけてあった。そしてカマド補強材、天井部懸架材として礫が多数利用されていた。一部でその位置に偏在が認められたものの、大半は原位置での検出であった。燃焼部は平面楕円形を呈し、燃焼部から煙道部にかけては多量の焼土・灰が検出された。ほぼ平坦な燃焼部から煙道部を経て、煙道部から壁外への煙出部へと出る。

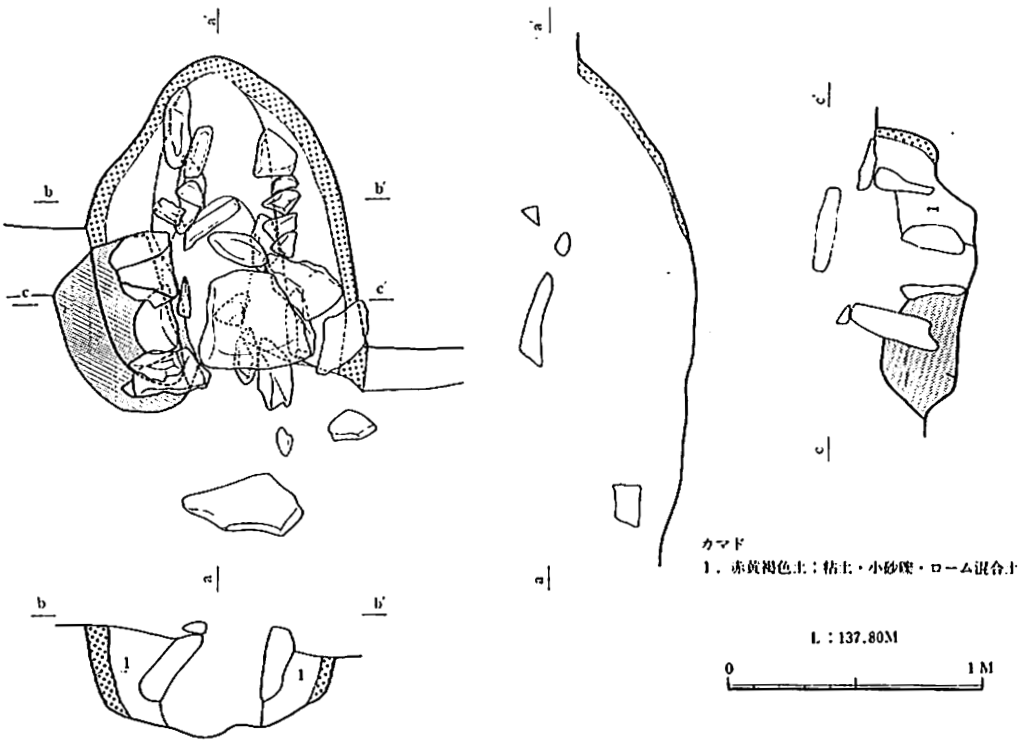
遺物は多数検出されているが、図示し得たものは8点である。

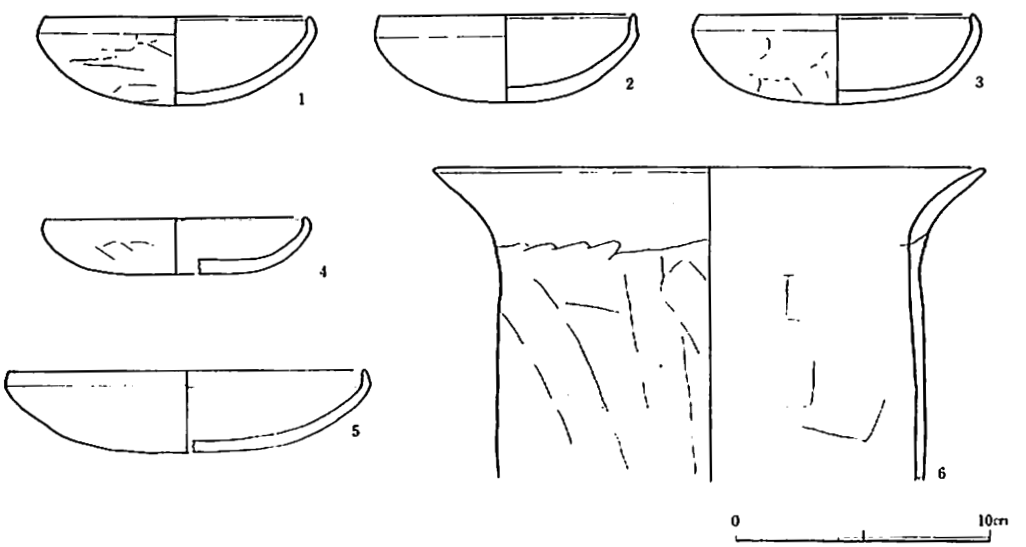



第31図　3号住居址

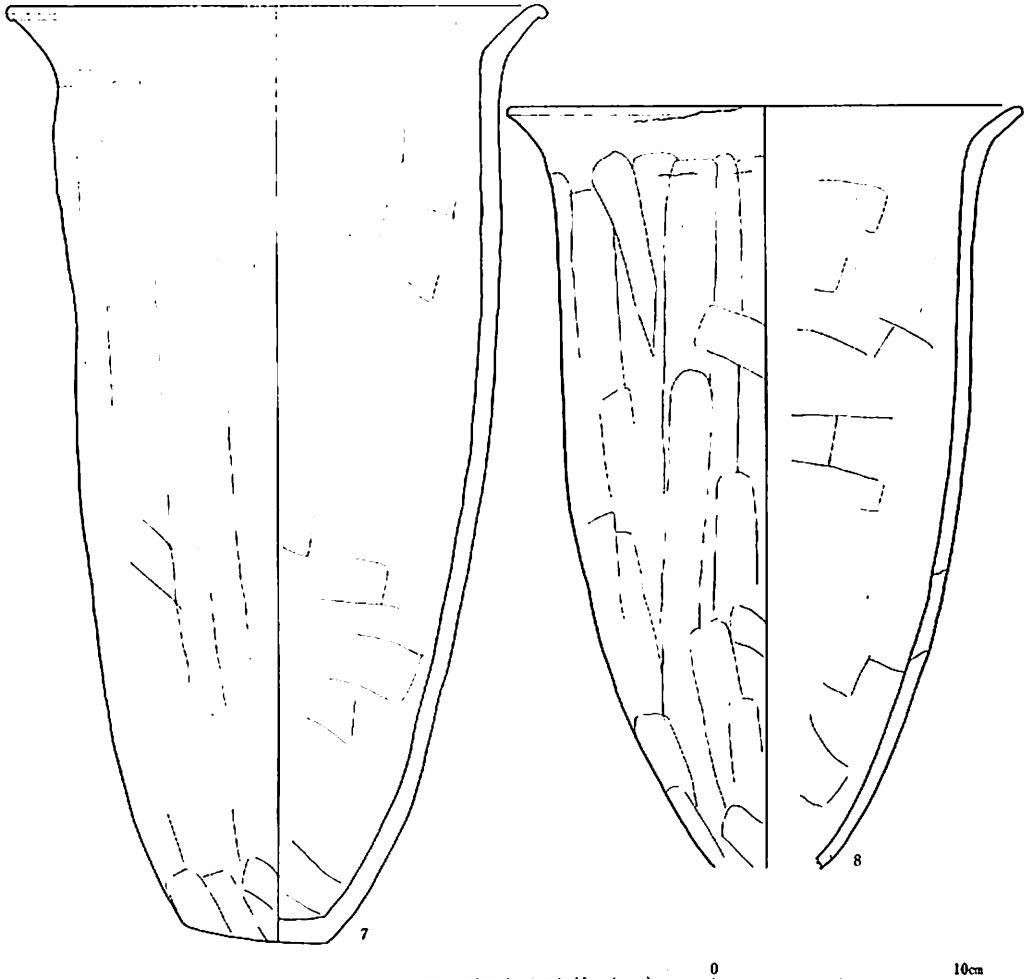
第6表　3号住居址出土遺物（1）　（単位：cm）

| 番号 | 器種 | 法量 | 器形の特徴 | 成・整形の特徴 | ①胎土②焼成③色調④残存⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器 坏 | 10.4<br>3.5<br>– | 球状を呈する体部より口縁部短く内傾する。 | 口縁部内外面横ナデ。体部外面篦削り後、粗いナデ。内面ナデ後、磨き。 | ①雲母含む。②通有。③黄褐色。④完形。 |
| 2 | 土師器 坏 | 10.1<br>3.4<br>– | 球状を呈する体部より口縁部短く直立する。 | 口縁部内外面横ナデ後、磨き。体部外面篦削り。内面ナデ後、磨き。 | ①雲母含む。②不良。③橙褐色。④完形。 |
| 3 | 土師器 坏 | (10.8)<br>3.5<br>– | 球状を呈する体部より口縁部短く直立気味に内傾する。 | 口縁部内外面横ナデ。体部外面篦削り後、粗いナデ。内面ナデ後、磨き。 | ①雲母含む。②やや不良。③黄褐色。④⅔。⑤底部内面に「X」の篦記号。 |
| 4 | 土師器 坏 | (10.3)<br>2.2<br>– | 偏平な丸底の底部より体部内彎気味に外傾し、口縁部で短く直立する。 | 口　部内外面横ナデ。体部外面篦削り後、粗いナデ。内面ナデ。 | ①小砂礫含む。②通有。③暗橙褐色。④¼。 |
| 5 | 土師器 坏 | (13.9)<br>3.2<br>– | やや偏平な丸底の底部から体部大きく開き、口縁部内傾気味に短く直立する。 | 口縁部内外面横ナデ。体部外面篦削り後、ナデ。内面ナデ。 | ①砂粒含む。②不良③橙色、④⅙。 |




第32図　3号住居址カマドと出土遺物（1）




第33図　3号住居址出土遺物（2）

第7表　3号住居址出土遺物（2）　（単位：cm）

| 番号 | 器種 | 法量 | 器形の特徴 | 成・整形の特徴 | ①胎土②焼成③色調④残存⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 土師器甕 | (21.8)<br>(12.5)<br>— | 長胴甕で口縁部直線的に外反する。 | 口縁部内外面横ナデ。胴部外面縦位の箆削り。内面ナデ。 | ①雲母多量に含む。②通有。③淡橙褐色。④口縁部～胴上半部 1/2。 |
| 7 | 土師器甕 | 20.8<br>36.9<br>5.8 | 長胴甕。平底から胴部直線的に外傾し、口縁部で外反する。端部は丸める。 | 口縁部内外面横ナデ。胴部外面箆削り後、粗いナデ。内面ナデ。 | ①雲母・石英住多量に含む。②やや不良。③黄橙褐色。④3/4。⑤イビツ。 |
| 8 | 土師器甕 | 20.0<br>(30.0)<br>— | 長胴甕で底部平底を呈すると思われ、口縁部ゆるく外反する。 | 口縁部内外面横ナデ。胴部外面縦位の箆削り。内面ナデ。 | ①石英多量に含む。②通有。③橙褐色。④3/4。底部全損。 |

# 第５章　出土人骨・歯の鑑定結果

国立科学博物館人類研究部　　清 田 優 司

本遺跡は群馬県前橋市西大室町277-1 外にあり、人骨は前橋市教育委員会と山武考古学研究所による調査の際、３号墳石室から発見された。昭和61年10月のことである。本遺跡の古墳は５基あり、須恵器、直刀などが出土している。３号墳石室からも人骨のほかに、鉄ぞく、馬具、耳環が発見され、約７世紀のものと推定されている。

出土した人骨の保存状態は極めて悪く、しかも数体分のものが混ざって残存していた。以下にその概要を記す。（注：本文中の標本番号は、第19図の番号と同一である）。

**下顎骨**　（標本番号３）（図版16）

保存状態の極めて悪い下顎骨の骨体破片（約20×70mm）が残存（図版16上）。成人個体のものと思われる。性別不明。

**鎖骨・右**　（標本番号23）（図版16）

近位端の下部の一破片（図版16下）。成人のものと思われるが、性別不明。

以上のほかに多数の小骨片が残存していた。主なものは成人の脳頭蓋の小骨片および成人右側頭骨錐体の一部（標本番号48）、成人環椎後弓左半（48）、椎骨関節面の一部（22）、椎骨椎弓小片（62）、助骨小片（27）、長骨小片（27、32、62）などである。標本番号20、21、30の小骨片中には同定できるものがなかった。

上記下顎骨や鎖骨などの骨片の相互関係は全く分からないが、少なくとも骨からは、成人１体分が埋葬されていたことを確認できる。

次に、遊離歯の観察結果を述べる。個々の歯に関する計測と観察結果は表１に示すとおりである。計測は藤田（1949）に従って行なった。歯の咬耗度はブロカの分類法(Martin & Saller、1957）による。また、歯冠形質の分類基準は Mizoguchi（1977）を使用した。

なお、以下においては、各歯を記号で示すことにする。Ｉは切歯、Ｃは犬歯、Ｐは小臼歯、Ｍは大臼歯である。また、乳歯は小文字で示す。このそれぞれの右肩又は右裾に付けた添字は上顎又は下顎の何番目の歯であるかを示す。例えば、$M^2$とあれば、上顎第２大臼歯のことである。

**乳歯**　（図版17）

左$C^-$（標本番号66）、左右$m^1$（69.65）、右$m^1$（36）の計４本（図版17）。形態、保存状態等

から、恐らく同一個体に属するものと思われる。咬耗がいずれも軽微なので、3～4才くらいの幼児のものと推定される。

**永久歯**　(図版18)

上顎切歯。左$I^1$(67；図版18)、右$I^2$(9)左$I^2$(35)の計3本が残存。67と9は同一個体か否か不明だが、いずれも成人のもの。35は恐らく形成途上で、67や9とは別個体の、恐らく幼児のものと思われる。従って、ここでの最小個体数は成人1、幼児1の計2個体。

上顎犬歯。左$C^-$2本(58、71)残存。明らかに2個体の成人のもの。咬耗状態より、大きい方(71；図版18)が若く、小さい方(58)が年長と思われる。最小個体数は2(成人2)。

上顎小臼歯。左右$P^1$(56、17)と左右$P^2$(57、59)は同一個体であることが確実である。(図版18)。これらは全体に大きい。右$P^{1(?)}$(24)と右$P^2$(60)は同一個体の可能性もあるが、よくわからない。左$P^{1(?)}$(6)は少なくとも、24や60とは別個体のものと思われる。左$P^-$(32)は咬耗や保存の状態から、24・60・6とは別個体と思われる。上顎小臼歯のみによる最小個体数は4(成人4)。

上顎大臼歯。左$M^1$(61)、左右$M^2$(2、18)は全体に大きく、同一個体に属するものと思われる(図版18)。左$M^1$(8)と右$M^1$(撹乱部)も別の同一個体に属する。左$M^{2(?)}$(64)も8と「撹乱部」のものと同じ個体に属するかもしれないが、確言できない。左$M^1$(50)と右$M^1$(70)は別の同一個体のもの。右$M^{1(?)}$(55)と左$M^{2(?)}$(19)はそれぞれ上記のいずれとも別個体と思われるが、詳細不明。結局、最小個体数は3(成人)。

下顎切歯。　$I_-$(31)1本のみ残存。これは恐らく未萌出で、幼児のものと思われる。

下顎犬歯。左$C_-$(15)と右$C_-$(54)は同一個体に属し、比較的大きい(図版18)。エナメル形成不全の線状痕が同様に認められ、幼児期に甚しい健康不良状態を経験したものと考えられる。左$C_-$(9)は別のもっと年長の個体に属する。従って最小個体数は2(成人2)。

下顎小臼歯。左$P_1$(5)、左右$P_2$(7、16)は同一個体に属するものと思われる。(図版18)。左$P_1$(68)と右$P_1$(53)は恐らく異なる個体のものであろうが、確言できない。右$P_1^{(?)}$(26)が$P_2$ならば53と同じ個体に属する可能性もあるが、詳細不明。左$P_2$(53)と右$P_2$(66)は同一個体の可能性もあるが、確言できない。左$P_2$(?)(33)は、少なくとも7や53とは異なる個体に属するものと思われる。右$P_2$(72)は保存状態が良くなく、16や66とは確実に個体。結局ここでは、最小個体数は3(成人3)となる。

下顎大臼歯。右$M_1$(11)は比較的大きい(図版18)。右$M_1$(10)と左$M_1$(12)は11とは別の同一個体に属する。右$M_1$(75)は恐らく未萌出で、幼児のものと思われる。左$M_{1(?)}$(34)は相当に咬耗が進み、上記のいずれとも別個体と思われる。左$M_{3(?)}$(1)は11と同じ個体に属するかもしれないが、確実なことは言えない。残りの右$M_{2(?)}$4個(13、29、52、撹乱部)と右$M_-$(49)左$M_{1(?)}$(4、51、31)の3個、左$M_{2(?)}$(3、28、73)および左$M_-$(31、32、63)の相互関係は不明。最小個体数は4(成人3、幼児1)となる。

以上をまとめてみると、歯からは少なくとも、成人4個体、幼児1個体の計5個体が埋葬されていたことが分かる。性別はいずれも不明である。成人のうち1個体は比較的大きな歯をもつ個体で、以下の歯がその同じ個体に属するものと思われる。

左$I^1$（67）、左$C^-$（71）、左右$P^1$、$P^2$（56、17、57、59）、左$M^1$（61）、左右$M^2$（2、18）、左右$C_-$（15、54）、左$P_1$（5）、左右$P_2$（7、16）、右$M_1$（11）。

また、乳歯（66、65、69、36）を持つ個体に、未萌出らしき永久歯（35、31、75）がすべて属する可能性もある。

歯の残存数や保存状態からみて、上記の複数の個体は必ずしも同じ時期に埋葬されたものではないと考えられる。即ち、上記のように、少なくとも1個体分だけは、その同じ個体に属すると思われる歯の数も多く、保存状態も良好だが、他方保存状態の悪い歯の数は少ない。これは、これらの個体が時期をずらして追葬された可能性が高いことを示す。

本遺跡出土人骨が属していた集団の特徴をここで報告した観察結果のみから論ずることは極めて難しいので、これ以上は述べないが、今後ますますこのような資料が蓄積されることを期待したい。

## 要　　約

前橋市小稲荷遺跡3号墳石室から若干の骨片と、比較的多数の遊離した永久歯ならびに乳歯が発見された。約7世紀のものと言われている。おもに歯の観察から、少なくとも5個体（成人4、幼児1）は埋葬されていたことが判明した。ただし、性別は分からない。これらの個体は時期をずらして、追葬された可能性が高い。

## 文　　献

藤田恒太郎　1949　歯の計測規準について。　人類学雑誌、61：27—32。

Martin, R., und K. Saller　1957 Lehrbuch der Anthropologie, dritte Aufl., Bd. I. Gustav Fis-cher Verlag, Stuttgart

Mizoguchi, Y. 1977 Genetic variability in tooth crown characters : Analysis by the tetracho-ric correlationn method. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. D,3:37-62.

## 第8表　小稲荷遺跡3号墳石室出土遊離歯

| 歯　種 | 標本番号 | 保存状態[1] | | 咬耗[2] | 歯冠径 | | 特記事項[3] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 歯冠 | 歯根 | | 近遠心径 | 頬舌径 | |
| 〈孔　南〉 | | | | | | | |
| 左$C^{-}$ | 66 | ○ | × | 1 | 7.3 | 5.9 | |
| 左$m^{2}$ | 69 | × | − | 1 | − | 10.5 | カラベリ結節(3)、咬頭数(4) |
| 右$m^{2}$ | 65 | ○ | − | 1 | 9.5 | 10.7 | カラベリ結節(3)、咬頭数(4) |
| 右$m_{2}$ | 36 | ○ | − | 1 | 10.8 | 9.0 | Y5パターン、第6咬頭(0) |
| 〈水　久　南〉 | | | | | | | |
| 左$I^{1}$ | 67 | △ | − | 1 | 8.5 | 6.7 | シャベル形(3) |
| 右$I^{2}$ | 9 | × | − | (1) | 6.5 | − | |
| 左$I^{2}$ | 35 | × | − | − | − | − | 恐らく未萌出 |
| 左$C^{-}$ | 58 | ○ | − | 2 | 7.9 | 8.4 | エナメル形成不全 |
| 左$C^{-}$ | 71 | ○ | − | 1 | 8.7 | 9.3 | |
| 左$P^{1}$ | 56 | ○ | − | 1 | 8.0 | 10.5 | |
| 右$P^{1}$ | 17 | × | − | 1 | − | − | エナメル形成不全 |
| 左$P^{2}$ | 57 | ○ | − | 1 | 7.2 | 10.2 | |
| 右$P^{2}$ | 59 | ○ | × | 1 | 7.1 | 10.3 | |
| 右$P^{(3)}$ | 24 | × | × | 1 | − | (10.0) | |
| 右$P^{2}$ | 60 | ○ | − | 1 | 6.9 | 9.4 | |
| 左$P^{(3)}$ | 6 | ○ | − | 1 | 7.2 | 9.5 | |
| 左$P^{-}$ | 32 | × | − | 2 | − | − | |
| 左$M^{1}$ | 61 | ○ | − | 2 | 11.7 | 13.3 | カラベリ結節(1)、咬頭数(4) |
| 左$M^{2}$ | 2 | ○ | − | 1 | 10.8 | 12.5 | カラベリ結節(0)、咬頭数(4⁻) |
| 右$M^{2}$ | 18 | ○ | − | 1 | 10.9 | 12.2 | カラベリ結節(1)、咬頭数(4) |
| 左$M^{1}$ | 8 | × | − | 1 | − | 12.0 | カラベリ結節(2)、咬頭数(4) |
| 右$M^{1}$ | 撹乱部 | × | − | 1 | − | − | 咬頭数(4) |
| 左$M^{(3)}$ | 64 | △ | − | 1 | 10.2 | 11.4 | カラベリ結節(2)、咬頭数(4)、エナメル形成不全 |
| 左$M^{1}$ | 50 | △ | − | 1 | 10.3 | (11.5) | カラベリ結節(0)、咬頭数(4) |
| 右$M^{1}$ | 70 | ○ | − | 1 | 10.2 | 11.6 | カラベル結節(0)、咬頭数(4) |
| 右$M^{(3)}$ | 55 | × | − | − | − | − | |
| 左$M^{(3)}$ | 19 | ○ | − | 1 | 10.0 | 11.3 | カラベリ結節(1)、咬頭数(4−) |
| ?$I_{-}$ | 31 | × | − | − | − | − | 未萌出？ |
| 左$C_{-}$ | 15 | ○ | − | 1 | 7.9 | 8.6 | |
| 右$C_{-}$ | 54 | ○ | − | 2 | 7.6 | 8.5 | |
| 左$C_{-}$ | 9 | × | − | 2 | 7.1 | − | エナメル形成不全 |
| 左$P_{1}$ | 5 | ○ | − | 1 | 7.7 | 8.8 | 咬頭数(2+) |
| 左$P_{2}$ | 7 | ○ | − | 1 | 7.9 | 8.7 | 咬頭数(3) |
| 右$P_{2}$ | 16 | × | − | − | 7.7 | − | 咬頭数(3−) |
| 左$P_{1}$ | 68 | × | − | − | − | − | 咬頭数(3−) |
| 右$P_{1}$ | 53 | × | − | − | − | − | 咬頭数(2+) |

| 歯　体 | 標本番号 | 保存状態[1] | | 咬化[2] | 歯冠径 | | 特記事項[3] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 歯冠 | 歯根 | | 近遠心径 | 頬舌径 | |
| 右$P_{4(?)}$ | 26 | ○ | − | 1 | 7.2 | 7.5 | 咬頭数(2+) |
| 左$P_3$ | 53 | × | − | − | 7.8 | − | 咬頭数(3) |
| 右$P_3$ | 66 | × | − | − | − | − | 咬頭数(3) |
| 左$P_{4(?)}$ | 33 | × | − | 1 | − | 7.7 | |
| 右$P_3$ | 72 | × | − | 2 | − | 8.2 | 咬頭数(3) |
| 右$M_1$ | 11 | ○ | − | 1 | 12.9 | 12.1 | Y5パターン、第6咬頭(3)，subitiv小孔1つあり |
| 右$M_1$ | 10 | ○ | − | 1 | 11.6 | 11.5 | Y5パターン、第6咬頭(2) |
| 左$M_1$ | 12 | ○ | − | 1 | 11.5 | 11.2 | Y5パターン |
| 右$M_1$ | 75 | ○ | − | 0 | 11.0 | 10.3 | +5パターン、第6咬頭(0)，未萌出？ |
| 左$M_{1(?)}$ | 34 | × | − | 2 | − | − | Yパターン |
| 左$M_{2(?)}$ | 1 | △ | − | 0 | (12.3) | (12.4) | Y5パターン、第6咬頭(0) |
| 右$M_{2(?)}$ | 13 | ○ | − | 1 | 11.9 | 10.6 | X5パターン、第6咬頭(0) |
| 右$M_2$[(?)] | 29 | ○ | × | 1 | 11.1 | 10.1 | X5パターン、第6咬頭数(0) |
| 右$M_{2(?)}$ | 52 | ○ | − | 1 | 11.6 | 10.3 | X5パターン、第6咬頭数(0) |
| 右$M_{2(?)}$ | 規乱部 | △ | − | 1 | 11.1 | 10.6 | X5(−)パターン、第6咬頭数(0) |
| 右$M_3$ | 49 | × | − | − | − | − | |
| 左$M_1$[(?)] | 4 | × | − | 2 | − | − | Y5パターン |
| 左$M_{1(?)}$ | 51 | × | − | (1) | 11.4 | − | Y5パターン |
| 左$M_{1(?)}$ | 31 | × | − | 2 | − | − | 第5咬頭 |
| 左$M_{2(?)}$ | 3 | ○ | − | 1 | 10.7 | 9.5 | Y4パターン、第6咬頭(0) |
| 左$M_{2(?)}$ | 28 | × | − | − | − | − | |
| 左$M_{2(?)}$ | 73 | ○ | − | 0 | 10.0 | 9.4 | X5パターン，第6咬頭(2) |
| 左$M_3$ | 31 | × | − | (0) | − | − | |
| 左$M_3$ | 32 | × | − | 0 | − | − | Y5パターン |
| 左$M_3$ | 63 | × | − | − | − | − | |
| ?I? | 25 | × | − | − | − | − | |
| ?C? | 25 | × | − | − | − | − | |
| ?C又はP? | 25 | × | − | − | − | − | |
| ?C又はP? | 49 | × | − | − | − | − | |
| ?C? | 14 | × | − | − | − | − | |
| ?I又はC? | 35 | × | − | − | − | − | |
| ?M | 9 | × | − | − | − | − | |

1)　○良好、△やや良、×不良、−なし。

2)　P.ブロカの分類による。

3)　歯冠形質の発達程度の分類は Mizoguchi (1977)による。

# 第6章　まとめ

本遺跡では古墳5基、住居址3軒、土坑5基が検出された。また遺構外から、先土器時代の尖頭器、縄文時代の土器片・石器、弥生時代の土器片が出土している。これらの調査結果を周辺遺跡との関連を踏まえて、時代別に考えてみたい。

**旧石器時代**

調査の結果、本遺跡中央部3号墳南側の第Ⅴ層ソフトローム内より、頁岩製の尖頭器1点を検出した。周囲の調査も実施したが、他には検出されなかった。出土した尖頭器は片面加工である。本遺跡周辺から旧石器時代の遺物が、三屋遺跡・北三本堂遺跡・牛状遺跡・石山遺跡・柳久保遺跡より出土している。今回の調査により出土例は、数少ない出土例に加える事ができた貴重な資料と言うことができる。

**縄文時代**

包含層より前・中・後期に属す土器片・石器片が少量出土した。住居址は検出されず、陥し穴と考えられる土坑2基のみに終った。2号土坑よりスクレイパー2点が出土した。2基の土坑はその時期が不明であるが、周囲に前期の土器片が集中している事より、この時期のものと考えられる。

**弥生時代**

後期に属する土器片1点を検出しているが、遺構は検出されなかった。近接する西大室遺跡群でこの時期の遺構が検出されていることより、本遺跡では東側に遺構の存在が予想される。

**古墳時代**

古墳5基を検出したが、この時代の他の遺構（住居址、土坑等）は検出されなかった。何れも耕作に伴なう削平により、その原形を留めていない。3・4号墳は『上毛古墳総覧』に「荒砥村89号墳・同84号墳」と記載されている周知のものである。この2基に加えて、今回の調査により新たに3基の古墳が検出された。また本遺跡に東接する七ッ石古墳群で、7世紀代の所産とされる古墳5基が検出されている。このことから本遺跡を含めた当地が古墳の密集地として捉えられた。

古墳からの出土遺物は、土器・鉄器、それに人骨等であるが、5基の古墳の中で最大規模をもつ3号墳の出土遺物について若干触れてみたい。3号墳は直径約37mの規模をもつ円墳で、盗掘、および他に転用するために石室の大半の石が抜かれていた。石室はその残存状況より、

安山岩割石を用いる両袖型横穴式石室と考えられる。この石室及び前庭部よりそれぞれ多くの遺物が検出された。特に石室からは、多くの鉄製品が出土している。対をなすと思われる金銅張り耳環や鉄釘、鉄鏃それに馬具類である。これらと共に人骨・歯が検出され、この鑑定に国立科学博物館の溝口優司先生より玉稿を賜った。鑑定結果によると、3号墳石室内には少なくとも成人4人、幼児1人の計5個体が埋葬されていたことが明らかになった。この5個体は同時期に埋葬されたものではなくゃ時期を経て追葬された可能性が高いとのことである。伴出した鉄製品にも追葬の可能性が考えられるが、個々の明確な所属時期が判明しない以上、細かい上・下限の時期については言及を避けたい。また本墳では、前庭部底面より須恵器と共に湾曲直刀が検出された。この直刀は内彎直刀で、平棟平造りの大刀である。切先から26cm程の位置でU字形に曲げてある。後世の日本刀はこうした場合、曲がるか折れるかするという。本例の様な彎曲して出土した刀身について、古墳副葬品として類例をみず、極めて稀有の出土例である。歴史時代の山岳信仰遺跡には、例えば日光男体山頂遺跡・太郎山頂遺跡の出土例に見られるが如く、刀身を曲げ、あるいは折損するものがあり信仰上の儀礼かとされている。また経塚遺物の中に直刀・刀子を曲げてあるものが間々発見されている。これらも埋経に伴なう儀礼であろう。この様に類例が極めて少ない湾曲直刀は、今後の資料の増加によりその性格が明かになると考える。現時点では、他の歴史時代の出土例と同じく、儀礼的な様相をもつものと考えておく。

調査された5基の古墳のうち4号墳を除く4基は、安山岩を石材とする両袖形横穴式石室である。うち2号墳は胴張りのある古墳であり、5号墳は小形の石室である為乳幼児を埋葬したものと思われる。本遺跡の石室は、東接する七ッ石古墳群と同様に7世紀代のものと思われる。

**奈良時代**

住居址は、奈良時代の所産と思われる3軒を検出した。1軒は南カマド、他の2軒は東カマドを有し、出土遺物は少なかった。近接する西大室遺跡群でこの時期の遺構が検出されており、住居址が調査区東側に位置していることから集落は東に広がると推測される。

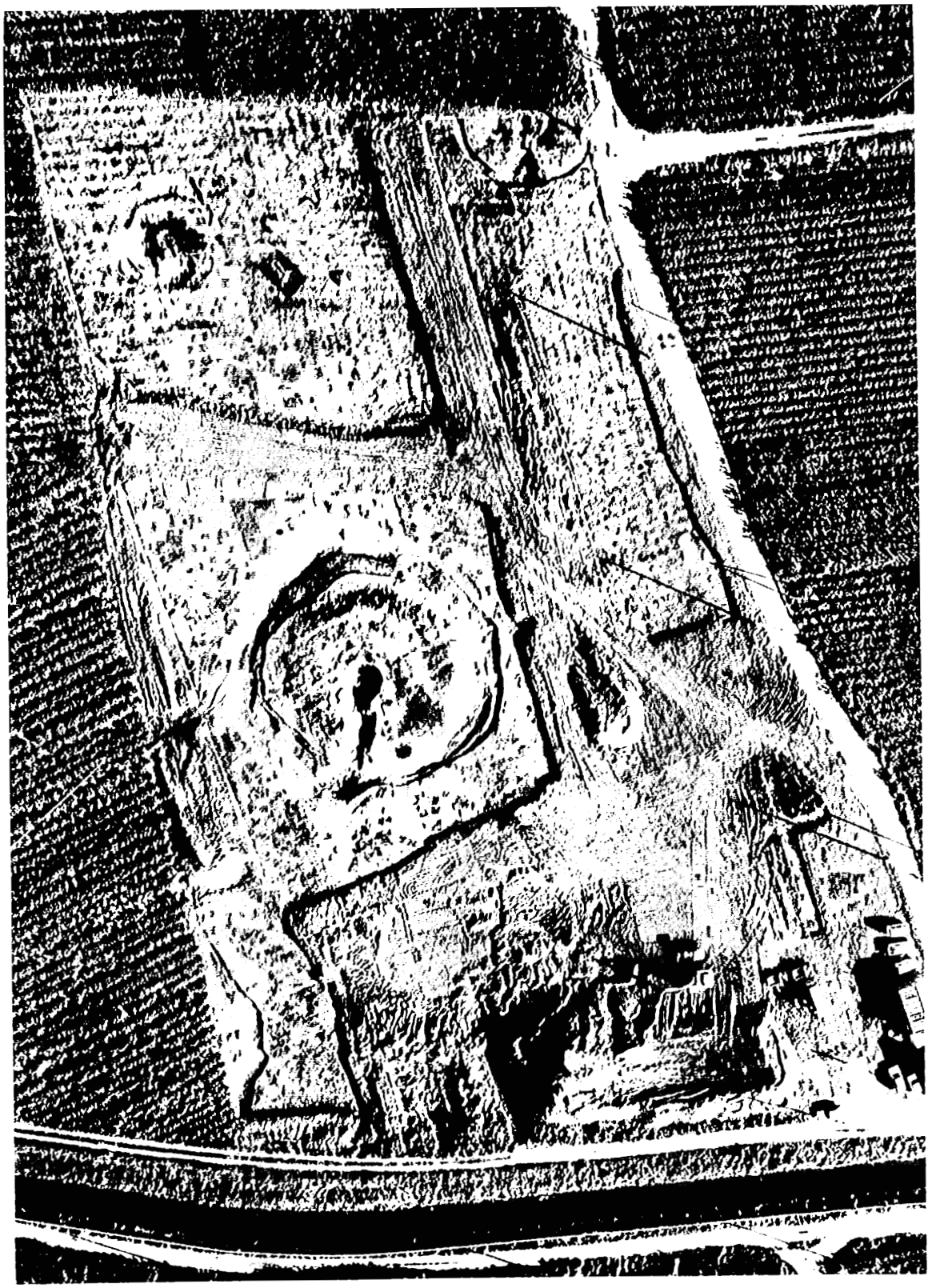
以上、今回の小稲荷遺跡の発掘調査での概略を時代別に追ってみた。西大室地域では初の旧石器時代に属する尖頭器の出土、また『上毛古墳総覧』に記載された2基の他に、新たに3基の古墳を検出し、特に類例の少ない彎曲直刀の出土など、本地域における古墳副葬品に好資料を加える成果が得られた。

参考文献

前橋市教育委員会　「富田遺跡・西大室遺跡群・清里南部遺跡群」　1980
前橋市教育委員会　「富田遺跡・西大室遺跡群」　1980
前橋市教育委員会　「西大室古墳群II」　1981
前橋市教育委員会　「西大室遺跡群」　1983
粕川村教育委員会　「西原古墳群」　1985
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　「柳久保遺跡群III」　1986

# 写真図版

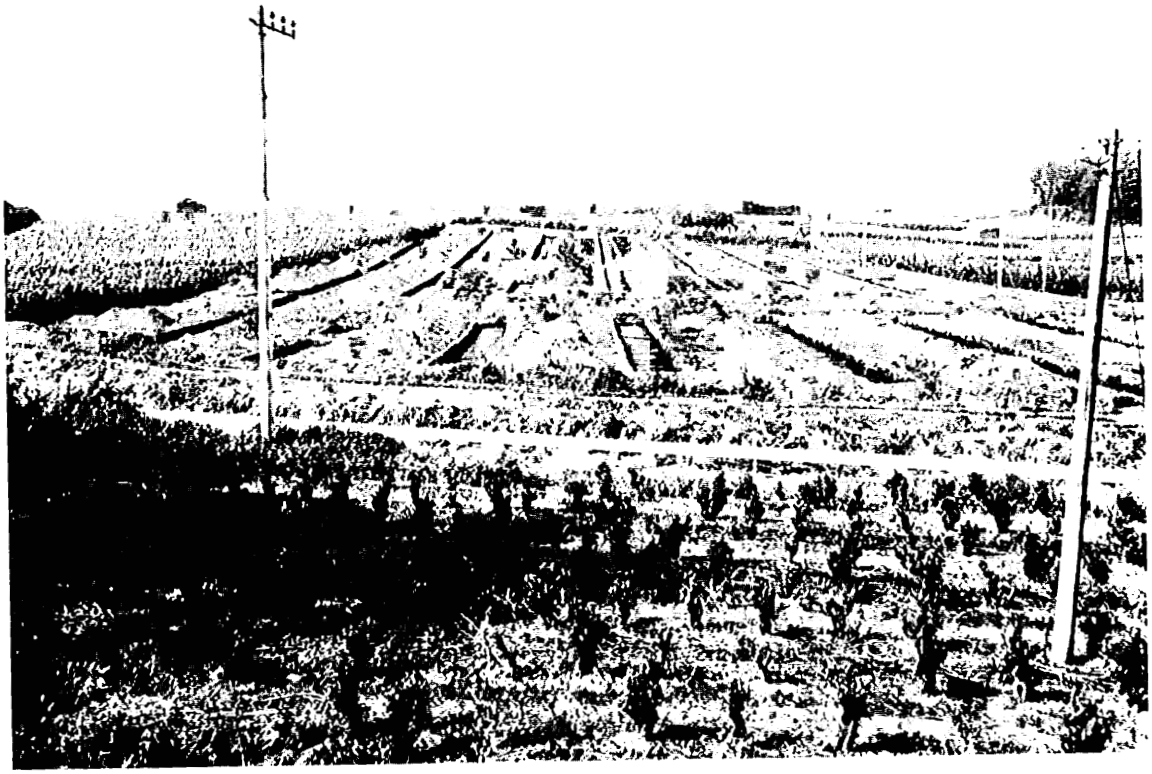
遺構写真



小稲荷遺跡全景

図版 2

遺構写真

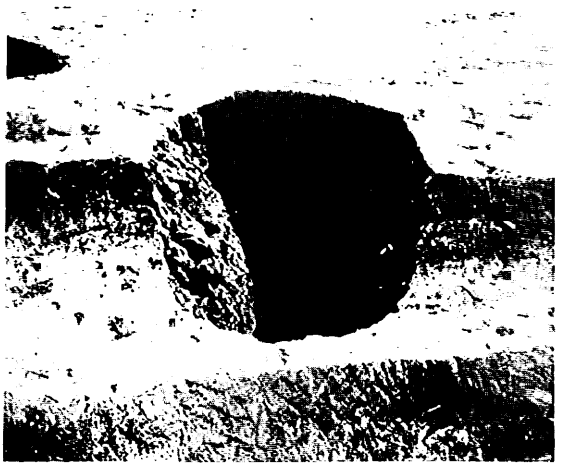


1．試掘調査全景（南から）

2．調査風景（北西から）

遺構写真

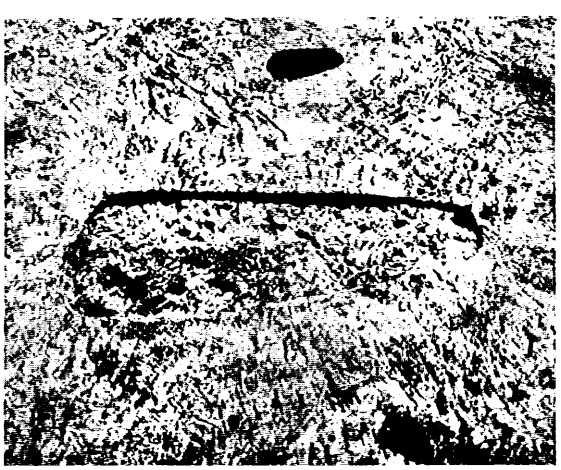
1. 1号土坑



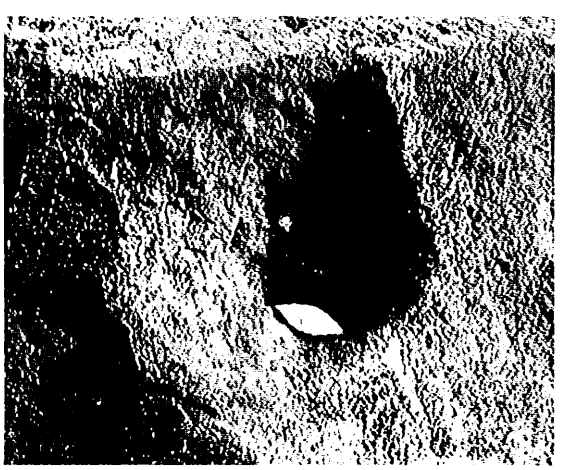
2. 2号土坑

3. 3号土坑

4. 4号土坑



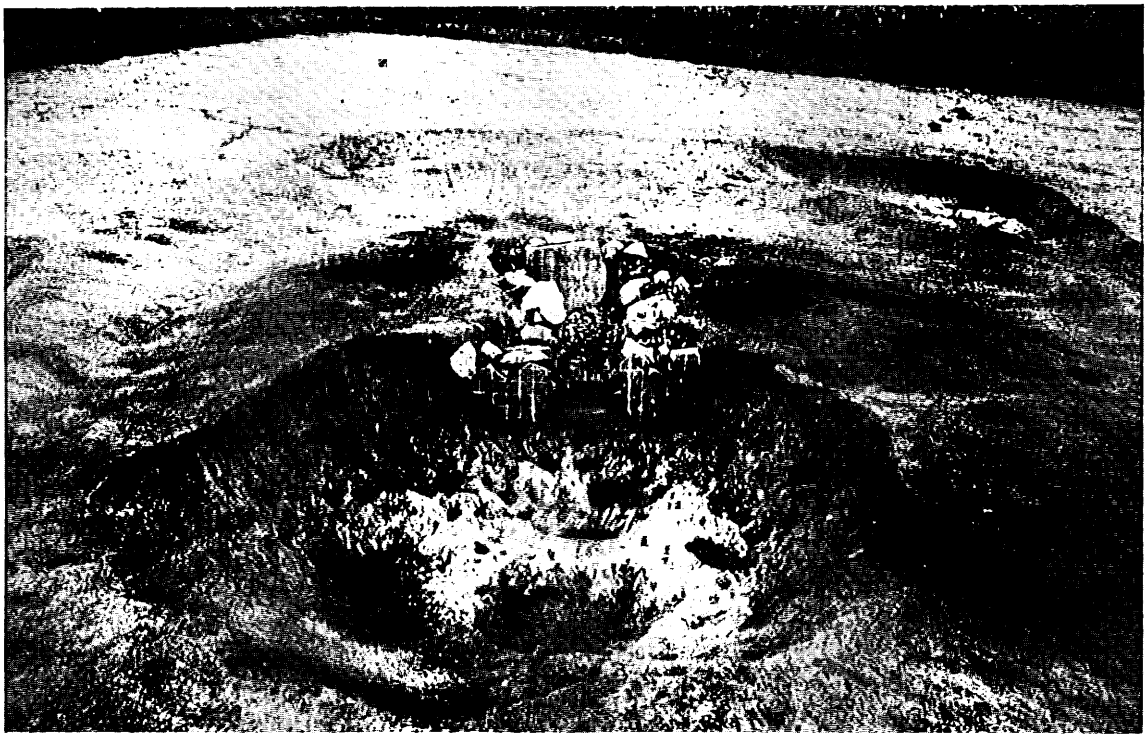
5. 5号土坑



6. 包含層遺物出土状況

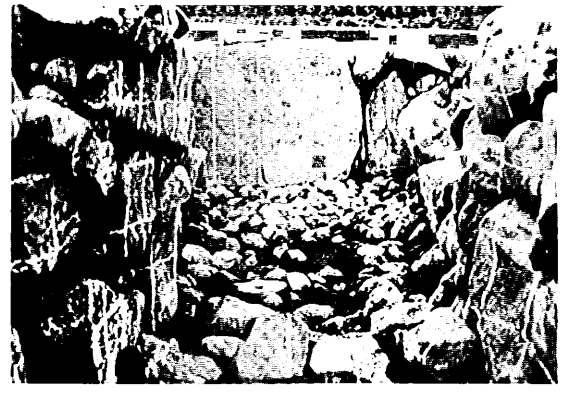
図 版 4

遺構写真

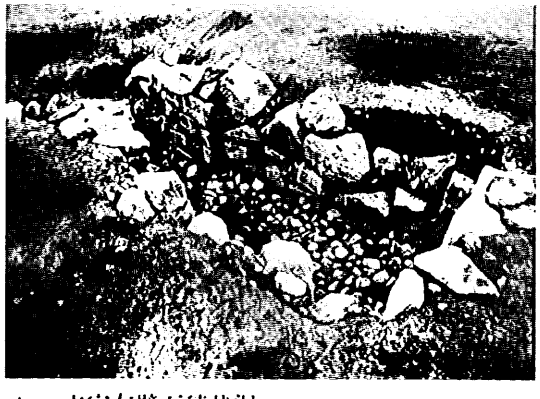


1. 1号墳全景（南から）

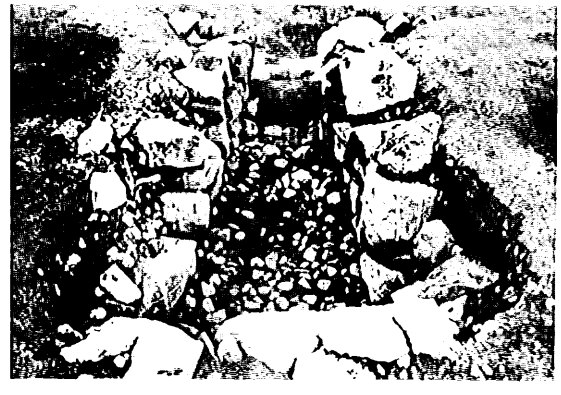
2. 羨門部閉塞状況



3. 玄室奥壁正面



4. 玄室左壁石積状況



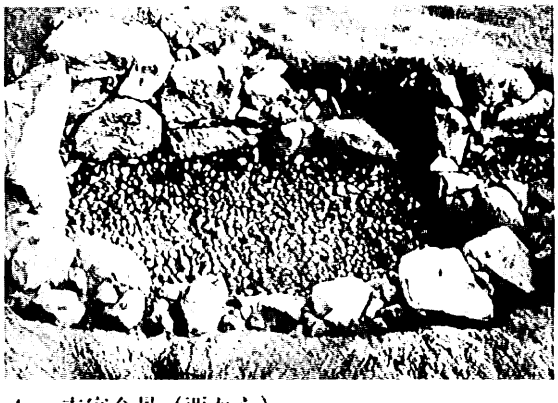
5. 羨道部開口状況（北から）

遺構写真

1. 2号墳全景（南から）

2. 羨門部閉塞状況

3. 玄門（北西から）



4. 玄室全景（西から）

5. 羨道部開口状況（北から）

図 版 6

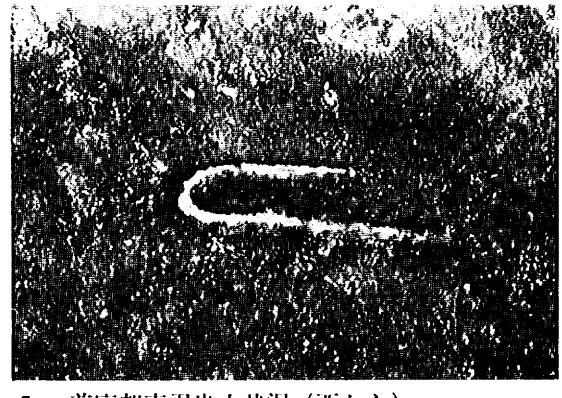
遺構写真

1. 3号墳全景（南から）

2. 前庭部遺物出土状況

3. 羨門閉塞状況

4. 前庭部遺物出土状況（西から）



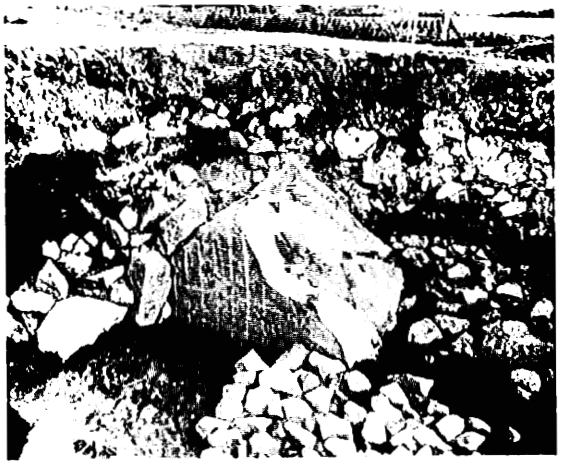
5. 前庭部直刀出土状況（西から）

遺構写真

1. 石室全景（北から）

2. 石室遺物出土状況（南西から）

3. 金環出土状況（北から）



4. 玄室右壁石積状況

5. 奥壁掘形断面（西から）

6. 掘形全景（南から）

図 版 8

遺構写真

1. 4号墳全景（東から）

2. 4号墳全景

3. 5号墳確認状況（南から）

4. 5号墳全景

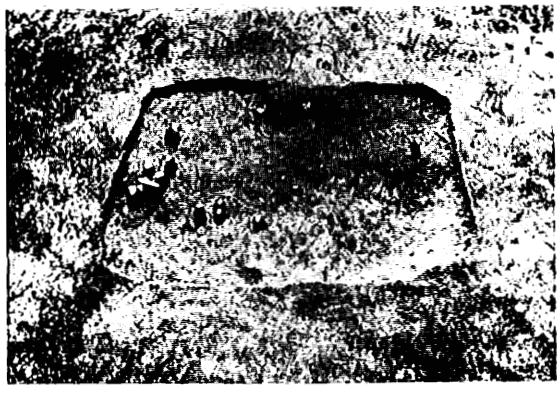
5. 玄室左壁石積状況

6. 玄室右壁石積状況

遺構写真

1. 1号・2号・3号住居址全景（西から）

2. 1号住居址全景（北から）



3. 1号住居址遺物出土状況

4. 2号住居址全景（西から）

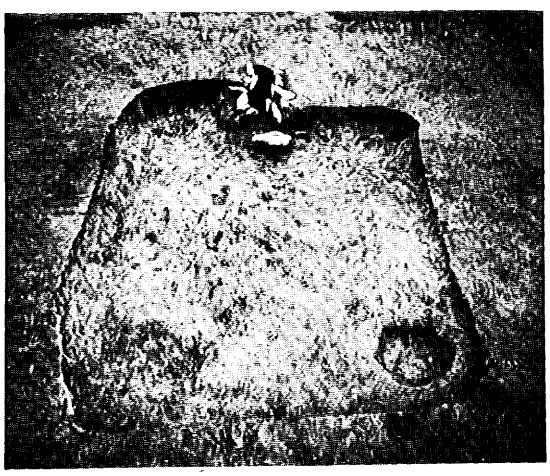
5. 2号住居址カマド

図 版 10

遺構写真

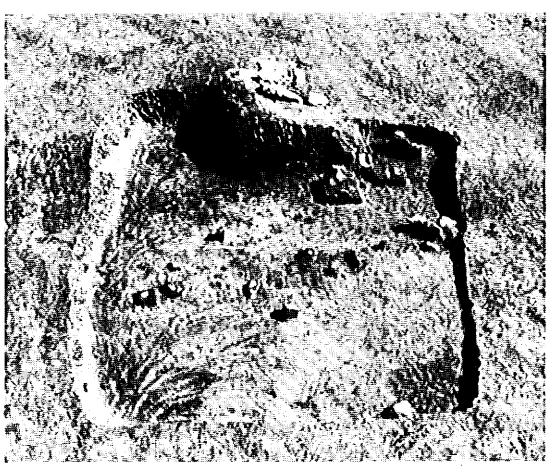
1.　2号住居址遺物出土状況

2.　2号住居址掘形

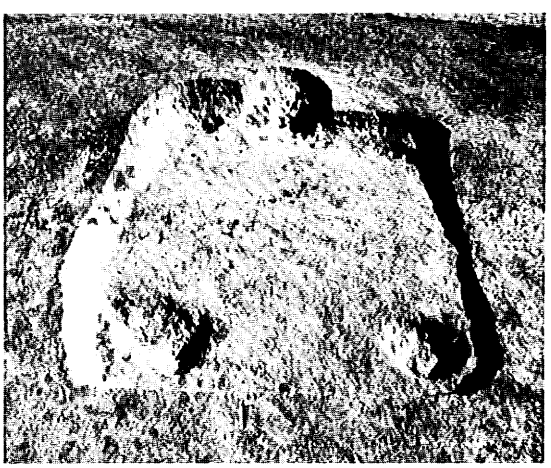


3.　3号住居址全景（西から）

4.　3号住居址カマド（北西から）



5.　3号住居址遺物出土状況



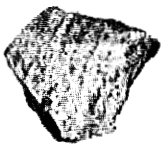
6.　3号住居址掘形

1
(5－2)

2
(5－3)

3
(5－4)

4
(5－5)


5
(5－6)

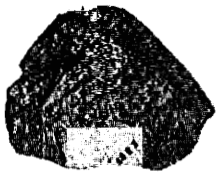
6
(5－7)

7
(5－8)

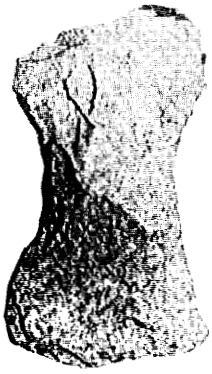
8
(5－9)

9
(5－10)

10
(5－11)


14
(5－15)

11
(5－12)


13
(5－14)

15
(5－16)

16
(5－17)

12
(5－13)

17
(5－1)

18
(7－1)

19
(7－2)

遺構外・2号土　出土遺物　[(　)内の数字は挿図の番号、以下同じ。]

図 版 12

遺物写真

1
(28－1)

2
(28－2)

3
(28－3)

4
(28－6)

5
(30－1)

6
(32－1)

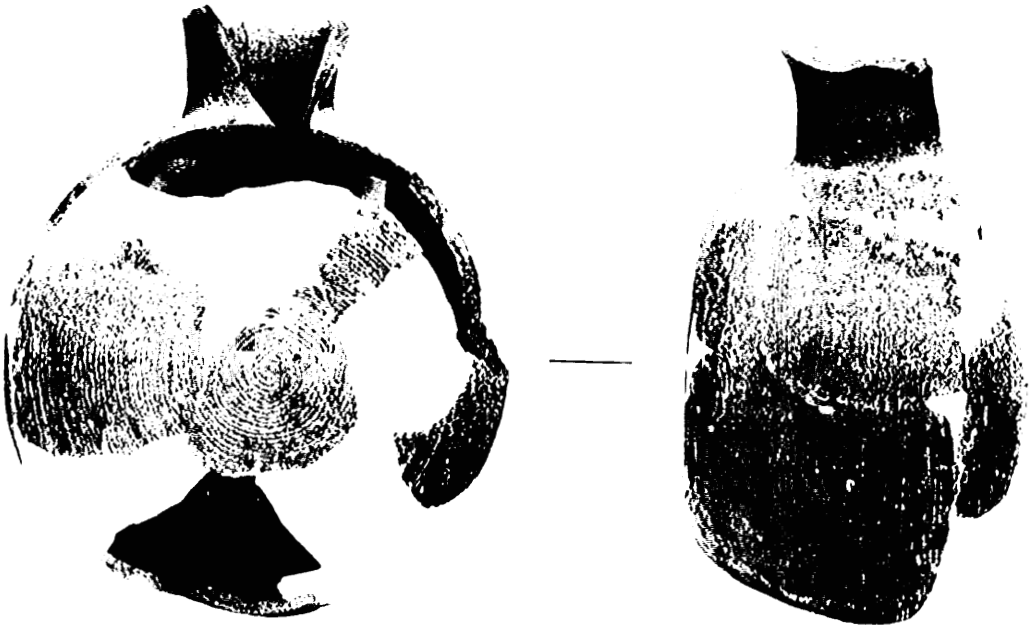
7
(32－2)

8
(32－3)

9
(33－6)

10
(33－7)

1～3号住居址出土遺物

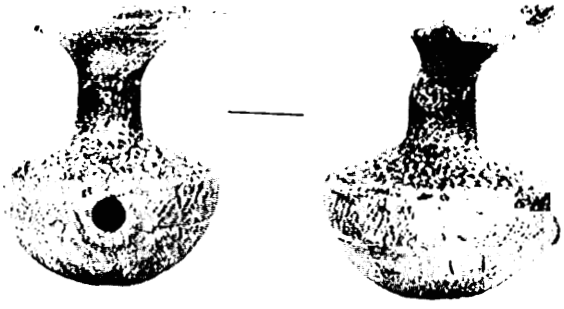


1
(14－3)

2
(20－2)

3
(20－3)

4
(20－4)



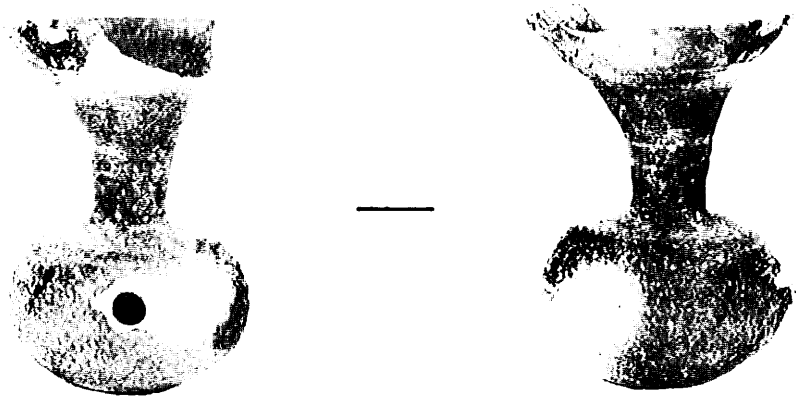
5
(20－5)

6
(20－7)

2・3号墳出土遺物（1）

図 版 14

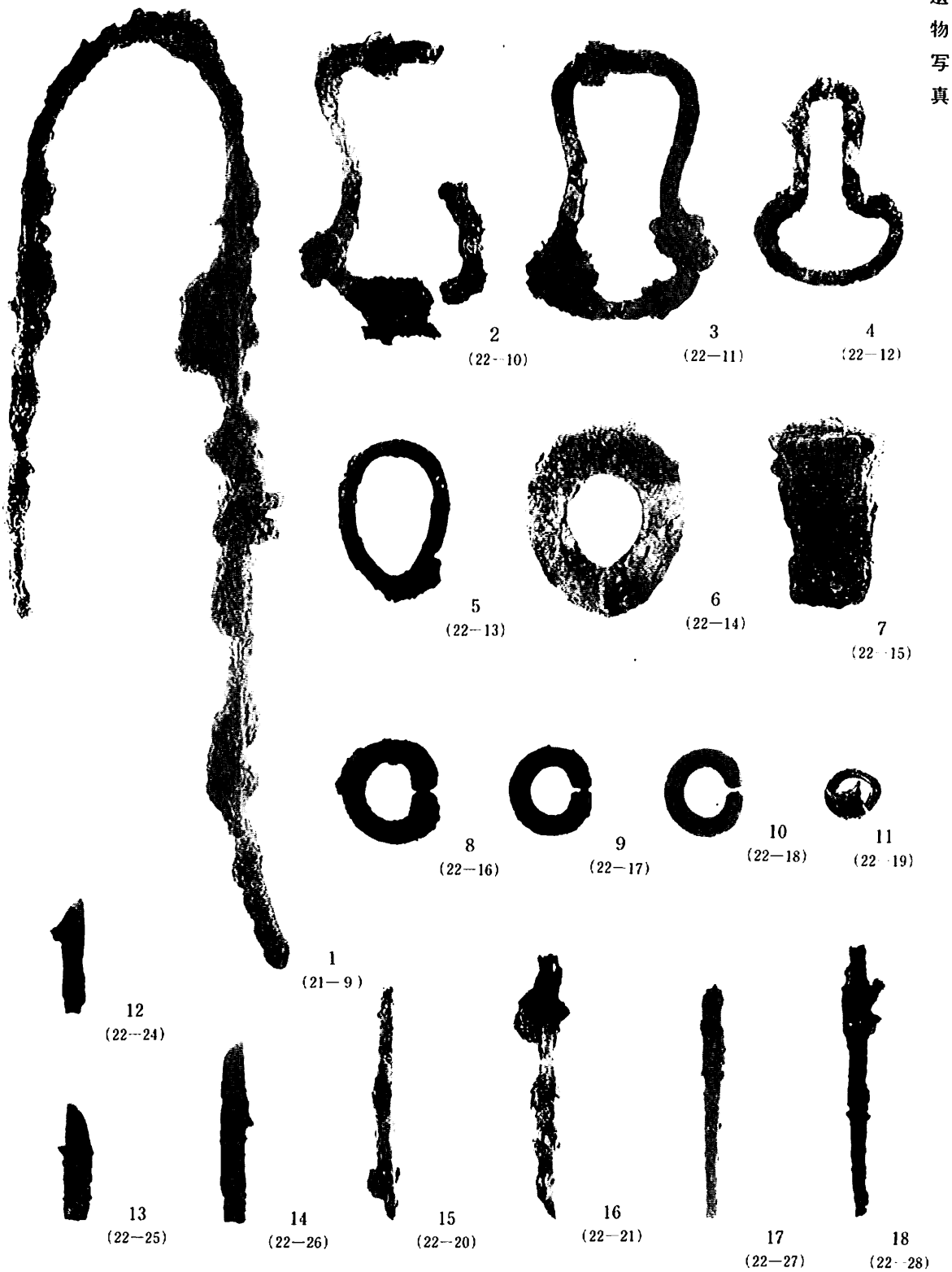
遺物写真



1
(20－6)

2
(20－8)

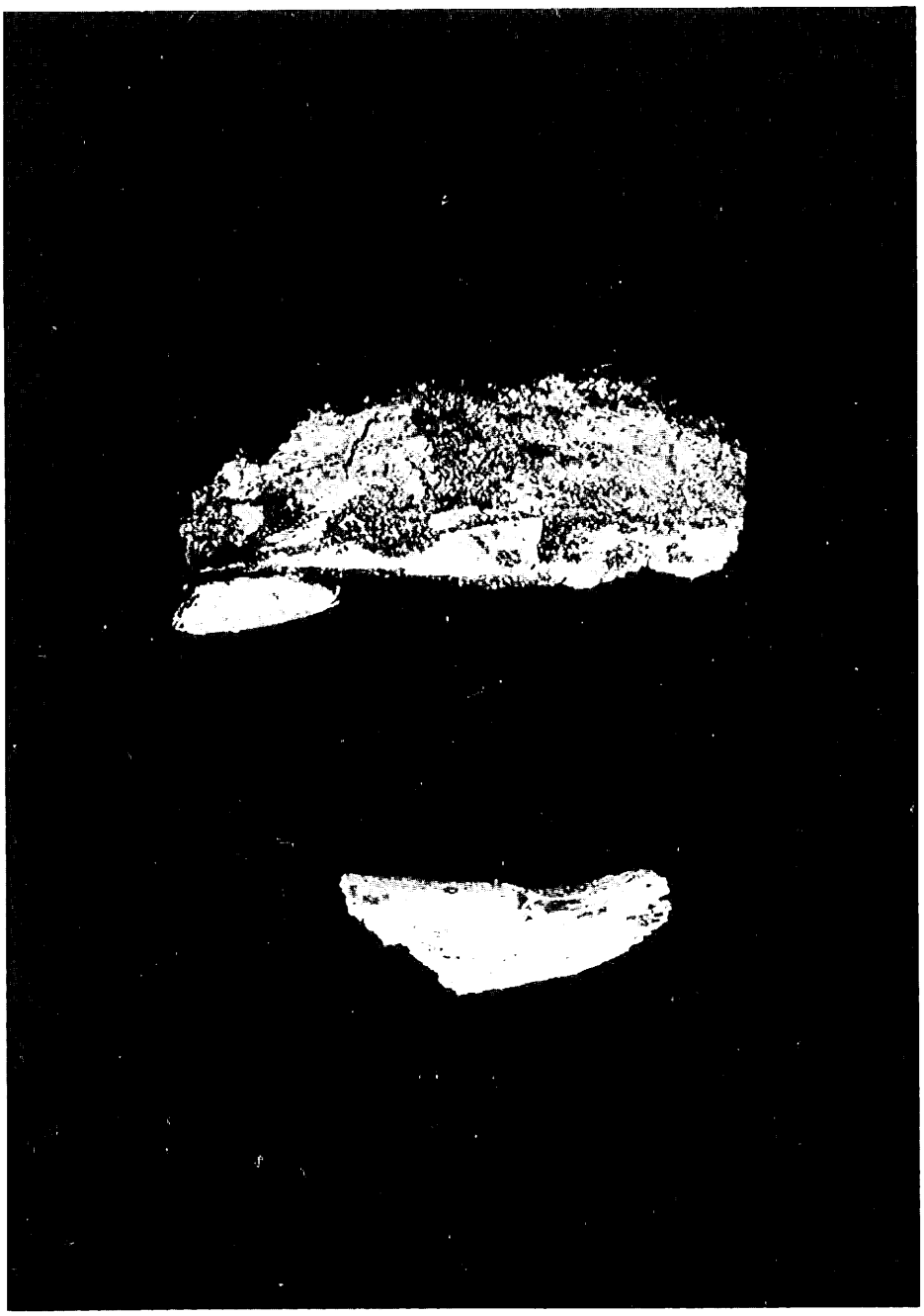
3号墳出土遺物（2）


1
(21—9)
2
(22—10)
3
(22—11)
4
(22—12)
5
(22—13)
6
(22—14)
7
(22—15)
8
(22—16)
9
(22—17)
10
(22—18)
11
(22—19)
12
(22—24)
13
(22—25)
14
(22—26)
15
(22—20)
16
(22—21)
17
(22—27)
18
(22—28)

3号墳出土遺物（3）

図版 16

出土人骨

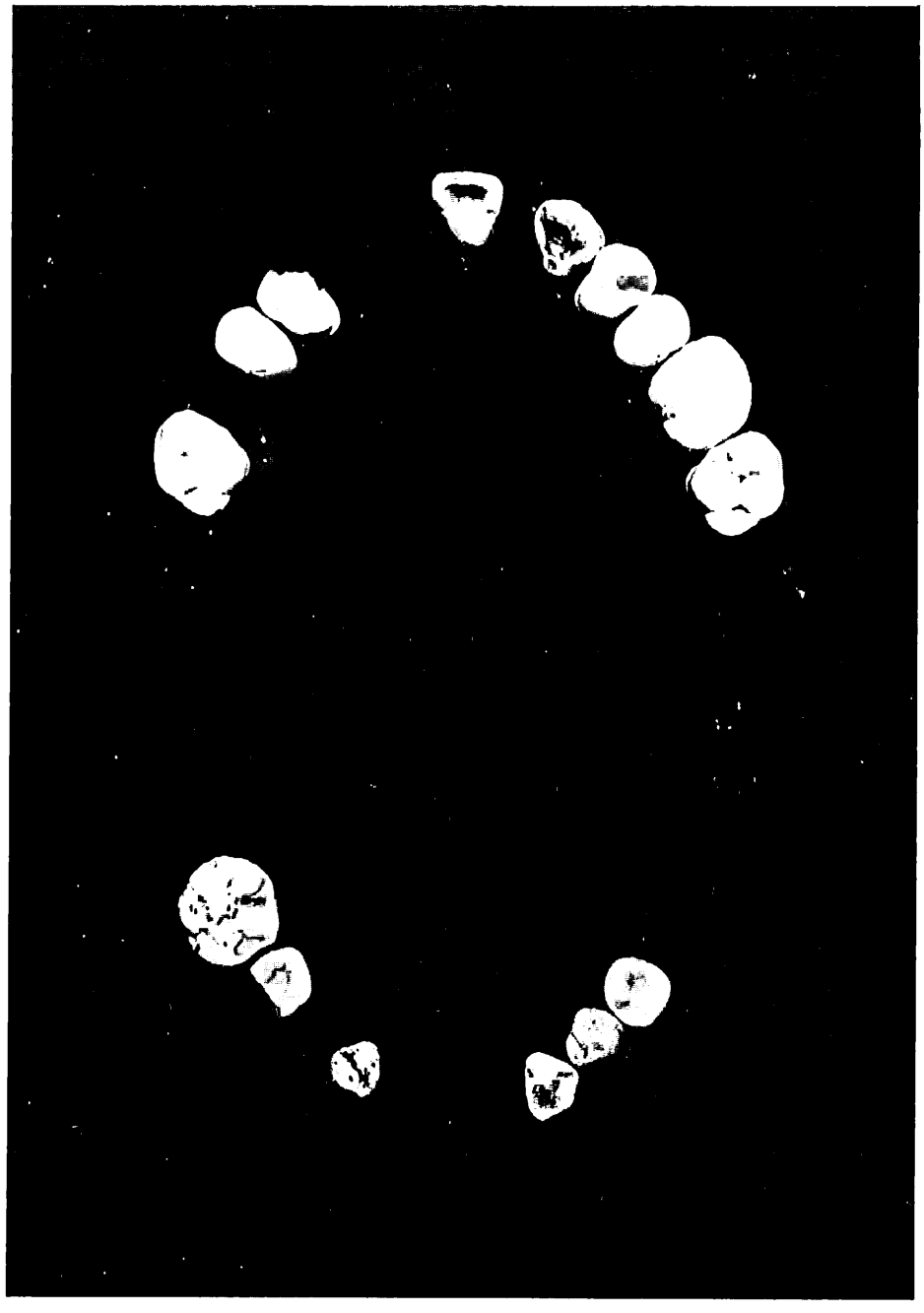


3号墳石室内出土
下顎骨（上、標本番号３）と
右鎖骨（下、標本番号23）の破片

出土歯

3号墳石室内出土
同一個体に属すると思われる乳歯

出土歯



3号墳石室内出土
同一個体に属すると思われる永久歯

小稲荷遺跡

印　刷　昭和62年3月19日

発　行　昭和62年3月20日

編　集　山武考古学研究所

発行者　前橋市教育委員会
　　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

印刷所　文化総合企画
　　0476(24)1563